
魔法少女リリカルなのは blood eight

龍王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは blood eight

【Nコード】

N2920S

【作者名】

龍王

【あらすじ】

機動六課が解散した翌年。フェイト・T・ハラウンは、突如休暇をもらう。休暇を利用して、なのはとはやての故郷・地球 海鳴市に訪れ、友人と再会する。

その友人を待っている間に、ある青年と出会い、ある事件に巻き込まれていく。事の発端は16年前。フェイトが出会った男の正体とは！？そして、謎の時空管理局研究所破壊事件の目的とは！？**

*この小説は、魔法少女リリカルなのはstrickers後の二次創作小説です。オリキャラ登場し、原作キャラ崩壊の恐れがあり

ますので、お嫌いな方は素通りして下さい。それでは、魔法少女リカルなのは blood edge 始まります。

プロローグ（前書き）

初めまして、龍王です。

初めて小説を書きますので、変な所があったらドンドン書いてください、それではどうぞー！！

ブローグ

白い部屋・・・薬品と血の匂い・・・白衣を着た大人たち・・・そして

「うあああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

叫び声を上げる俺。

俺はなぜこんな所にいるのか、俺はなぜこんな事をされているのか、疑問はいつぱいあった。

だが、それを聞く暇も余裕も、そして何より、度胸もなくて聞けなかった。

「・・・のじょ・・・は・・・どう・・・」

「もんだ・・・せん」

「……じゅの……けん……だ……」

大人たちの声が遠くから聞こえるが、俺の意識はそれを聞ける状態でもなくなっている。

目の前に漆黒の「何か」を持っている大人が近づく。

ああ、アレが来る……8度目のアレが……

その漆黒の「何か」を俺の胸にあて、その周囲に魔法陣が現れる。

そして、吸い込まれるように俺の中へと

「ぐあああああああああああああ！！！！！！！
 !!!!!!!!!!!!!!! ああああああああああ
 あああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

入って行く、それと同時に苦痛で俺は叫び声を上げるが周りの大人たちは助ける所か期待に満ちた目で俺の姿を見ていた。

だが、俺はそんな周りの目を見ることはなかった。

俺は、一番奥にいる不気味な笑みを浮かべる奴を、ひ弱ながらも睨んでいた。

そして、俺は意識を手放す。最後に見たのは美しい漆黒の刃だった。

登場人物紹介

名前：夜桜陵哉よさくらりょうや

性別：男

年齢：20歳

身長・体重：192? ・ 64kg

誕生日：4月9日

性格：DS 冷静沈着 仲間思い

家族構成：父 母（死亡） 妹

好き・特技：フェイト 仲間 母 妹 ブラックコーヒー ・ 戦闘 武器の扱い 料理

嫌い・苦手：父 病院 医務室 狸 ヒョロヒョロした奴 ・ 薬品 天然 怒ったフェイト

特徴：髪は深い青 瞳は漆黑 キリッとした顔立ち

CV 木内秀信

出演作品Ⅱ家庭教師ヒットマンREBORN！（笹川良平） 07

GHOST（フェア「クロイツ」「ファーマー」）

魔力ランク：AA+（今のところ）

魔力の色：普段は藍色　キレた時は黒色

魔力変換資質：炎　雷　水　氷　風

デバイス：ゼヘル（鎌）　レイ（銃）　ジリス（鎖）　ガルダー（槍）　ライガー（六本ダガー）　トーガ（鉄甲）　ドゥーガ（トンファー）　レクイエム（剣）

名前：夜桜佳奈多
よさくらかなた

性別：女

年齢：18歳

身長・体重：どちらもひ・こ・う・か・い

誕生日：5月18日

性格：Sより　明るく活発

家族構成：父　母（死亡）　兄

好き・特技：フェイト（特にスキンシップの時）　料理　お菓子
絆　ほのぼのとした日常　・　陵哉の説得　家事　歌

嫌い・苦手：父　ヒヨロヒヨロした人　しいたけ　・　頑固な時の陵哉　ハンバーグを作ること

特徴：深い青色のロングヘア　漆黒の瞳

CV ゆかな

出演作品　テイルズオブジァビス（ティア・グランツ）　コードギアス 反逆のルルーシュ（C・C）

魔力：なし

第1話 消失（前書き）

OPテーマ：TRANSMIGRATION / 水樹奈々 です。
奈々様で自分が一番好きな曲です。やはりなのはOPなら奈々様
だと思い、この曲を選びました！！
EDはまだ考えてはいませんが、リクエストがあれば教えて下さい。
なるべく、ゆかりんで！！

第1話 消失

「ん・・・あれ？寝ちまつてたか・・・」

星が見える、どうやら、いつの間にか眠っていたらしい。
にしても、随分といやな夢を見た。
俺が溜息をついたその時

ドゴン!!!!!!!!!!

「ん？」

遠くの方で爆発音が聞こえる。
見ると、空港から火と黒煙が上がっているではないか。

「不味いな。『ジリス』。準備は良いな？」

《えゝ？もう仕方ないわねえ・・・》

頭の中でそんな声が聞こえた。

俺は目を瞑り、空港内の生命反応を追った。

空港付近

そこでは、時空管理局の面々が救助活動をしていた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。休日中に悪いけど力貸して？」

その中で、八神はやては、目の前の友人、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンに協力を仰いでいた。

「勿論。お安い御用だよ?」

「うん。はやて、指揮は任せるね?」

二人とも了承し、デバイスを手に取る。

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

《all light (yes sir)》

二人は変身して、バリアジャケットに身を包む。

手にはそれぞれの戦闘形態のデバイスが持たれている。

そして、二人はどちらからでもなく空港内へと飛んで行った。

空港内

その一角。ロビーでは多くの人達が救助を待っていた。

軽く50人は超えている。周りは火の海。しかも、周りの通路は爆発の影響で天井からコンクリートが崩れ落ち、身動きがとれない状態だった。

皆、1か所に集まっているがもう殆どの人がパニックに陥りそうになっていた。そこに

ジャララ

「う、うわああああ……!!!!」

一人の男性が恐怖で叫び声をあげていた。

なぜなら、その男性は鎖にがんじがらめにされ、その下から出ている魔法陣に飲み込まれそうになっていた。

そして、何の抵抗もできずにその魔法陣にのまれていった。

「パパーーーーー！！！！！！」

その人の娘であろう子供が泣きじゃくり、周りは静止に包まれた。そして、1か所に集まっていたところ全域に先ほどの魔法陣が浮かび上がる。

ジャラララ

そこから幾百もの鎖が現れ、人にからみつき魔法陣にのまれる。周りの人は恐怖の叫びを上げる。そして、数十秒後。周りには誰もいなくなっていた。

第2話 狙い物は外さない

空港付近

そこには、時空管理局が陣をひき、被災者の居場所などを確認していた。

その最中、いきなりロビーの生命反応がすべて消える。

「！！ 八神部隊長！ロビーの反応が全滅しました！！」

「なんやて！？ 50人が一気にか！？」

部下の報告に驚愕の表情を浮かべるはやて。
そして、今度は付近に強い魔力反応。

「！！ 転移魔法です！ 場所は・・・！？ ここです！！」

「はあ！？ な、なんや？ 何がおこつとんや！？」

そして、はやてのすぐ後ろに魔法陣が浮かび上がる。
そこから、出てきたのは鎖に繋がれた一般市民50人。皆あのロビ
ーにいた人たちだった。

「・・・！　だ、大丈夫ですか？　いったい何処からここに？」

「え？　あ、局の方ですか？　私達はあの空港のロビーにいた者で
す。」

いきなり鎖が現れて、魔法陣に引き込まれたと思ったら、気が付
いたらここに・・・」

はやては、転移魔法から出てきた人達の一人に聞くと、そう答えて
くれた。
とりあえず、先ほどのロビーから生命反応が消えた理由を理解した
はやて。

「！！　とりあえず、この人たちを早く病院に運んで！！」

「・・・は、はい！！！！」

はやては局員にそう伝えると、局員は優しくその人たちを救急車に乗せる。

そして、コンピュータから嫌な音が鳴り響く。

ピピピピピピ！……！！！！

「八神部隊長！！ 強力な魔力反応。被災地に向かっていきます！！」

「なっ！ 本当に何がおこっとなや！？」

空港から東に約1km離れたビルの屋上

「『レイ』。どう？ 止まりそう？」

そう呟く男の手にはライフル銃が握られている。

《あと2発は必要です。主》

頭の何に響くその声に頷き、狙いを定める。

「バブル・スプラッシュ」

ドン　ドン

引き金を引いて、銃口から2発の弾が飛び出る。

男はなおもライフルのスコープから目を離さない。

《主、狙いは完璧です。そんなに注意深く見なくても・・・》

「甘いね、『レイ』。局の人が邪魔するかもしれないからね。肉眼じゃ完全に見えないからこうやって見てるんだよ」

《申し訳ありません。浅はかでした》

「うん。そう言う素直なところは気に入ってるよ『レイ』」

謝っているレイという者を優しく、温かく見護るような言い方で諭す男。

そして、スコープの先に、金髪の女性が現れた。

「ほくら。来たよ」

男はスコープから顔を上げ、目を瞑る。

「このあたりだよね？」

はやてから連絡を受けて、接近する魔力反応の迎撃を任されたフェイト。

まわりに何かないか注意深く監視する。

《Witchcraft reaction・Confirm・
Direction at 10（魔力反応。確認。10時の
方向）》

バルディッシュがフェイトに指示を送る。

ハーケンフォームを発動させ、鎌形状のデバイスに変形させ、魔力弾に攻撃しようとする。

だが、この行動は阻止される。

（おい、その金髪の方。邪魔しないでもらえる？

こっちはあんたら局の救助活動に協力してるんだけど？）

突如その様な男の声が聞こえた。どうやら念話で話しかけているようだ。

（え？じゃあ、なぜ魔力弾で攻撃をしているのですか？）

救助活動をしているといっても、今だ警戒を解こうとしないフェイト。

その反応に男はやれやれと云った感じで話し始める。

（今撃った弾の属性は水だ。そのデバイスで確認すれば解る筈だ。）

「・・・バルディッシュ？ 確認できる？」

《OK・・・Ensure completion・Water is an attribute（確認終了。水の属性です）》

バルディッシュに接近中の魔力属性を確認させると、男が言った通り水の属性だった。

その結果にフェイトは警戒を解く。

（・・・わかりました。では、引き続き協力をお願いします。）

（了解。後、西の方面頼めるか？どうもそこら辺は俺の転移魔法が届かないんだ。

北、東、南方面の救助活動は終わっている。後は鎮火させるだけだ。西も救助がすんだら鎮火させる。）

男の説明にフェイトは礼を一言いうと、そのまま西の方面に向かっていく。

フェイトが去った後、すぐに男が撃った魔力弾が到着し、何しもの水を放出させ、その部分は鎮火した。

戻ってビルの屋上

《主、終わったわよ。もう、疲れた》

頭の中に先ほどの『ジリス』という者の声が聞こえる。

何とも人間ぽく、そして、面倒くさそうな女の声。

そんな『ジリス』に微笑みながらも、消化活動を行う男。

《『ジリス』！！ 主に何という口の利き方だ！！ 少しは自分の立場というのを弁えろ！！》

そこに、『レイ』という者の声が『ジリス』を叱っていた。
人間でたとえるなら、忠誠心が強く、キリッとした男の声。

《そんな私の勝手じゃない・・・あんたの言い方が堅苦しすぎるだけよ・・・》

《何だと！？》

《何よ！》

そして、またいつもの口喧嘩になる。

こうなるといつもストッパーがこの男になる。

「はいはい。二人とも、今は口喧嘩してる場合じゃないだろ？」

『レイ』も俺への口の利き方だけでそう怒るなよ。俺は気にしてないし。

それより、『ジリス』もう生命反応なかった？」

男が優しく二人を綾して、何とか喧嘩は収束する。
そして、男は『ジリス』に生命反応がない事を聞く。

《ええ、あの建物の中にはもう一つもないわ》

「了解。『レイ』。カートリッジロード」

《了解。Road Cartridge》

ライフル銃に2発カートリッジを装填し、薬莢が地面に落ちる。

「アクアスプラッシュ」

先ほどの魔力弾とは比べ物にならない程の弾を発射させる。
弾は直径30m。その弾は、空港の中心の頭上で止まる。

「弾ける」

言った瞬間弾が弾け、ダムが決壊したような量の水が流れる。

「戻っていいよ。『レイ』」

《はっ》

ライフル銃は霧散し、男の手の平からその姿を無くす。
代わりに残っていた物は、一滴の血。

「さて、そろそろ行こうか」

男はそう呟くと、転移魔法でその場から消えた。
それから数10分後時空管理局員がその場に現れたが、何の証拠もつかめずにその災害事件は終わりを告げた。

あれから5年後、歯車は再び動き出す。

第3話 出会いというものは何故か心が躍る

機動六課が解散した1年後の春、フェイト・T・ハラオウンは義兄のクロノ・ハラオウンに呼び出されていた。

「え？ 休暇・・・？」

「そうだ。お前ここのところ働き詰めだからな。2日間の休暇を与える」

ここ3カ月、フェイトは1日も休まず事務仕事・外回り・その他諸々の仕事をしていた。それを見たクロノはフェイトに休暇を与えることにした。

「大丈夫だよ？ お兄ちゃん。私はちゃんと休んでるから」

「お前は・・・倒れられるとこっちが困るし、母さんも心配するだろ？」

少しは仕事を周りに奴に任せて、体を休めろ。優秀な執務官補佐もいることだしな」

「むっ……わかったよ。じゃあ、休む事にするよ」

フェイトは渋々とだが休暇に了承した。

クロノはそれを見て、うむっと頷くと話を続けた。

「まあ、久しぶりになのはの故郷に戻ったらどうだ？
向こうの友達に随分と会ってないだろ？」

「うん、そうする。ありがとうね？ お兄ちゃん」

微笑んで部屋を出るフェイト。

クロノはため息を吐き、横に置いてある紅茶を飲み、事務仕事を再開する。

時は流れ地球

フェイトは駅前で、友達のアリサ・バニングスと月村すずかを待つ

ていた。

手には旅行鞆、目にサングラスをかけている。

「うーん。ちょっと早く着過ぎたかな？」

腕時計の針を見て呟く。待ち合わせの時刻まで10分程度余裕があった。

そんなフェイトに忍び寄る影が二つ。

「ねえねえ、その金髪の方。俺たちとどっか行かない？」

凄く時代遅れのナンパ2人組がやってきた。
フェイトは頭に？マークを浮かべる。

生まれてこのかたナンパという物を受けた事がないフェイトはどういう対処をすればいいのか分からなかった。

「えーと・・・もうすぐ友達が来るので遠慮しておきます」

「そんな堅い事言わずにさあ？」

尚も詰め寄ってくるナンパ男に少々困っていると、フェイトに助け舟が現れた。

「おいおい、男2人でなに脅してんだ？」

「ああ？」

その声に振り返ると、深い青色の髪に漆黒の瞳の男が面白そうに笑いながら現れた。

ナンパ男2人は現れた男を睨みながら、軽くあしらう。

「俺らはこの金髪嬢ちゃんに用があるんだ。テメエはすっ込んでろ」

「あつそ。じゃあ、ちょいと痛い思いするから我慢しろよ？」

「は？」

ドガッ！ ガシ！

男はナンパ野郎2人の後頭部を蹴り、重力に従って倒れた2人の後頭部を掴む。

そのまま、二人の背中を足で踏み、頭だけを持ち上げる。

「ああ！・・・せ、背骨が・・・折れる・・・」

「や・・・やめてくれ・・・頼むから・・・」

激痛を負いながらも、許しを請う2人。

だが、尚も男は二人を放さない。口角を上げ面白がっている様にも見える。

「あ・・・や、やめてあげて下さい。本当に背骨が折れます！」

「ん？・・・ああ・・・わかった」

男はようやく2人を解放し、その後頭部を離す。
そのまま重力に従って、地面に顔を落とされる。背中から降りて、
しゃがみ込んで2人に言う。

「まあ、今回はこれで許すが・・・次見た時は・・・全身の骨粉々にするぜ・・・」

「「は、はいゝ!!!!」」

口角を上げて、2人だけに聞こえる声で言うと、そいつ等は街中に消えていった。

「さて、あんた。大丈夫か？」

「え？ああ、はい。大丈夫です。助けて下さって、ありがとうございます」

フェイトは軽くお辞儀をして、お礼を言う。
男は、すこし笑いながら答える。

「別に、そう大した事じゃない・・・夜桜陵哉だ。あんたは？」

「あ、え」と。フェイト・Ｔ・ハラオウンと申します。夜桜さん」

「・・・陵哉で構わない。苗字は嫌いでな・・・」

陵哉の顔に一瞬、少し憎しみの籠った様な顔になった。
フェイトは、その顔に不可解な感じを覚えるが、それは本当に一瞬の出来事で陵哉はすぐに笑顔になる。

「そ、そうですか。じゃあ、陵哉さん。私もフェイトで構いません」

「ああ、わかった。じゃあ、フェイトさん。また逢う機会があれば・・・」

そついうと、陵哉は街中に歩いていく。

「あ・・・あの！ 先ほどは本当にありがとうございました!！」

その声は聞こえたようで、振り向かないが片手をあげて手を振っていた。

フェイトはその光景を見て、微笑んでいた。

「フェイト!」

「フェイトちゃん!」

すると、友人のアリサとすずかが手を振りながらこちらにやってきた。

それに気づいたフェイトも手を振って二人に微笑む。

（うーん・・・陵哉さんの声って、何かどこかで聞いたことがあるような・・・）

そんな疑問を持ちながら、フェイトは二人とともにアリサの家に向かった。

一方、フェイトと別れた陵哉は。

《主、なぜあのような行動を・・・》

頭に直接話しかけてくるその声は、以前のレイという者の声だった。

「構わないだろ？　そう作戦に支障が出ることもない」

《それはそうですが・・・》

「俺達のやる事は変わらん・・・あいつを殺す。ただそれだけだ・・・」

漆黒の眼には憎悪だけが浮かんでいた。

第4話 事件とは唐突に

フェイトと陵哉が会って次の日の夜。時空管理局本部では・・・

「消火作業急げ！！！」

「被害状況を知らせろ！！！」

「原因は何だ！？ さっさと調べ上げろ！！！」

原因不明の研究所火災が起こっていた。
研究所がいきなり爆発し炎上。原因は何もわからないが、一つ奇跡
といつていい事があった。

「なに！？ それは本当か！？」

「はい、何故かはわかりませんが・・・本当です」

「・・・まあ、奇跡と思っておこう。死傷者が0というのは・・・」

そう、これだけの事が起こっているのに死傷者は0。

研究所で働いていた者、その周辺で働いている人達にもかすり傷一つ負っているものはいなかった。

「どうやら、今日は早めに研究を終えて、皆帰っていたらしいです・・・」

「・・・」

そして、数時間後。

研究所は鎮火し、死傷者0の形で終わったが、ここの研究資料・材料は全て破壊されていた。

次の日の朝 地球 海鳴公園

フェイトは日課であるランニングをしている。
そして、丁度この公園でランニングを終えて、一息吐く為にベンチに座ろうとすると・・・

「・・・・・・・・」

「すう・・・すう・・・」

何と、陵哉がベンチで上着を掛けて眠っていたのだ！？
いくら春でも、このような時期で野宿をしたとあれば、風邪をひいている可能性がある。
とりあえず起こしてみる事に・・・

「あの、陵哉さん？　こんな処で寝ていると風邪をひきますよ？」

「大丈夫だ」

「うひゃあ！」

起こそうとして、声をかけると案外あっさりと起きた。
一声掛けただけで起きた陵哉に驚き尻もちをつくフェイト。陵哉はベンチから立ち上がり、フェイトを立たせ上着をちゃんと着ると、自販機の所に行ってブラックコーヒーを2つ買う。

「ほれ」

その一本をフェイトに放り投げる。

フェイトはそれをうまくキャッチして陵哉にお礼を言つと、ベンチに座る。

陵哉もその横に座り、プルタブで缶を開け一口飲む。

「なあ、コーヒーを考えた人って俺すげー尊敬するんだ」

「へ？ ああ、そうなんですか？」

いきなりの言いだしにビックリするフェイトだが、すぐ理解して話に乗っかる。

「ああ、だつてよお？ コーヒー飲んだら、頭がはつきりするだろ？
それに、俺苦いの大好物だからさ、余計に・・・な？」

無邪気に笑うその姿は、陵哉の雰囲気より良いものにする。
少しその笑顔に見惚れするフェイトを陵哉が見ると、意地悪な笑みを浮かべる。

「どした？ 何か見惚れするものでもあつたか？」

「ふえ？／／／あ、いえ、そんな事・・・／／／」

頬を赤くして否定するフェイトに、陵哉のドS魂に火がついた。
フェイトは何か寒気を感じて、身を震わせる。

「ん？ 寒いのか？」

「え？ あ、いえ・・・そんな事は／／／」

ギュッ

「ふえっ！／＼／＼／」

いきなり、後ろから陵哉が抱き付いてきたのだ！？
フェイトはどう反応したらいいのか分からず、ただパニックになっている。

「暖かいか？」

「あ・・・う／＼／＼／＼／は、はい／＼／＼／」

耳元で囁く陵哉に、顔を真っ赤にして力の抜けた声で答える。
すると、陵哉が両手を離して、してやったりという顔でフェイトを見る。

その顔を見てフェイトは直感した。弄られたのだと！

「うっ・・・陵哉さん、酷いです」

「ははは、そりゃどうも」

陵哉は立ち上がり、空になった缶をゴミ箱に向かって投げる。

カラン

綺麗なフォームを描いて空き缶はゴミ箱の中に入る。
体ごとフェイトに向き直る陵哉。

「んじゃ、俺はやる事あるからこれで」

「はい。また逢えるといいですね？ 陵哉さん」

「・・・呼び捨てで構わない。何かさん付けで呼ばれるとムズムズ

する」

「わかりました。じゃ、陵哉。またね」

「ああ、またな。フェイト」

出口に向かって歩く陵哉は、何故かフェイトには寂しそうに見えた。

第5話 機動六課再び

フェイトがミッドチルダに帰還すると、局の人達は大忙しと言わんばかりの雰囲気だった。

何も知らないフェイトでも、一大事があったと思わせるほどの空気が満ちている。

「あ、フェイト執務官!!」

「ティアナ! どうなってるの? これ・・・」

フェイトに声をかけたのはオレンジ色のストレートヘアが目立つ、ティアナ・ランスター執務官補佐である。

「実は昨夜。本局の研究所の一つが原因不明の火災で、全焼したんです」

「え? 死傷者は!？」

「奇跡的な事に死傷者は0です。研究を早めに切り上げて、皆帰っていたと報告を受けています」

「そう・・・」

何とも不気味なことである。まるで事態を見透かしたかのような火災。

本当に何か裏で糸が引いているように感じる。

「あ、それから」

ビービービービー
ウーン ウーン

ティアナが何か言おうとすると同時に、アラームが鳴り始める。

『ミッドチルダ北東部の研究所が凍結しています。総員 第1級警

戒態勢。繰り返す。総員 第1級警戒態勢』

「え？ 凍結！？ どういう事！？」

「とにかく、現場に行ってみようティアナ」

幸い、現場には走れば5分もかからない距離。
2人は走って現場に向かっていく。

北東部研究所

研究所は建物ごと完全に凍っていた。
火災ならまだあり得るが、これは完全な攻撃だった。

「何これ・・・こんな事、普通の魔導師に出来るものじゃない」

「これは・・・少なくとも、A Aランク級の魔導師じゃなきゃできない事だね」

頭の中で推測するが、この状態では何もわからない。
とりあえず中に人がいるかを確認する為、バルディッシュにサーチ
してもらおう。

《Ensure completion. No person
in the (確認終了。中に人はいません)》

「え？ また？」

「こんなことって・・・」

ピピ

突如通信が入った。ここにいる全員に・・・

『そこから離れろ』

文字の通信で、それだけ書かれていた。

離れるという事は、何かが起きるから避難しろという事である。

そして、また通信が入った。

『フェイトさん！ 現場付近にいるんですか！？』

その声はメカニックのシャリオ・フィニーノの声だった。
声からして慌てているようだ。

「シャーリー、落ち着いて。どうしたの？」

『そつちに猛スピードで強力な魔力反応が近づいているんです！！
早く避難してください！！』

さっきの文字の通信はこの事だったのかと痛感させられる。

文の通信、内容からして、局の人間ではない。多分これを仕掛けた者の通信だと推測できる。

そして、魔力弾が肉眼で確認できる距離に近づく。

「バルディッシュ！ あの魔力弾壊すよ！！」

《yes sir》

バルディッシュを起動させ、バリアジャケットを着用しようとする
が

バキン！！

その音でフェイトはバルディッシュを起動させられなかった。
何故なら、研究所の周りにいる全員にバリアタイプの防御魔法を
けられたのだ。

「なっ……こんな事って……」

呆然とする一同、そして、魔力弾はそのまま研究所に着弾する。

ドゴーン!!!!!!!!!!!!!!

近距離の爆発。眩い光につつまこまれる研究所。だが、バリアによってフェイト達に衝撃波は感じない。

フェイトは目を開けると、そこには研究所の陰など跡形もなく、代わりにバカデカイクレーターができていた。

「……………!! 急いで被害状況を知らせて!! 怪我人などいれば直ぐに報告を!!」

「……は、はい!!」「」

フェイトが指揮をとり、その場の静止は吹き飛び、一気に騒がしくなった。

事態が落ち着いた時、又もや死傷者は0。そして、研究資料と材料は破壊されていた。

その日の夜

フェイトは執務官室で事務仕事をしていた。
だが、仕事が全く手に付かず、昼間の事だけが頭に浮かんでいた。
そして、今日何度目かの溜息を吐く。

「フェイトさん」

その姿を見て、一緒に仕事をしていたティアナが声をかける。

「あ、ごめんね？ ティアナ。全然仕事進んでなくて」

「いえ・・・昼間ちよつと伝えそびれたのですが・・・」

「え？ ああ、アラームが鳴る前の事？」

確かにティアナはアラームが鳴る前に、何かを言おうとしていた。

「はい・・・実は、機動六課が再び設立されるそうです。
それで、フェイト執務官と私も機動六課に一時移動になるとのことです」

「え？・・・」

いきなりの機動六課復帰に少し、思考を停止させられた。

第6話 腐れ縁はどうやっても断ちきれない!!!

翌日 機動六課に移動となったフェイトとティアナは、六課の本部に来ていた。

一年ぶりの機動六課。報告によれば昨日の夜の内にフェイトとティアナ以外の六課のメンバーは集まっていたとか。

「久しぶりですね。何か何年も留守にしてた気分です」

「そうだね。私もそんな感じだよ」

そう言う2人の前に、これまた久しいメンバーが現れる。

「久しぶりだね。フェイトちゃん、ティアナ」

「やつぽー！ 久しぶりお2人さん」

「久しぶり。フェイトさん、ティア」

「お久しぶりです。フェイトさん、ティアナさん」

「お、お久しぶりです。フェイトさん、ティアさん」

上から順になのは、はやて、スバル、エリオ、キャラが2人を出迎えていた。

「みんな、久しぶりだね」

「お久しぶりです」

フェイトとティアナも笑顔でそれにこたえる。
再開もつかの間、はやてが真剣な顔で皆に言う。

「再開をよろこんどるところ悪いんやけど、作戦会議をするで」

はやての一言で皆が一気に緊迫した顔になる。

会議室

そこに、六課メンバー全員が集結している。
会議の内容は勿論、研究所破壊事件だ。

「さて、一昨日と昨日で1件ずつ研究所が破壊されとる。
やり方は全く逆やけど、死傷者は共に0。どれも計算されたよう
に起こつとる。

フェイト隊長。 研究所以外で現場に変わった事はあつたか？」

「2つありました。 まず1つは、現場にいた全員に文字の通信が入
り、内容が『そこから離れる』とだけ書いてありました」

「ちつ、舐めやがつて。 局員に傷一つ付けずに研究所をぶつつぶし
て何がしたいんだ。」

フェイトの報告にヴォルケンリッターの1人ヴィータがイライラし
ながら呟く。

「ヴィータ。報告中だぞ。静かにしろ」

そんなヴィータに同じくヴォルケンリッターの1人シグナムが注意する。

ヴィータはそっぽを向いて口を瞑る。

「それともう1つは、研究所を囲んでいた局員をバリアタイプの防御魔法で全員を包んだ事です」

その言葉を聞いたものは皆、驚愕の表情を浮かべる。
そんな事をする理由、そして、それ程の魔力量を持っているという事に六課のメンバーは驚愕したのだ。

「静かに！ とりあえず、敵さんがこちらに死傷者を出す考えはないという事や。」

他に、何かわかった事はあるか？」

はやての質問に、手が上がる。

六課の部隊長補佐：グリフィスである。

「実は、2つの研究所の関連性を調べた所、研究所の責任者の名前が2つとも同じ人間だとわかりました」

「名前は？」

「夜桜強哉よさくら けいさ研究課長です」

「え？ 夜桜？」

フェイトの耳に信じられない苗字が響き渡った。

第7話 運命とは非情で残酷

フェイトは驚愕の表情でその報告を聞いている。

夜桜強哉。年齢・47歳 出身地・地球

独自に魔法の研究をし、偶然転移魔法を発動させミッドチルダに足を踏み入れる。

そして、その能力を買われ時空管理局の研究部に配属。数々の実績を残し研究課長に上り詰める。

「以上が夜桜強哉に関する情報です」

「さやか。ありがとう。じゃあ、他に情報」

ビービービービー
ウーン ウーン

六課本部にアラームが鳴り響く。
モニターに現場の映像が表示される。

「今度も凍結」

そう。研究所は全面凍結させられている。
そして、また建物内部には人がいない。

「会議中やけど、しゃあない。機動六課、出撃！！」

「了解！！！！」

北西部 研究所

フェイト達が到着し、現場を見るとまだ破壊はされていなかった。
スターズとライトニングは隊長チームとフォアード部隊、合計三組
に分かれてそれぞれ空と陸で犯人の搜索を開始する。

「思ったより早かったな・・・さすがは機動六課・・・」

上空で仮面をかぶった男が濁った声でいう。

その手には2丁の拳銃が握られている。

右には白、左には赤の拳銃、ともに光っていた。

「見つかる前にさっさと終わらせるか・・・カートリッジロード」

ガシャン ガシャン ガシャン

男の掛け声と同時に2丁の拳銃から共に3発。計6発の弾が装填される。

「ダブルライフルモード」

拳銃は形状を変え、引き金から銃口までの長さが50?になる。
そして、その2つのライフルを合体させる。

「ターゲットロックオン」

スコープから目標の研究所に銃口を合わせ、魔力を込める。

「生命反応。射程内無し。爆破範囲無し」

研究所の周りに生きた人間がいないかの確認を終了する。
そして

「ドラゴ・レイ・ショット」

ゴアアア!..... ドゴーーン!.....!!

巨大なビームが研究所に着弾する。
着弾した瞬間、爆破と衝撃波、土煙が生れる。
土煙が晴れ、男は研究所の破壊を確認する。

「破壊完了」

その場を去ろうとする男。だが

「紫電一閃!!」

「!!」

真後ろからの攻撃に男は間一髪で直撃を避ける。
だが、完全に避けられず左腕に掠り傷を負った。

「ほう。私の攻撃を避けるとはやるではないか」

そこにはシグナムともう一人フェイトが男にデバイスを向けていた。

「あなたを器物破損の容疑で逮捕します。武器を捨て投降してください」

男は溜息をつく、2丁の銃をシグナムに向かって投げる。

「ほう。案外」

だが、その銃は霧散し一滴の血となる。

「なっ！」

「え！？」

「ゼヘル」

驚愕の表情を上げる2人に、男はいきなり全長2mで刀身に何処かの文字が彫られた鎌を出現させ、フェイトに攻撃する。

「！！」

ガキン！

とつさの判断でハーケンフォームを発動させ攻撃を防ぎ、罅迫り合
いになる。

その隙にシグナムがレバンティンを振り上げ、攻撃する。

「ガルーダ」

ガキン！

又もや、突如現れた武器。今度は刀身が1m×2等辺三角形みたいな刀身くで柄が50?の槍を出してシグナムの攻撃を防ぐ。そして、2人のデバイスを弾き距離をとる。

「貴様。いくつデバイスを持っている!？」

「・・・答える義理はない。」

「じゃあ、力付くで!!」

フェイトはバルディッシュを強く握りしめ、攻撃しようとする。だが、男はいきなり構えを解き、フェイトに体を向ける。

「ああ、そうだ。フェイト」

「え？ な、何で私の名前・・・」

男は鎌と槍を霧散させる。

そして、空いた手を仮面の目の部分にかける。

「俺の奢った缶コーヒ―美味かったか？」

「！！・・・ま・・・さか・・・」

驚きの表情を浮かべるフェイト。

男の言葉がそいつだと証明している、だがフェイトは間違いであつてほしいと願う。

男が仮面を外す。そして、フェイトは絶望した顔になる。

「陵・・・哉・・・」

「ああ、また会ったな。フェイト」

運命というのは非情で残酷だった。

第7話 運命とは非情で残酷（後書き）

P・S 武器についてですが、鎌は『07 ghost』のあの鎌
槍は『武〇錬金』に出てくるあれの布が無いバージョンと思って
もらって構いません。

第8話 天敵

驚愕するフェイト、無表情の陵哉、フェイトを横目に構え続けるシグナム。

「貴様。テストロッサに何をした!？」

「別に、唯・・・ナンパされてる所を助けて、その2日後コーヒ―を奢って話しただけだ」

「・・・何故、こんな事をする。貴様のような奴が!」

今までの行動を確認する限り、陵哉は優しい男だと判断する。だが、そんな男がなぜこんな事をするのか疑問だった。

「そんなの簡単だ。こんな俺だからだ」

意味深な言葉でシグナムの質問に答える。

その瞳には揺るぎない決意がシグナムには確認できた。

「そうか。では、力付くで貴様を止める!!」

「チッ」

一気に距離を詰め寄り、剣を振るうシグナム。舌打ちをして、それを避ける陵哉。

それから、シグナムが陵哉の武器を出すまいと攻撃を繰り返す。

陵哉も避けるのが精一杯で武器を出せない。

だが、その表情は攻撃をしようとしてもしていない様に感じ取れる。

ブオン!!

シグナムが試しに大振りでレバンティンを振るい、攻撃をする隙を与えてみる。

だが、陵哉はそれを避けた後攻撃をするどころか、武器をも出さなかったのだ。

シグナムは完全に大振りの後、攻撃をする隙を与えた。だが、陵哉

は武器をも出そうとしなかった。

「・・・何故だ・・・何故攻撃をしない！」

「・・・・・・・・俺は・・・無意味な戦いはしない・・・」

「では、なぜ研究所を破壊する！？ 何のためだ！！」

「・・・・・・・・」

陵哉がその重い口を開いた瞬間、場に空気を切る音が響く。

バラバラバラ！！！！

突如へりの音がその周辺に聞こえる。
全員その方向を見ると一人の女性の姿が見える。

「シャル！？ 何故ここに！？」

「フェイトちゃんがどこかやられたのかと思って・・・」

ヘリの中にはヴォルケンリッターの1人シャルが心配そうな顔でフェイトを見る。

ヘリは、シグナムの横に付きフェイトをヘリに乗せる。

その間も陵哉を警戒するシグナム、だが、どうも陵哉の様子がおかしい。

何か、やばいという顔でこちらを見ている。そして、次の瞬間

「ゴハッ！！」

突然吐血し出したのだ。本当に突然に。

陵哉に目立った外傷はないが、吐血しているのは確かだった。

「！！ 陵哉！！」

「ブツ・・・ゴホッ!!」

そして、陵哉は意識を手放す。

そのまま重力に引かれて落下し始める。

「陵哉!!!!!!」

《ソニックムーヴ》

高速移動で陵哉の落下を阻止し、抱きかかえる。

意識を失っているので、吐血する事は無くなったが、異様な量の血を吐いていたのだ。

意識を失うほどの量の血を・・・陵哉は直ぐにヘリで六課本部に搬送された。

六課本部

一応犯罪者なので、魔力放出を防ぐ手錠をして、医務室のベッドで拘束されている。

横にはフェイトが心配そうな顔で陵哉を見ていた。

「で？ シャマルが来たと思ったら、いきなり吐血して意識失ったと・・・？」

「ああ、原因が全く分からんな・・・」

シグナムが先程の戦闘の事をはやてに話していた。皆がうーんと悩んでいると、陵哉の指が一瞬動いた。続いて、瞼を開ける。

「！ 陵哉？ 大丈夫？」

「フェイト？ ……あれ？ ……俺・・・！！ ブッ！」

意識を取り戻した途端、また吐血をしだし、仰向けの状態から起き上がる。

皆驚愕の表情になる。だが、フェイトだけは陵哉を心配していた。

「陵哉！？ 大丈夫？ どこが悪いの？」

「ゴホッ！・・・くっ・・・ゼヘル！！」

陵哉がそう叫ぶと、吐血した中の一滴の血が飛び出す。

それが、骸骨を元に黒のコートを纏い、鎌を持った正しく死神に変化する。

《主！ あれですね？》

「ああ・・・頼む、ゼヘル・・・！！ ブッ！」

ゼヘルと呼ばれた死神は、鎌を振り上げ、陵哉に振り下ろす。

「！！ やめてー！！」

フェイトが目を瞑って叫ぶ。だが、いくら待っても斬った音がしなかった。

代わりに聞こえたのは、力なくベッドに倒れる音と荒い息を吐く陵

哉の声だった。

《では、私はこれで・・・》

「・・・はあ・・・ああ、すま・・・ない・・・ゼヘル」

ゼヘルは霧散し一滴の血となる。
皆その光景に呆然と眺めていた。

「はあ・・・すまないな、フェイト・・・はあ・・・薬品の匂いを
嗅ぐと何時もこうなるんだ。

体が拒絶反応を・・・起こしてな・・・ふう・・・だから、病院
と医務室そして、医者と看護婦は俺にとっちゃ天敵なんだよ」

荒い息を付きながらも、吐血をした説明をする陵哉。
だが、尚もフェイトは心配そうな顔で陵哉を見ている。

「だから・・・何時も・・・あのゼヘルで嗅覚と体を別けている
んだ」

「別ける？」

「ああ・・・あいつの特殊能力で・・・2つの対象を完全に・・・別つ。」

それがあいつの・・・ゼヘルの・・・能力だ」

呼吸も整ってきて、頭もはっきりとしてくる。

陵哉は体を起こして、六課のメンバーに体を向ける。

「今のゼヘルの能力は、一時間程度だ。話をするなら、場所を変えてもらいたい。」

勿論、医者のはのけてだ・・・」

「まあ、ええやろ。また吐血されたらこっちが困るしな。とりあえずロビーに行こか」

そして、シャマル以外医務室を退出した。

だが、さつきと戦闘時を合わせ、体の1/13の血の量を吐いた陵哉は、フェイトに肩を貸してもらい、ロビーに足を進ませる。

第9話 真相

陵哉はフラフラの状態だが、フェイトの肩を借りて何とかロビーに辿り着き、近くの椅子に座らせられる。

貧血状態でここまで歩いた陵哉は、少し息を荒くしていたが、直ぐに呼吸を整える。

「で、まず何から聞きたい？」

「研究所を破壊する目的はなんや？」

「それか・・・簡単に言うと、あの屑の研究を邪魔しているだけだ」

陵哉の口から出た『屑』が夜桜強哉である事はこの場にいる全員がわかった。

「何で邪魔をする必要があるの？ 夜桜研究課長は局員の皆の為に頑張ってるんだよ？」

「局員の皆の為？　・・・頑張つて働いている？　・・・くくく・・・
　　はははははは！！！！！！　とんだお笑い愚さだな！！！」

なのはが言つた言葉で陵哉は馬鹿笑いをする。
その様子を見ていた者たちは皆、陵哉を睨む。

「・・・あいつが興味あるのはいつも自分と自分の研究だ。
その為には周りの奴がどうなるうが、何を犠牲にしようが表情一
つ変えずにする奴だ。あいつは」

「なんでそんな事が言えんだ？　証拠でもあんのか？」

ヴィータが腕組みをしながら陵哉に質問する。
陵哉は、少し口角を上げて言い放つ。

「証拠？　証拠なら目の前にあるだろ？」

「！？　陵哉・・・まさか・・・」

フェイトが目を大きく見開き、その次の言葉を予測した。

「ああ・・・あの屑親父は俺を実験材料にした。俺が薬品拒絶症になったのもその所為だ。

そして・・・全員見ただろ？俺がゼヘルを出した時、何処から出たのかをな・・・」

皆哑然としながら、陵哉の話を聞いている。

そして、スバルは先ほどの話に出てきた一つの単語を繰り返した。

「あれ？ さつき、『屑親父』って・・・」

「ああ。あいつは俺の父親だ。フェイトは感じていたようだがな」

顔をフェイトに向けると、仰々しくコクンと頷いた。
だが、ティアナだけはまだ信じようとはしない。

「けど・・・それはあんたが自分で改造したんじゃないの？
夜桜課長がやったという証拠はないわ・・・」

「・・・はあゝ。しゃゝねえなあゝ。ジリス、やってくれ」

《はいはい・・・場所をあそこよね？》

「ああ、頼む・・・プッ」

口から残っていた血を出す。すると、血が蛇に変わり、地面には魔法陣が刻み込まれる。

その魔法陣から出ないように、魔法陣から鎖が現れ、全員の足に絡まる。

「！！ これは、転移魔法！！」

「てめえ、どういっつもりだ！？」

「百聞は一見にしかず。という事だ」

そして、ロビーにいた全員が転移魔法で飛ばされた。

地球 海鳴市 廃墟の研究所前

そこに魔法陣が現れ、先ほど陵哉に事情聴取していたメンバーが転移された。

「？　ここは・・・？」

「地球の海鳴市。その一番人気の少ない山の中だ」

エリオの呟きに、答える陵哉の返答に全員が驚いた顔になる。
だが陵哉は六課のメンバーに顔を向ける事なく、建物の中進もうとする。

「あ、陵哉！」

フェイトもその後が続こうとする。
が、いきなり陵哉が足を止めた。

「？ どうしたの？ 陵哉？」

「チツ、防衛システムはまだ生きてたか・・・」

言ったと同時に浮遊する機械が建物内から現れる。
その機械は赤いセンサーで陵哉達を確認する。

『侵入者発見。実験体・？03を確認。他複数不明。防衛システム、
活動を開始します』

ドン
ドン

防衛システムがそう言うのと、いきなり発砲してくる。

六課メンバーは回避するが、陵哉だけはそこから一步も動かない。

「!？ 何してるの陵哉!？」

「これでいい・・・」

ドゴン!!

そのまま防衛システムが撃った弾は陵哉に着弾すると爆発し黒煙が上がる。

六課メンバーは目を見開く。

ガチャン

だが、その黒煙の中から聞こえたのは人間が倒れる音ではなく、鉄

の様なものが落ちる音だった。

「ふう〜・・・助かったぜ。この手錠ウザったくてどう外そうか考えてたんだが、強力すぎる攻撃つても案外欠点だな・・・」

口角を上げて、手首を揉む陵哉。
そして、陵哉は親指の爪で人差し指の指先を切り、血を流す。

「レイ ライフルモード」

一滴の血は、全長1mの巨大なライフルとなり、陵哉はその場から消える。

『対象ロスト。 搜索モード開始』

防衛システムが周辺の生命反応を確認し陵哉を探す。
だが、それは発砲の音で止められる。

「バブル・スプラッシュ」

ドン ドン ドン

計3発の弾丸が防衛システムの頭上で止まる。

『魔力反応、確認。回避します』

「おせえよ」

バシユ ダアアア

ギギギ ボガン!!!!

防衛システムの頭上から大量の水が放出される。
水圧で防衛システムは爆発し、スクラップと化す。

「・・・全員怪我はないか？」

「・・・！ は、はい。ありがとうございます」

なのはが代表して陵哉に返答とお礼を言う。

それに倣い、全員がお礼を言うがフェイトだけは驚いた顔で佇んでいる。

「ん？ どした、フェイト？ 何かあったか？」

陵哉の声でフェイトは我に返り、一つ陵哉に聞く。

「陵哉・・・もしかして・・・5年前の空港火災の時・・・」

「ん？ ああ、そういやそんな事もあったなあ・・・ああ、確かに俺はあの時お前らに協力したぞ。」

まあ、お前と初めて会話したのもあの時だったよな？」

やっぱりと確信した顔になるフェイト。周りの六課メンバーは驚きの表情。

だが、陵哉は気にする事なく建物の中に足を進める。

「今はそんな事気にするな、後で話せることだからな。今はこつちに専念しろ」

「う、うん。ごめん」

「まあ、あんま気にしてないし構わんが・・・」

そして、全員建物内部へと入って行った。

第10話 研究内容（前書き）

今回は、結構長いです。

第10話 研究内容

陵哉達は朽ち果てている建物内を進む。

辺りには割れたビン、千切れた鎖、刃毀れたメス、色々なものが床に落ちたり壁に突き刺さっている。

「あ、あの、陵哉さん」

進んでいるうちにキャロが陵哉に声をかける。

だが、陵哉は顔だけをキャロに向け、何だ、と聞き返す。

「お、お体の方は大丈夫なんですか？」

「ああ、問題ない。結構前に廃墟になっているからな。薬品の匂いは風に流されてる」

「そ、そうですね」

「ありがとな」

それだけ言つと、また顔を前に向け、変わりのないスピードで前を歩く。

「にしても、不気味やなあ。何か出てきそうや」

「主はやて。それはちよつと・・・」

「にはは・・・そうだよ、はやてちゃん。何にも出てこないよ」

はやての呟きに、シグナムとなのはが苦笑いしながら否定する。
その3人の会話を聞いて、陵哉は歩みを止めずに近くのドアを力い
つぱい開ける。

ガラッ ドオン！！

「「「「きゃ（わっ）！」「」「」

六課メンバーは驚いた声を出す。

陵哉は気にする事なく少し歩き、廊下の壁に背中を預ける。

「あ、あんた！ ビックリするじゃん」

「中を見てみる」

ティアナの言葉を遮り、中を見るように指示をする陵哉。
全員とりあえず部屋の中に入って見てみる。

「「「っ！」「」

「なんだこれ！？」

「が、骸・・・骨・・・」

ヴィータが驚いた顔で、エリオが恐怖の顔で声を発する。
陵哉の開けた部屋の中には幾十もの骸骨が倒れていた。

「その骸骨の元は・・・子供だ」

「なっ！」

陵哉の言葉に全員が驚愕の表情を浮かべる。
そこにある骸骨は見るからに5歳位の子供で、皆言葉を失う。

「うう・・・」

「！！ キヤロ！？」

キヤロが耐えきれずに気を失い倒れる。
何とかフェイトがキヤロを抱き抱え、地面に倒れるのを防ぐ。

「キャラには見せなかった方がよかったのかもね・・・」

スバルが顔を俯かせて心配そうな声で告げる。

心配そうな顔でキャラを抱えるフェイトに、何時の間にか部屋に入ってきた陵哉が呟く。

「やはり、チビツ子共は連れてくるべきじゃなかったな。ジリス、帰してやれ・・・」

「わかったわ・・・」

先ほど切った、人差し指の指先の皮を押して、血を出すと、またあの蛇が出てきた魔法陣でエリオとキャラを囲む。
そして、二人の身体に鎖が絡まる。

「！！ 待って下さい！ 僕はまだ ！」

「そいつの傍にいてやれ・・・悪い夢を見てる筈だからな」

そして、二人は六課に転送された。
目を瞑りながら、陵哉が口を開く。

「・・・すまない。俺が深く考えていなかった」

「・・・うん。局の任務でこんな惨劇をいつかは見ると思
ってたから・・・」

フェイトが心配な顔でそう呟く。
陵哉は溜息をついて、部屋を出ていく。皆後れながらも陵哉につい
て行った。

カツカツカツカツ

静かな廊下に、足音だけが響く。

皆さつきの惨劇に言葉を失い、暗い雰囲気になる。
どれ位歩いただろう、いきなり陵哉が足を止める。

「？ どうしたの？ 陵哉？」

いきなり歩みを止めた陵哉にフエイトが優しく聞く。
だが、陵哉は返答せずに一瞬だけ横の扉を見たが、目の前の扉を開ける。

ガラッ

そこには、PCが幾つも置いてあった。
見るからして、研究内容などを記録している部屋っぽかった。
陵哉はその中の一つのPCに向かう。

「おい、いくらなんでもこんな状態では電気も流れてはいないだろう」

「・・・だったら流すだけだ・・・」

シグナムの言い分にそう切り返す。

陵哉は先ほどと同じようにして一滴の血を流す。

「ドゥーガ」

名前の様な単語を呟くと、一滴の血は姿を変え白銀の狼になる。

《お呼びか？ 主？》

「ああ、そのコードに電気を流してくれるか？ ドゥーガ？」

《お安い御用だ》

狼・・・ドゥーガは支持されたコードを口にくわえる。
そして、優しく電気を流していく。

陵哉はPCの電源を入れると、何の抵抗もなくPCの画面が光る。

カタカタカタカタ

陵哉が迷いなくキーボードを叩く。
そのスピードはかなりの物で、ものの三十秒で目的のウィンドを立ち上げる。

「ほれ、ここの研究内容と研究に携わっていた奴らの一覧だ」

皆その言葉を聞くと、一斉にPC画面の前に来る。

「ちょ、皆ひつつきすぎやで」

「だってえ、気になるんだもん」

はやてが皆に突っ込みを入れるが、なのはの言う通り気になるものはしょうがない。

そんな六課メンバーにはやてが溜息を吐く。

「しゃあないなあうちが読んでやるさかい、ちょっと離れてくれるか？」

その言葉で皆がようやく離れて、はやてが内容を読み始める。

「え」と、なになに・・・『研究内容：デバイスと人間の融合』

『この研究は魔導師の補助の機械であるデバイスを人間と融合させる事でデバイスとのシンクロ。そして、魔力の強化を目的として考案された研究である。』

実験体・？1（年齢32）は被検体が死亡した為、失敗に終わる。『ん？・・・！！ 実験体・？1つて管理局の人間やないか！？』

「え！？ ちょっと待って下さい・・・。。。。。。本当だ・・・その人行方不明で搜索中って書いてあります」

意外な事に実験体・？1は管理局の人間で、ティアナが小型機械で調べてみると行方不明とだけ記載されていた。
尚も説明は続けられる。

「失敗した理由を解析すると、デバイスにAIだけでなくデバイス特有の体が必要だと判明した。我々はすぐに生物を捕獲しデバイスに与えて見る。

成功したのはわずか8つのデバイス。だが、これだけあれば十分研究は可能だ。実験体・？2（年齢30）を用意させすぐに実験を開始するが、また失敗に終わる。

何が原因なのか考えると、答えは簡単に出る。原因は人間のリンカーコア。6歳を過ぎるとリンカーコアは完全な状態となるため、他のリンカーコアを体が拒むのだ。

我々はすぐに5歳以下の子供を確保し、実験を再開する。

実験体・？3（年齢4）は一つ目のデバイスとの融合をついに成功させる。皆喜びに打ちあふれていた。だが、これだけではないあと7つのデバイスがあるのだ。

我々は尚も実験体・？3でデバイスとの融合を実験する。実験体・？3はその後も着々とデバイスとの融合を成功させる。

最後の実験。我々は期待に満ちた気持ちで実験を始める。そして、実験は成功し皆その結果に内振るえていた。

だが、問題が発生した。最後の実験で気絶したと思われた実験体・？3が最後の実験で融合させたデバイス「レクイエム」を発動させ我々に攻撃をする。

我々は実験体・？3に麻醉銃を撃つが効果はない。どうやら「レクイエム」に体に乗っ取られているようだ。そのまま実験体・？3は研究員を殺し続ける。

だが、いきなり実験体・？3は行動を停止する。停止の原因は魔力

を使い果たした事だと思われる。我々は何とか生き延びる。実験体・？3が殺した研究員の数は13人。

しかし、我々は研究をあきらめる事はなかった。尚もデバイスと人間の融合させる研究を続ける。だが、実験体・？3の様な結果は表れなかった。

実験体・？3の成功から半月後。突如、実験体・？3が逃亡したのだ。我々は防衛システムを起動させるが、実験体・？3は融合させたデバイスで防衛システムを破壊。

逃亡に成功したのだ。我々は実験体・？3を搜索するが手掛かりすら見つからなかった……。『……。ここまでみたいやな……。』

「こいつら、人間を何だと思ってやがる！！」

はやてが内容を読み終えると、ヴィータが眉間に皺をよせ怒鳴り散らしていた。

他の六課メンバーもこの内容には、怒りが沸いていた。

そして、研究内容に出てきた単語にフェイトはある事に気がつく。

「ねえ、皆。この廃墟に入る前、防衛システムが何て言ったか覚えてる？」

「ん？ 確か……。侵入者発見。実験体・？3 まさか！ 夜桜が！」

フェイトの疑問をシグナムが答えると、皆がはっとした顔になる。
そして、本人に聞こうと陵哉に顔を向ける。

「あれ？ 陵哉は？」

辺りを見渡すが陵哉の姿はどこにも見当たらない。
どこに行ったのかと探そうとした時だった。

ガキン！！ ドゴン！！！！

遠くの方で何かを斬る音と壁が崩れる音が聞こえたのだ。
皆何が起こったのかと思ったが、フェイトだけはその音を聞いて駆け出した。

「フェイトちゃん！？」

なのはが呼び止める為、声を発するがフェイトには聞こえていなかった。

フェイトはただ、陵哉がいると思われる方向に走って行く。
他のメンバーも急いでフェイトの後を追った。

第11話 逃亡の果てに

フェイトはただ、陵哉がいると思われる方向に走って行く。
そこに陵哉がいるとは限らないが、何となくフェイトは本能的にこ
っちだと思わせる。

そして、フェイトの本能はこうも告げていた。『急げ』と。

研究所 一室

その一室の扉が開きっぱなしになっていた。

フェイトは、その部屋に中を見ると、そこには

「ひっひいいい・・・命だけは・・・命だけは助けて下さい!」

壁に追い詰められた50代の男の首元に陵哉がゼヘルをあてがう。

「黙れ、この屑野郎が！！ やつとみつけたぜ・・・あの屑とデメエだけは・・・殺すと決めてんだよ！！」

そして、陵哉が鎌を大きく振りかぶる。

「やめて！ 陵哉！！」

ガシッ！

フェイトが陵哉の体を抱き止め、陵哉の行動を防ぐ。
だが、それでも陵哉のいきおいは止まらない。

「放せフェイト！！ こいつは・・・こいつだけは絶対に殺す！！」

「駄目だよ！ お願いだからやめて！！」

「うるせえ！！ こいつは俺の・・・俺の母さんを！！！！・・・
母さん・・・を・・・」

「！・・・陵哉・・・？」

抱き止める対象が力なく凭れかかり、その場に屈みこむ。
その陵哉の目には、もう相手を殺す思いは見えなかった。
そして、六課メンバーが遅れて現場に到着する。

「・・・すまん・・・フェイト。少しだけ・・・胸・・・貸してく
れ・・・」

「うん、いいよ」

「・・・うう・・・くっ・・・」

いつも冷静沈着な陵哉をここまで感情を爆発させるほどだ。それほど陵哉にとって母親の存在は強かったとフェイトは思い知らされる。フェイトは優しく子どもをあやす様に、陵哉の髪をなでる。
その間に、フェイトが念話でなのはに男を確保して、部屋を出てほしいと頼まれ、なのははその通りに行動した。

何分間そうしていただろうか。

陵哉は落ち着きを取り戻し、今の自分の状況を理解して頼に赤みが生じる。

「・・・悪い、ありがとう。もう大丈夫だ／＼／」

「そう？」

陵哉はフェイトから離れ、地べたに座る。
フェイトもその横に座った。

「なあ、俺は・・・これからどうなる・・・？」

ふと、陵哉が自分のこれからを聞いてみる。
フェイトは静かにそして、丁寧に応える。

「普通なら、裁判にかけられて審議される。陵哉の場合、器物破損、

デバイスでの違法攻撃、かな？

まあ、死傷者は出てないから、執行猶予3年、懲役2年くらいかな？

でも、あのPCの資料を提出すれば無罪になる筈だよ」

無罪になる、という言葉で少し拍子抜けした顔になる。

陵哉は少し微笑んで、口を開く。

「実はさ・・・俺死刑覚悟でこの事件起こしたんだよ」

「え・・・」

「俺は逃げてから凄く後悔したんだ・・・何で生きている奴を連れて逃げなかったのか・・・研究員ではなく防衛システムを破壊したのか・・・って

だから、あいつの実験で死んでいった者たちの仇と母さんの復讐・・・そして、俺と同じ存在がこれ以上生まれない様にする為に・・・事件を起こした。

それから・・・」

「？・・・それから・・・何？」

「・・・いや・・・何でもない。」

すると、陵哉は立ち上がり出口に歩いていく。

「あの男から話を聞かねえといかないんだろ？ さっさと行こつぜ」

「あ、うん」

フェイトも慌てて立ち上がり、後に続く。
その顔は何か腑に落ちない顔をしていた。

（陵哉の『それから』の後・・・『妹』って聞こえたような気がしたんだけど・・・気のせいかな？）

フェイトは陵哉の後を追った。

第12話 再開

陵哉とフェイトはなのは達の居る所まで来た。

その目の前にはバインドで縛られた、研究員がいた。

「さて、まず訊こか。何でこんな研究をしようと思ったんや・・・？」

2人が来たところで男からの尋問を始めるはやて。男は陵哉におびえながらも、口を開き説明をする。

「強哉さんが任務中の管理局の人間を捕えて、色々聞いたことが発端です。」

その頃強哉さんは独自に魔法の研究を行っていて、拘束系の魔法は一番進んでいて局員を捕えるのは簡単でした。

そして、強哉さんはこの研究を思いついたんです。その1番目の被検体が

「その捕えた局員ってことですか？」

「ええ、そうです」

なのはが話に割り込んで確認をし、男は肯定した。
尚も話は続く。

「実験は失敗。解決法を見つげるために私達は男とデバイスのデータを調査しました。

結果、デバイスには固有の肉体が必要と判明し、私達はあらゆる生物を捕獲しました。

ただ、一番苦労したのは『レイ』と『ゼヘル』、そして『ガルーダ』。この3体はどの生物も受け付けなかった。

ですが、強哉さんがデータを送りこんで肉体を創ることで完成しました。

これで実験が続けられると皆確信していたんですけど、被検体が見つからなかった。

だけど、強哉さんは被検体を連れて来たんです……気を失った夜桜春佳よさくら はるかという自分の妻を連れて……」

「「「！」「」」

全員その言葉に息をのむ。強哉の妻という事は陵哉の母親ということになる。

以前、陵哉が言ったとおり、強哉という男は自分の研究の為ならどの様な犠牲が出ようと構わない、と思うようになった。

「私以外の研究員は抗議しました。ですが、強哉さんは考えを変えようとはしなかった。

遂にはこうも言いだしたんです・・・『実験が失敗したのは被検体が男だったからかもしれない』と・・・

その言葉で他の研究員は何も言わなくなり、実験を続行した・・・春佳さんに実験をしたのは私ですが」

「それじゃあ、陵哉がこの人を殺そうとした理由って・・・」

「ああ、俺が母さんの実験している処を見ていて、コイツの顔を見たからだ。

その時、全身から血を噴き出して死んでいる母さんを見て、俺は人生初の憎しみの感情が浮かんた」

フエイトが陵哉の方に顔を向けると、陵哉は淡々と答える。
研究員は罪の意識を感じながら話す。

「その実験も失敗に終わり、他の研究員もどうすればいいのかと悩んだ。

ですが、強哉さんは『原因がわかった』と言いだしたんです。皆その言葉に春佳さんが死んだ事なんてどこ吹く風でした。

強哉さんが言った原因はリンカーコアが完全だから他のリンカーコアを受け付けないという事でした。

その仮説に皆、成程という顔をして納得したんです。そして、強哉さんはすぐ近くにいた・・・陵哉君を実験台に乗せて、『ゼヘル』との融合を始めたんです」

「なっ！？ 初めの実験は父親がやったというのか！？」

「はい、その通りです。実験は成功しましたが・・・陵哉君は意識を失ってしまいその日の実験は終わりました」

シグナムが研究員に聞くと落ち着いた様子で答えていく。

「次の日・・・陵哉君はまだ目を覚ましていなかったのですが・・・強哉さんは実験をしろと言って来たんです」

「え！？ だつて・・・まだ陵哉は目を覚ましていなかったんですよね！？」

「はい・・・ですが、『そんな事は気にするな、コイツはただの被

検体。どういう結果が出ようとまた被検体を連れてくればいいだけのことだ』そう、強哉さんに言われ、皆実験を行いました。

そして、『レイ』との融合を始め、身体に入れた瞬間、激痛で陵哉君は意識を取り戻して叫び声を上げながら実験を続行。その日は3つのデバイスとの融合を終え残り4つとなりました。

翌日も陵哉君は意識を失っているところにまたデバイスと融合させました……。また激痛で意識を取り戻しては叫ぶだけ……。その日も3つのデバイスとの融合を終えて残り1つ。

皆もう罪の意識など微塵も感じていなくて、実験の成功と期待の目をして最後の実験『レクイエム』との融合を始めました。実験は成功、また陵哉君は意識を失いました。

皆喜びと達成感に浸って周りが見えなくなっていました。ですが、いきなり意識を失ったと思っていた陵哉君は起き上がって『レクイエム』を起動させ、私たち研究員を殺し始めました。その目に感情の色はなく、私は『レクイエム』に乗っ取られたのだと確信しました。私はこれは天罰だと思いながらも、陵哉君は殺し続けました。

ですが13人目を殺した後、いきなり行動を止めて陵哉君が倒れたんです。全員魔力が尽きたと思います。陵哉君を拘束して部屋の一室に閉じ込めました。

それで、この研究から手を引くという者たちが現れ、強哉さんに申し出たのですが……。全員、強哉さんに殺されました。残った私たちは怖くなり、強哉さんの言いなりになりました。

生物を集めデバイスに送り込んだり、他の子供を集めたり、その子供で実験を行ったり……。そんな日々が半月続いた後……

陵哉君が逃亡したんです。強哉さんは防衛システムを起動して捕獲しようとしたが、デバイスを与えたのが仇となり陵哉君の逃亡は成功しました。

強哉さんは追いかけて捕えろと言いましたが、私達は表面上の捜索しかせず、陵哉君を探さなかった。私達なりの罪滅ぼしと思いこんでしました。

その後、強哉さんが転移魔法の研究をしていると誤って発動し私以外の研究員は飛ばされました。そして、私はここでずっと生活していました・・・これが私の知る全てです」

最後の部分は全員、遮らずに聞いていた。

いや、言葉を失って、声を発せられなかったと言った方がいいだろうか。

その研究員に陵哉は静かに近づく。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「はい、私が知っている事なら・・・」

「・・・俺がいなくなったあと、俺より年下の女の子は実験したか？」

「?・・・いえ、いつも男の子で実験していましたが・・・?」

その言葉に陵哉は頬を緩ませ、そうか、とだけ言った。
だが、その顔は驚きの表情に変わった。

ジャラン

「！！ 転移魔法！？」

陵哉と六課メンバーがいる足元に転移魔法の陣が現れる。

「この魔法陣・・・局の魔法陣や！？」

「くっ・・・おい！ 研究員！」

「は、はい！」

陵哉が、苦虫をかみつぶした顔で研究員を呼ぶ。

「ここにいる全員の死体を土に返してやってくれ・・・母さんは俺が埋めるから、穴だけ作ってくれ」

「は、はい！！ 一生懸命やらせていただきます！！」

そして、全員ミッドに転送された。

ミッドチルダ本部 訓練場

そこに全員転送された。

まわりには局のAランク魔導師。目の前にはクロノ・ハラオウン、そして

「・・・やってくれたなあ、陵哉。テメエ、俺の研究所を潰しやがって・・・」

「貴様・・・強哉！！！！」

目の前には、16年前の実験の首謀者：夜桜強哉がいた。
六課メンバーはただ呆然と見るしかできなかった。

第13話 終焉（前書き）

今回は話の終わりの部分に「*」というマークがあります。

このマークでは、YOUTUBEで「無題」「恋心を奏でる綺想曲」

【リトルバスターズ！】
『又は「リトルバスターズ！」「遙か彼方」をアコギで弾いてみた。』を検索して流してみてください。

それでは、第13話 終焉 始まります。

第13話 終焉

「……久しぶりに息子に会ったと思ったら、こんな状態で会うとはな……残念だ」

「ふざけんな！！ 貴様のせいでどれだけ命がなくなったと思っ
ていやがる！！！！ ……母さんだって貴様が殺したようなもん
だろ！！！！」

強哉のふざけた態度に陵哉は罵声を浴びせる。
だが、陵哉は急にその怒りを抑え、深呼吸をして強哉に聞く。

「一つ聞く……佳奈多……俺の妹：夜桜佳奈多はどこにいる！
！」

「え？ ……妹……？」

フェイトは陵哉から発せられた言葉に驚く。

「佳奈多？ お前の妹？ ……さあ？ しらねえなあ……」

「……この屑野郎が……やっぱり貴様は……」

陵哉は沸々と怒りとともに魔力を放出し、威嚇する。その魔力の色は黒。

その行動に周りの魔導師達は戦闘態勢に入る。クロノも例外ではなく、戦闘態勢をとりS2Uを起動させる。

「……殺す……貴様だけは必ず殺す！！ 原形を留める事なく全て潰す！！」

言った瞬間、陵哉は人差し指を切り、血を二滴流す。

「ライガー、ガルーダ！！ こい！！」

一滴はダガーを刀身（3？）だけにしたものが6つ。もう一滴は火

の鳥と化した。

陵哉は指と指の間で全てのダガーを握る。

「ガルーダ・・・ごめんな、アレを頼む」

《キエエ》

ガルーダは言葉を発せられないのか、鳴き声でわかった、と表現する。

陵哉はダガーに魔力を込める。

「行くぜ、ライガー。スリープ・ジョット!!」

6つのダガーを投げると、そのダガーは神速で動き回り、局の魔導師に攻撃する。

「ぐああー!!」

「な・・・は、速すぎr・・・うああ！」

「くそ・・・！！ ああ！！！」

次々と魔導師が倒れていき、残ったのはクロノだけだった。
フェイトはバルディッシュを起動させ、バリアジャケットに身を包み、陵哉に接近する。

「陵哉！！ お願いだからやめt」

「ジリス。スネークチェーン・モードフェンス」

バコン！ ジャララララ！！

地中からいきなり鎖が現れ、フェイトに絡みつき、六課メンバーの所に引きずり戻された。

そして、その場所に鎖が幾つも重なり鎖の囲いができた。

「……！ 陵哉……！ これ解いて……！」

「そっや！ クロノ提督やったら話も聞いてくれる！ やから」

「駄目だ……お前達はこの戦闘に関わるな。
それに、話を聞くのならこの戦闘が終わってからでも、遅くはない……」

フェイトやはやての説得にも応じず顔を前に向ける。
陵哉はガルーダ何か指示をした。

《キエエ……！！！！》

ガルーダは鳴き声を上げると、山吹色の光を放ち辺りを照らした。
陵哉以外は、その眩しさに目を閉じる。

「ライガー。リヴィティングモード」

陵哉が握っていた、ダガーは一カ所に集まりその姿を白虎へと変える。

ライガーは全ての魔導師をあの囲いの中に数瞬で運んだ。

そして、クロノが目を開けると、囲いの中に先ほどやられたはずの魔導師がおり、傷を一つも負っていないかった。

代わりに

「ちっ・・・やっぱりこの人数の傷を全て負うとなると・・・きついなあ」

傷だらけの陵哉が目の前に立っていた。

クロノはその光景に驚きの表情をして、陵哉に聞く。

「何故そんなに傷だらけになっている。あの光のせいかな？」

「ああ・・・そうだ・・・このガルダは対象者の傷を自分か俺に移す能力を持っている。」

まあ、あの屑野郎と俺以外は怪我人を出したくないんでな・・・さて・・・あんたも邪魔するんなら・・・力付く退いてもらおうか・・・トーガ!!」

ライガーとガルダは霧散して血に戻る。
傷口から出ていた一滴の血は陵哉の両手の甲に鉄甲を装備させた。

「・・・貴様のような奴と戦いたくはないが・・・上からの命令だから・・・」

クロノもS2Uを握り直し、陵哉に構える。
陵哉は真正面からクロノに向かって走り出す。

「ステインガーレイ!!」

魔力弾を撃ち、高速で陵哉に向かっていく。
だが陵哉は、避けるそぶりを見せず、そのまま走り続ける。

「カートリッジロード」

ガシャン

左の鉄甲に弾が一発装填される。

「ヒート・マキシмум!!」

陵哉の左手が炎に包まれ、炎の左腕で魔力弾に攻撃する。

ドゴン!!

辺りに爆発音が響き、魔力弾は消滅した。
だが、尚も陵哉の勢いは止まらない。今度は右の鉄甲に弾を二発装填した。

「ダウン・マキシマム」

陵哉の右手がクロノの腹部を直撃する。

クロノは激痛に襲われ、両膝を地に着ける。

そこから、立ち上がろうとするクロノ。だが

「！！　な・・・んだ・・・」

足が全く動かず、立ち上がることもすらできなかった。

「さっきの攻撃で、足を完全に封じさせて貰った。

あんたは、そこでおとなしくしていてくれ・・・」

それだけ言うと、ふらふらな状態で強哉に向かって歩く陵哉。
だが、クロノは拳を作り、陵哉の腹部の傷を殴った。

「がはっ！！！！」

そのまま、吹き飛ばされ5m先で止まり、立ち上がろうとする。
だが、クロノはデュランダルを発動させ、陵哉の足を凍らせ、陵哉の行動を防いだ。

「なっ！？ くっ・・・この程度で・・・！！」

陵哉は凍った部分を破壊しようとする。
だが、陵哉の行動はいきなり止まった。
それから少し考える仕草をして、口を開いた。

「・・・・・・・・・・なあ、俺がここでお前らに全てを話、証拠品も提示したら俺の頼み一つ位は聞いてくれるか？」

「？・・・ああ、お前が話すというのなら聞いてやらない事もないし、頼みの一つ位なら聞いてやろう・・・」

「そうか・・・なら、あんただけは解除しよう・・・」

陵哉は鉄甲を霧散させると、クロノの足は自由に動くようになった。クロノは陵哉の目の前に来て、話を聞こうとする。

「クロノ提督！！ そんな奴の話、出鱈目に決まっている！！ 今すぐこの場でそいつを殺さないと後々」

「黙ってください、夜桜研究課長。貴方に罪人を殺す権限はない。それに、この男これから話す事が嘘だという証拠もないし、その話の証拠を提示してくれると言っている。なら聞く価値はある」

「くっ……（このかたぶつめ……だが、あいつの頼みとは何だ？）」

陵哉は、目を閉じ念話で六課メンバーに話しかけた。

（六課メンバー、俺はこれからクロノ提督に嘘の報告をする……口を挟むなよ？）

六課メンバーは疑問に思ったが、陵哉の言葉に了承した。

それから、静かに陵哉は16年前の事、なぜ自分があの事件を起こしたのかを話し始めた。

だが、話した内容は六課メンバーが見たものとは真反対の話をしていた。

クロノは話を遮る事なく、陵哉の話を聞いていた。六課メンバーも陵哉の話を遮ることなく聞いていた。

そして、話し終わると一つのUSBを胸ポケットから取り出し、クロノに渡した。

*

「こいつはさっき言った証拠のデータ。そして、その場所の位置も記してある。

そこに、一人の研究員もいる。そいつから話を聞いて・・・できれば保護してやってくれ・・・」

「ああ、わかった・・・それで、お前の頼みとは何だ？」

クロノの問いに陵哉はフェイトに顔を向けた。

「フェイト。これはお前に頼みたい。

「・・・俺の妹を搜索して、保護してやってくれ」

「え？・・・私が・・・？」

「おい！！　そんなの認めねえぞ！！　あいつは　」

その話に強哉が割り込んできた。
だが、陵哉はそれに一蹴する。

「お前はさっき、俺の問いに『妹は知らない』と言った筈だ・・・
なのに何故お前が喰いついてくる」

「くっ・・・それは、娘を危険な場所に　」

「俺はフェイトに『保護』を頼んだ。危険な場所に行かせるわけじゃない」

強哉は苦虫を噛み潰したような顔をして、次の言葉を考える。
だが、陵哉の方が二手も三手も早く行動した。

「フェイト・T・ハラOWN執務官。罪人：夜桜陵哉の頼みを聞いてもらえるでしょうか？」

「・・・はい。わかりました。」

フェイトの返答に、満足そうな笑みを浮かべる陵哉。

強哉はまたしても、後れを取ってしまう。

そして、陵哉はさっきの表情のまま溜息をつき、空に顔を向ける。

「そっか・・・はは・・・これで、俺の願いは叶ったかな・・・」

ドゴン！！ ジャラララ！！！！

いきなり陵哉の周りに鎖が現れ、丁度フェイト達と同じ状態になった。

驚愕の表情を浮かべる一同。

「じゃあ、全員。俺は罪を認め・・・自害する」

その目には迷いの色はなく、すべてを受け入れ、最後の仕事をしようという顔だった。

フェイトは鎖に手を掛け、必死に止めようと声を投げかける。

「陵哉！？ 何言ってるの！？ ダメ！！ 死んじゃダメ！！」

「・・・ありがとな。だけど、これが俺のいく末なんだよ・・・
『レクイエム』」

大量（1 / 13）の血が陵哉の手に集まり、漆黒の剣へと姿を変える。

その漆黒の剣の切っ先を自分の左胸にあてがう。

「陵哉君！！ やめて！！」

「そや！ 死ぬ必要なんかない！！」

「お前！！ そんな事すんな！！」

「くっ、この鎖なぜ斬れない！！」

「駄目だよ！！ 自殺何か駄目！！ 陵哉さん！！」

「あんた！！ やめなさい！！ そんな事しても意味ないわよ！！」

フェイト以外の六課メンバーも必死に陵哉を止めようとする。
だが、陵哉の心には届かない。

「ジリス！！ 陵哉を止めて！！」

《・・・無理よ。私たち全員、邪魔するなって命令なの・・・
主の命令は絶対に逆らえないの・・・私達は・・・》

フェイトはジリスにも陵哉を止めるように言っが答えはnoだった。
そして、陵哉が柄に力を込める。

（フェイト・・・）

（え？ 陵哉！？ 何で念話？ ・・・やめて！ 自殺何か ）

（黙って聞いてくれ、フェイト）

陵哉はフェイトに念話で話しかけている。
フェイトは自殺を止めようとするが、陵哉の言葉で黙ってしまった。

（俺・・・・・・・・お前が好きだったよ）

（え・・・）

グサッ

ドサ

辺りに静止が訪れる。
目の前の一人の男の死で、思いは違えど、その場は静まり返っていた。

バキン!!!!!!!!!!

「・・・陵哉あああああああああああ!!!!!!!!!!」
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

その場に、女性の叫びと鎖がバラバラになる音が木霊した。
バラバラになった鎖は、フェイトの心を映しているようだった。

第14話 残されたもの

「陵哉ぁ・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・返事・・・・・・・・してよ・・・・・・・・」

フェイトが泣きながら、傷だらけの陵哉を抱き抱え呼びかけていた。だが、陵哉からの返事はない。フェイトはさらに陵哉が死んだという事実突き付けられる。

周りの人間も陵哉が死んだ事実を受け入れられずにいた。しかし、一人の男の言葉で六課メンバーに怒りがこみ上げる。

「くくく・・・・いや、まさか自害をするとはなぁ・・・・・・・・目の前のチャンスを自分で不意にしたという事か。

まあ、さっきの報告じゃ死刑になるのは当然の結果だよなあ。死刑になるなら自害しますってか？ 馬鹿か？ こいつは？」

「！！」

強哉の言葉に六課メンバーは怒りがこみ上げ、フェイトだけは強哉を睨んだ。

その行動に強哉は口角を上げ、訓練場の出口へ向けて体を反転する。数歩歩いた後、顔だけこちらにむけ、止めと言わんばかりに言い放

っ。

「ああ、その遺体だが・・・面倒ならその辺に捨ててもかまわねえぜ・・・」

人権なんてものを微塵も感じられない声音と言葉でフェイトの怒りは頂点に達した。

「っ！！ 貴方は！！」

強哉に掴み掛る勢いのフェイトをクロノが止める。
だが、フェイトは感情を抑えきれず、強哉に罵声を浴びせる。

「よくもそんな事を平気で・・・！！ 陵哉は自分と同じ存在を産み出さない為に死ぬ覚悟でこの事件を起こした！！
確かにやり方はいけなかったけど・・・そこまで言われるほどじゃない！！」

「フェイトちゃん・・・！ 堪えて・・・ここでフェイトちゃんが

騒ぎを起こしたら執務官から降ろされるし、何より陵哉が喜ばへんで・・・？」

「でも・・・！！」

「フェイトちゃん・・・落ち着いて・・・」

「・・・・・・」

はやてとなのはに言われ、フェイトは何も言わなくなった。強哉は鼻を鳴らして、訓練場から出て行った。その場には怒りと憎悪、そして、悲しみと絶望感が入り混じっていた。

陵哉が自害した翌日の早朝　クロノの仕事場

そこでクロノは、昨日陵哉からもらったUSBを確認していた。昨日の深夜の内に陵哉が言っていた座標の研究所に行き、その中で生活していた研究員を保護し、今日の昼に事情聴取と研究所の搜索

が行われる。

USBの中を確認していると、昨日陵哉が話していた内容とは全く逆の事が書かれていた。

クロノは驚愕の表情でその内容を見ている。

「ッ・・・僕は、正しい事をしていた人間を死に追いやり、悪事をしていた人間を庇って・・・くそっ!!」

ガン!

ディスプレイの画面を見ながら、自分に腹立って机を殴った。そして、内線で警備員に連絡をした。

「はい、何かご用でしょうか?クロノ提督」

「今すぐ夜桜強哉を逮捕しろ!! 今すぐだ!!」

「は、はい? い、一応聞きますが・・・た、逮捕状は?」

「そんな物は後からでもどうにでもなる！！ 夜桜強哉をここに連れて来い！！」

「は、はい！！」

クロノの威圧感に負け、その警備員は指示通りに強哉を逮捕しに向かっていった。
立ち上がって怒鳴っていた事に気付き、クロノは椅子に座り直した。

(・・・・・・あの夜桜陵哉の為に・・・・そして、フェイトの為に、夜桜強哉に事情を聴かねば・・・・)

ピピピピピ

内線の電話が鳴り、クロノはディスプレイを出す。
すると、先ほど強哉の逮捕を命令した警備員が慌てた様子で報告する。

「ほ、報告します！ 夜桜強哉研究課長の部屋には誰もいません！
！ それどころか研究資料も何もありません！！」

「な、何だと！？ すぐに局内の監視カメラの確認と夜桜強哉の捜索！！ これは提督命令だ！！」

「は！」

警備員に命令をした後、クロノはすぐに部屋から出て行き、ある場所に向かって行った。

六課本部 フェイトの部屋

「フェイトちゃん？ 少しでも食べないと体持たないよ？」

「なあ、フェイト・・・少し位食べてくれん？」

なのはとアルフがドア越しに呼び掛けるが、フェイトは全く反応を示さない。

あの一件以来、フェイトは自分の部屋から出る所か、食事も口々に摂っていないかった。

昨日から部屋に籠っていて、昨日はずっと泣く声が聞こえていた。

アルフはフェイトと精神リンクしている為、昨日の夜、走ってここまで来た。

他のメンバーは先ほど連絡が入り、強哉の搜索に行っていて、なのはだけはフェイトが心配という事で残っている。

「ごめん・・・なのは、アルフ・・・・・・・・今、食欲無いから・・・」

「・・・そつか・・・それじゃ、何か用があつたら言ってね？ フェイトちゃん」

「元気出してくれよ・・・」

「・・・うん・・・ありがとう。なのは、アルフ」

フェイトがなのはとアルフに礼を述べると、なのはとアルフはその

場から去ろうと足を進める。

だが、その足は意外な人物によって止まることになった。

カツ カツ カツ

「え？・・・クロノ君？」

「なのは、アルフ・・・フェイトはどうだ？」

目の前から歩いてきたのは、フェイトの兄で機動六課の後見人であるクロノ・ハラウン提督がそこにいた。

真剣な目つきでなのはにフェイトの状態を聞く。

なのはは、俯いた状態で頭を左右に振った。

「・・・そうか・・・」

クロノはそう呟いた後、なのはの後ろを通り過ぎ、フェイトの部屋

の扉に手を掛けた。

「ちょ！？ クロノ君！？」

「な、なにやってんだい！？ クロノ！？」

2人が呼び止めも聞かず、扉を開けはなった。

「「「！！」」」

そこに広がっていた光景に、3人とも言葉を失った。

色々な物が、床に、机に、あらゆる所に散乱している。三人とも、これがフェイトの部屋だとは信じられなかった。

そして、壁の一角所は血に染まり、ベッドに顔を埋めているフェイトの手の甲は、手当もせずに傷がむき出しになっている。

「フェイト！？」

アルフがフェイトの状態を確認して傍に行く。
近くで傷口を見ると、できてから何時間も経っているのか、化膿していた。

「まっててフェイト。すぐに治すから」

「・・・アルフ・・・？」

そこでやっと顔を上げたフェイトの顔は、ずっと泣いていたのか、涙を流した跡が幾つもでき、いつものフェイトの面影はなくなっている。

そんな事は気にせず、アルフは治癒魔法でフェイトの傷を治す。以前は使えなかったが、クロノの子どもが怪我をした後の事を考え必死に覚えたらしい。

数分でフェイトの傷は治り、その場に沈黙が訪れる。

「・・・フェイト、単刀直入に言う。夜桜強哉が逃亡した可能性があり、僕とフェイトは、これから夜桜強哉の家に行き家宅搜索するつもりだ」

「!!! クロノ君!? 今のフェイトちゃんに家宅搜索させて、ま

ともな判断ができるわけ・・・！」

「そうだよ！ クロノ、考えなおしてくれよ・・・」

クロノの言葉に2人は反発する。フェイトは何の反応も示さない。だが、クロノはフェイトの説得をやめない。

「君は・・・夜桜陵哉の頼みを・・・あの行為を無意味なものにする気か・・・？」

「！！！」

フェイトは、『陵哉』という単語で顔に、少しだけ生気が宿る。なのはとアルフは心配そうに見守るだけだった。

「あいつは、フェイト・・・君に自分の妹の保護を頼んだ。それがどういう意味なのか・・・わかるか？」

普通は、誰よりも兄が妹を護りたいはずだ。だが、それを君に託した。陵哉はそこまで追い詰められていた。そして、君なら妹を救えると信じて・・・君に保護を頼んだんだ。

だから、フェイト。陵哉の最後の頼みを素直に聞いてやってくれ．．
」

自分が兄の立場だから言える言葉、わかり合える気持ち。

本当に陵哉がそう思っていたのかはわからない。だが、兄ならばこの様に考えるであろうと、クロノは思っていた。

「．．．．．私は、その妹さんに．．．佳奈多さんに会って．．．
陵哉が死んだ事を伝えて．．．恨まれないかな．．．？」

掠れた声で、フェイトが言ってくる。

クロノは目を瞑って、頭を左右に振るが、言葉を止める事はない。

「それは、わからない．．．だが、僕は陵哉を死に追い込んだ者の
1人だ。だから、僕はその罪滅ぼしがしたい。

こんな事で罪滅ぼしになるかはわからない．．．だが、やらないと
いけないんだ。残された者は死んだ者の頼みをできるだけ叶えてや
ることが仕事だ。

．．．フェイト．．．君はその仕事をするか？」

「．．．私は．．．」

「車を本部の前に出しておく・・・来るのなら顔を洗って涙の跡を拭いてから来い・・・」

それだけ伝えたと、フェイトの部屋を出ていった。
その場には静止が訪れる。

「フェイト」

バッ

なのはが声をかけようとした瞬間、フェイトが立ち上がって洗面所に向かっていく。
だが、フェイトはいきなり止まる。

「・・・私は・・・陵哉が好きだから・・・陵哉の頼み事を果たすよ。」

それが・・・今の私がすべき事だから・・・」

そう言うと、顔を洗うために洗面所へと歩いて、中に入って行った。数分後、支度を済ませたフェイトが部屋を出て行く。

「行つてらっしゃい。フェイトちゃん」

「行つてらっしゃい。気を付けてな？ フェイト・・・」

「うん。行つてきます。なのは、アルフ」

そして、フェイトはクロノと一緒に夜桜強哉の自宅に向かつて行つた。少しだが、フェイトは陵哉の死を受け入れた。これから自分が何をすればいいのかわからないが、今は陵哉の頼み事を果たそうと決めた。

第15話 夜桜佳奈多

今、クロノとフェイトが車で強哉の自宅に向かっている。
車内は沈黙。2人とも喋る事なくクロノは車を動かしていた。

ビービービー！！

「！！！！」

突然、車内にアラームが鳴り響く。
次いで、機動六課のグリフィス・ロウランから通信が入る。

「クロノ提督！！ フェイト部隊長！！ 今、夜桜強哉氏の自宅付近で戦闘反応がありました！！ 今すぐ現場に向かってください！！」

「了解。戦闘している者はわかるか？」

「少し待って下さい・・・・・・・・！！ 片方は夜桜強哉氏です！？」

「！！ 本当か！？」

「はい。ですが、もう片方は・・・わかりません。魔力値もはつきりとは言えませんが少なくともA A Aランクです」

「了解した。今すぐ現場に向かう。サポートは任せる」

「はっ！」

そこで通信が終了し、車内は緊迫した空気が流れる。

クロノがサイレンを鳴らし、スピードを100/K M近くまで加速させる。

ふと、フェイトが先に口を開く。

「お兄ちゃん・・・現場についたら、私が戦闘している所に行くから、お兄ちゃんは家宅捜査を」

「駄目だ。お前は援護が来るまで待機だ」

フェイトの提案にクロノは反対した。

「で、でも！」

「今のお前は万全の状態じゃない・・・そんなお前にAAAランク級の魔導師を相手にできるとは思えない」

「・・・」

クロノの言動でフェイトは何も言わなくなった。
膝の上に置いている手が、拳に代わり震えている。

「・・・やはり、フェイト。僕の後方支援をしてくれ。相手の力量が分からない以上1人で行動するのは危険だからな」

「！！・・・お兄ちゃん・・・うん！」

頷いたフェイトの顔は2日ぶりの笑顔だった。

夜桜強哉 自宅付近上空

ガンガン ガゴン！！

「くっ！・・・貴様・・・何者だ！！」

強哉が杖状のデバイスで受け止めていた、相手のトンファーの様な物を弾き返す。

だが、相手はバックステップで攻撃をかわす。強哉の質問に答えるどころか声一つ出さなかった。

相手の顔は異様な仮面が頭全体に覆われ、髪の色すら確認する事は出来ないが、両腕にトンファーを持ち、外見から察するに男だという事がわかる。

そして、強哉の右腕には藍色の髪をストレートにした18歳位の女性を抱えられていた。

「・・・・・・・・」

「ちっ・・・答えるつもりはないか・・・」

（とりあえず・・・こいつから早く逃げないと・・・ん？）

相手を警戒しながら考え込んでいると、一つの車が目に入った。そこから出てきた人物は、クロノとフェイトだった。それを見た瞬間、一瞬だけ強哉に隙ができた。

（！！　ちいっ！　こんな時に！！）

「・・・」

男はそれを見逃さず、一気に強哉との距離を詰める。
そのまま、右足を頭の上まで上げる

「！！」

ドガッ！！

男はそのまま右足を強哉の右肩に強烈な踵落としとして攻撃させ、右腕を麻痺させる。

「ぐあ！！」

声を上げながら、左手で右肩を抑える。
だが、右腕が麻痺すると同時に抱えていた女性が重力に従って地に落ちていく。

（！！　まずい！！）

強哉は急いで女性の傍に行こうとするが、男がそれを許さない。
トンファーを急所に向かって放ち、強哉は回避に専念せざる負えなくなる。

その間にも女性と地面の距離は狭まる。

《set up》

そんな無機質な声と共に金色の閃光が辺りを照らす。
現況を確認すると、黒を主調としたバリアジャケットに身を包んだ
フェイトが女性を抱えてこちらを見ていた。

「今すぐ戦闘をやめ、こちらに投降してください」

「・・・くそっ！ ゲームオーバーかよ！」

ビキン！！

ミッド式で紫色の魔法陣が強哉の足元に浮かぶ。
フェイトはソニックムーヴで強哉の所まで行こうとする。が

「！！ あ・・・・・・・・う・・・・」

強烈な疲労と睡魔が襲って来て、地に片膝を着いた。
そして、強哉は転移魔法を発動させ、そこから撤退した。

「くっ・・・・・・・・」

頭を左右に揺らして、自分に喝を入れる。
そして、フェイトは残った男に視線を向ける。
男もこちらに体ごと向けて、静かにフェイトを見据える。

「・・・・・・・・話し」

ガシャシャン！

男がこちらに両方のトンファーを向け、弾を左右2発ずつ装填する。
フェイトは急いで、防御の体制をとる。

ドガン！！！！

だが、放ったのは衝撃波。
男はそれを出力にその場から離脱した。

「！！ あ、待って！・・・」

フェイトが呼び止めようとするが、男の姿はもう見えなくなっていた。
た。

「・・・うつ・・・」

「！！ フェイト！」

緊張の糸が切れたのか、フェイトはその場に倒れ込む。
クロノが急いで受け止め、六課に応援を要請した。

機動六課 医務室

フェイトと藍色髪の女性がベッドの上で静かに眠っている。

六課メンバーとアルフは2人の容体を確認すべくここに集まっていた。2人ともただ気を失っているだけだと聞いて、皆安心した。

クロノは現場に残って、強哉の家宅搜索をしている。

「ん・・・んう・・・」

フェイトが少し声をあげると同時に、瞳が開けられた。
はつきりしない頭で、どういう状況なのかを理解する。

「あ、そつか・・・私・・・倒れちゃったんだっけ・・・？」

「うん。クロノ君がここに連絡してきて、私とアルフがここまで連れて来たんだ」

「そうなんだ・・・ありがとう。なのは、アルフ」

なのはに笑顔を向けた後、横に座って涙目のアルフの頭を撫でてあげた。

その他のメンバーもホッと、一安心している。

「う・・・うん・・・」

和やかムードに入っている時に、フェイトの隣のベッドから小さな唸り声が聞こえた。

皆視線をそちらに向けると、ベッドから上半身だけ身体を起こし、目を擦って欠伸をしている女性の姿があった。

「ふあゝ・・・あれ？・・・どこどこ？」

今さらその様な事を呟く少女に対して、フェイトが優しく答える。

「ここは時空管理局・遺失物管理部機動六課の医務室だよ」

「へ？・・・」

いきなり、横から自分の呟いた疑問を答えられ、驚いた顔でその顔を横に向ける。

その顔は、驚きからあれ？　とても言いそうな顔になる。

「・・・あの、間違っていたら申し訳ないんですけど」

「？　別に良いよ？　聞きたい事があつたら言つて？」

「もしかして『フェイト・Ｔ・ハラオウン』さん・・・じゃないですか？」

「え？・・・」

その場に静止が訪れる。

そして、皆を静止させた張本人の女性は、皆の行動を正解だと思った。

「やっぱりフェイトさん何ですよね？・・・私の名前は夜桜佳奈多と申します」

「・・・じゃあ、貴女はやっぱり・・・陵哉の・・・」

「はい、妹です・・・あの、すいません。私、フェイトさんにお話があるので、他の方は外で待ってくれますか？」

「ん・・・まあ、ええやろ。じゃあ、二人とも、ここには人通さへんけん。しっかりお話しちゃ。」

「はいー！！皆さつさと出ていくでー」

佳奈多はフェイトの確認を肯定し、続いて言った言葉にはやてが皆を先導して、部屋から退出する。

その行為に、佳奈多ははやてにお礼を言おうとするが、すぐさま出て行かれ言えなかった。

はやての素早さに驚きながらも、フェイトに顔を向け、話し始める。

「実は、兄から大体の話は聞いているんです」

「え？　・・・陵哉から・・・？」

「はい・・・兄さんの身体の事も、父さんの事も、兄さんが死んだ事も・・・そして、兄さんが好きだと告白した相手の事も私は兄さんから聞いています」

「・・・告白した相手・・・／／／／／／」

佳奈多の言葉で、顔を真っ赤にして俯いたフェイト。
クスツと笑い、フェイトを可愛いと思う佳奈多。

そして、佳奈多はフェイトを真剣な顔で見つめる。

「フェイトさん。私は兄さんから貴女に会ったらこれを渡してくれと、死ぬ間際に念話で伝えられ、送られてきました」

言い終わると、胸ポケットから五つのキーホルダーの様な物がついた鎖のネックレスをフェイトに渡す。

手に取りよく見てみると、キーホルダーは鎌、銃、槍、ダガー、鉄甲だった。

「！！　もしかして・・・これ・・・」

「はい、兄さんのデバイスです。それと、兄さんからフェイトさんに伝言が・・・」

「伝言・・・？」

「『そいつらを預かってくれ。魔力を注げば扱える筈だ。そいつら、口は悪い奴もいるが根は良い奴らだから安心してくれ。』

お前が危ない時になったら、そいつらはきっと力を貸してくれる。大切に扱ってくれ。

そして、フェイト。お前に相談も何もせずに、あんな行動をとった事、本当にすまない。俺の所為でお前が苦しんでいるなら、俺には謝ることしかできない。

だが、お前は前を見て歩け・・・俺はお前の中で生き続けているか

らな』・・・これで終わりです」

「・・・陵・・・哉・・・」

佳奈多からの陵哉の言葉で眼尻に涙を溜め、陵哉のデバイスたちを両手で握り締め、自分の一番愛おしい人の名を呼ぶ。
そんなフェイトを見て、自然と佳奈多は言葉を発する。

「・・・ありがとうございます」

「え・・・？」

唐突に佳奈多がフェイトにお礼を言う。
フェイトはその意味が理解できなかった。

「小さい頃は、父に内緒で兄さんに会っていたんですけど・・・周りの人は兄さんを気味の悪い人の様な目で見ていたんです。兄さんが薬品拒絶症だっという事は知っていますよね？・・・昔は、薬品の匂いを嗅ぐと突然暴れ出していたんです」

「え!？」

「今でこそ、血を吐くだけでしたが・・・昔は意識がとんで無意識に暴れたり、心ここにあらずの様な状態で部屋に何日も籠ったり・・・
・
・
・そんな事がずっと続いていて・・・でも、私には全然言わずに・・・
・そして、私が8才の時にそれを聞かされ、兄さんは海鳴市から出て行ったんです」

懐かしそうな、辛そうな、そして、寂しそうな目で陵哉の過去の一部を語っていく。

薬品拒絶症。その病気で陵哉は一体、どれだけ周りの人から奇異の目で見られていたのだろうか。どれだけ、寂しい思いをしていたのだろうか。

それを思うと、自分がどれだけ幸せな『日々』を生きていたのか実感した。

「だから・・・嬉しかったんじゃないですか？ フェイトさんの様な人に会えて・・・5年前から、兄さん。別人の様に変わっていました。」

勿論、空港事故の事も聞いていますよ？ あれが、兄さんとフェイトさんが初めて会った日ですよ？ いや、実際には念話しただけでしたっけ？」

「うん。ビックリしたよ？ いきなりロビーにいた人たちが消えたり、突然魔力弾が空港に向かったり・・・」

「ふふ、兄さんらしいです」

2人とも、幸せそうな顔でそんな話をしていた。

佳奈多は本当に嬉しそうに、フェイトからの陵哉の印象を聞いている。

フェイトはそんな佳奈多を、兄思いのいい娘だと感じながら、話していた。

第16話 別れ

あれから、30分が経過した。

話が途切れたところで佳奈多が、ばつの悪そうな顔でフェイトを見て、口を開いた。

「あの・・・私、これからどうなるのでしょうか・・・？」

どこかで聞いたことのあるような問い。

フェイトはその問いをしっかりと覚えていた。陵哉から聞いた問いだ。

あの時と同じように、静かにそして、丁寧 to 答える。

「大丈夫だよ。陵哉から貴女の保護を頼まれているの。だから、貴女さえよければ・・・私と一緒に暮らす？」

「え・・・？」

理解ができず、佳奈多はその場で呆然としてしまった。

フェイトはそんな佳奈多を気にも止めず、話を続ける。

「陵哉の最後の頼み事だから・・・私は遣り遂げたいの・・・自分の意志で・・・」

「ただ、貴女が嫌だというのなら」

「

「いえ！是非お願いします！！・・・何時も父から逃れようと思っていたんですけど恐くて・・・できなかったんです・・・」
「ただ、もう父の傍にはいませんし、フェイトさんの近くだと安心するんです・・・だから・・・これからよろしくお願いします」

ベッドの上で正座をして、頭を下げる佳奈多。

律儀だと思いながらも、フェイトは笑顔で同じように頭を下げる。
頭を上げて、視線を交わせると自然と笑みがこぼれた。

「さて、そうときまれば・・・明日、私に付き合ってくれる？」

「？・・・はい、構いませんが・・・」

フェイトの頼みにきょとん、としながらも答える。

その日は、シャマルに言われ、医務室で一夜を過ごす事になった。

翌日午前 ミッドチルダ北西部

今この場所に、六課メンバーと佳奈多、クロノが集まっている。
何をしているのかというと、簡単に言えば、陵哉の葬式だ。
陵哉の遺体はハラウン家が引き取るという事で話が纏まり、佳奈
多も了承している。

「それでは、埋めていきます」

「はい、お願いします」

作業の方が確認をとると、フェイトがそれに答える。

ミッドチルダの葬式は洋式で行われるが、本人と親族の意見が合えば対象の人と同じ墓に埋められる事が出来る。

今回、陵哉は新たな墓を造ってそこに埋められている。

「・・・兄さん・・・」

「・・・陵哉・・・」

眼尻に水滴を浮かべながらも、実の兄が入っている棺を見ている。だが、フェイトは悲しそうな表情は浮かべているが、眼に水滴はない。

「・・・陵哉君・・・」

「ごめんな・・・あたしがもっと早くに上に報告しておれば・・・」

「主はやて・・・貴女の所為ではありません」

「そうだが、本当に悪いのは・・・夜桜強哉だ」

なのはが悲しそうな声で陵哉の名前を呼び、はやてが自分の不甲斐無さに落ち込む。

シグナムとヴィータは、そんなはやてを慰めていた。

「うつ・・・陵哉さん・・・何で・・・」

「・・・ごめんなさい・・・陵哉さん・・・」

「くっ・・・陵哉さん・・・」

「うつ・・・ひくっ・・・」

スバルは涙を拭い、ティアナは自分に怒りを感じながら陵哉に謝る。エリオは泣くのを堪え陵哉の棺を見据え、キヤロは声を殺して泣いていた。

「・・・すまない・・・僕は・・・君を死に追いやった様なものだ・・・」

クロノは申し訳ない気持ちで、陵哉に謝っていた。
ここに集った皆、陵哉の死を悲しんでいた。

ザッ　　ザッ　　ザッ

そして、陵哉を入れた棺は土の中に埋められていく。

フェイトは埋められていく中、陵哉と出会ってからの短い日々を思い出す。

空港事件の時、ナンパを助けてくれた時、コーヒーを奢ってくれた時、対峙して戦った時、彼の体の事を知った時、研究所内部の時、彼が激怒した時、そして、彼が最後に自分に言った言葉を・・・それらが全て埋められていく土の様に、フェイトの心の中に埋められていく。

いつの間にか、フェイトは涙を流していた。

（あれ？・・・おかしいな・・・今日は泣かずに見送ろうと思っていたのに・・・）

気づいた時、もう涙は止める事は出来なかった。

とめどなく流れる涙を拭い続け、止めようとする。

「フェイトさん……」

肩に手を置かれ、振り返ると涙を流しながらも笑顔でいる佳奈多がいた。

そして、兄の性格を思い返し、優しくフェイトに言う。

「我慢する必要はないですよ……？ ……兄さんなら……絶対……笑って許してくれます……から……」

それが、フェイトの感情を溢れ出させる。
男が埋められていく目の前で、男を愛した女と兄の幸せを願った妹は、お互い思いっきり泣いた。

「まったく……ほんとうがねえなあ……お前らは……」

そんな声と苦笑しながらも、それを許している男の顔が、2人の頭の中によぎった気がした。

第17話 陵哉のデバイス

午後 六課本部 シャーリーの部屋

陵哉の葬式が終わり、フェイトはシャリオ・フィニーノの部屋の前に来ていた。

他のメンバーは仕事に向かい、佳奈多はクロノと共にリンディの所に挨拶をしに行った。

フェイトはノックをしてから、中に入った。

「はい。あ、フェイトさん。どうしたんですか？」

「うん。ちょっと頼みたい事があってね」

「頼みたい事……ですか……？」

シャーリーは小首をかしげながら、フェイトに聞き返す。
フェイトは頷いた後、首に付けていたネックレスをシャーリーに渡した。

「この子達の事を、調べてほしいの・・・」

「？・・・デバイス？・・・五つですか？」

「ううん。鎖の方もデバイスだから、それをお願い」

「わかりました。数分で済みますから少し待っていて下さい」

そう言うと、シャーリーはデバイスに魔力を流し、元の状態に戻して調べていく。

フェイトは邪魔にならない様に、隅っこにある椅子に腰かけ、考える事をする。

（陵哉のデバイス・・・後2つあるんだけどなあ・・・
名前は確か『ドウーガ』と『レクイエム』・・・どこにいつちやた
んだろう・・・？）

フェイトの考えている通り、今まで見てきた事、そしてあの研究員から聞いた話によれば後2つあるはずだった。

だが、フェイトの手元にはそれが無い。佳奈多も知らないと言っていたので、もしかしたら陵哉と同じようにデバイスの中にデバイスが入っているかもしれないと考えたのだ。
可能性としては限りなく低いが、確かめてみる必要がある。

「・・・い・・・ん・・・・・・ふえ・・・さん・・・・・・フェイトさん!!」

「ほわっ!! あ・・・ごめん、ボーっとしてた・・・」

「あはは・・・それより、解析終わりましたよ?」

「本当? どうだった?」

シャーリーが苦笑した顔から真剣な顔になり、「画面を展開させる。フェイトは画面を見ながら、シャーリーの説明を聞く。

「まずはこの全てのデバイスはインテリジェンスデバイスとユニゾンデバイスの混合デバイスです」

「え！？ そんな事が可能なの？」

「理論上は可能ですが、ここまで完成度が高いデバイスは見た事がありません」

説明しながら、シャーリーはキーボードを叩き、4つの画面を拡大させる。

それは、『ゼヘル』『レイ』『ガルダ』『トーガ』だった。

「中でもこの4つは、カートリッジシステムまで搭載されています。ですが、このカートリッジシステム・・・異常なんです」

「異常？・・・どんな所が？」

嫌な予感を感じながらもフェイトはシャーリーに聞く。

意を決したかのように、シャーリーはフェイトの問いに答える。

「例えば、このデバイス達がカートリッジを1つ装填すると、フェイトさんのバルディッシュがカートリッジを5つ装填するのと同じくらいの威力を発揮します」

「え!？」

「普通の魔導師がこんな代物を使ったら」

《確実に死ぬことになるわね・・・》

「「!」」

突如、シャーリーとフェイト以外の声が聞こえた。
だが、フェイトはこの声に聞き覚えがあった。その方向に目を向けて見ると・・・

《あゝ、やっと魔力が送られたと思ったら、身体を弄られることになってるんだからビックリよ。まあ・・・》

「ジリス!？」

そこには蛇の姿になっているジリスがいた。
シャーリーとフェイトは驚いた顔になる。

《で？ 私達の訊きたい事があるなら訊いてもいいわよ？ どうせ、
私達はフェイトちゃんに協力しないといけないから・・・》

ジリスが話していると、次々と他のデバイスが生き物に変化する。
ガルダだけは雀ほどの小さな体で、ゼヘルの大鎌の峰に乗って止
まっている。

《ジリス。とりあえず、我々の名を名乗ってからだ。

主からもうつも言われているだろう・・・『協力する者達には、
まず自身を名乗れ』と・・・》

《わかってるわよ、ゼヘル隊長。まったく今から名乗ろうと思って
いたのに・・・》

ゼヘルに注意されるジリスを見て、何となくジリスの性格がわかっ
てしまったフェイトなのであった。
苦笑するシャーリーとフェイトに、大鎌を持ちながらも片膝をつき
頭を下げるゼヘル。

《私はゼヘルと申します。大鎌型のデバイスです。我々は皆、インテリジェンスとユニゾンの混合デバイスで、ジリスとライガー以外は全てカートリッジシステムも備えてあります。

我々は個々に固有の能力を備え、私は二つの対象を別つ能力を持っています。

フェイト様には一度会ってはいましたが紹介が遅れ、申し訳ありません》

「あ、いえ・・・そんな気にしないで、あの時は陵哉を助けるので頭がいつぱいだったみたいだから・・・」

見た目と違い、礼儀正しい挨拶にフェイトは少し戸惑うが、何とか返答を返せた。

フェイトが返答した後、ハッと気がついたようにガルダを見る。

《ああ、すまないガルダ。この鳥はガルダ。ガルダは言葉を発する事ができませんので、私から紹介します。

デバイスはランサー型でカートリッジシステムも備えています。能力は対象の傷を自分か主に移す能力を備えています》

「そうなんだ。よろしくね？ ガルダ」

《キエエ》

「あつ、くすぐつたいよ。ふふ」

ガルードの紹介が終わり、フェイトが挨拶をすると、ガルードがフェイトの肩に乗り頬擦りをしてきた。

火の鳥だが、自身の炎は温度を調節できるようだった。

しばらくすると、龍が少し前に出る。それを見てガルードが頬擦りをやめる。

《私はレイと申します。銃型のデバイス。

能力は属性を生み出す。炎、雷、水、氷、風、光、闇まで生み出せます。

まあ、主は光と闇以外は魔力変換資質で出現させていましたので・
・実質、私は光と闇を生み出す事に徹底していましたが・・・》

《私はジリス。鎖型のデバイス。

能力は相手の脳を支配して強力な幻覚を見せる事。

おもに捕獲系魔法、結界魔法、補助魔法を使えるけど、補助魔法は治癒だけ使えないの・・・

五年前は、私が被災者を転移させて、レイ副隊長が炎を鎮火させてたわ》

「あの時は協力してくれて、ありがとう。
本当に、陵哉とあなた達がいなかったら危うい状況になっていた
と思うから」

《そんな事はありません・・・全て主の指示があつてこそです》

《そうそう。それに、いい暇つぶしになったし・・・》

紹介が終わってからのジリスの発言に、その場にいた陵哉のデバイス達は全員溜息をついた。
どうやらもう、ジリスの性格の修正は諦めたようだった。フェイトもその様子に苦笑している。
そして、虎がレイの前に出る。

《俺はライガー。ダガー型のデバイス。
能力は予知。相手の動きを先読みし、遠隔操作で攻撃する。
まあ、よろしく》

「うん。よろしくね」

《・・・遠隔操作は使わない方がいい。操作が誤って、自滅する可能性がある》

ライガーの忠告をフェイトは頷く。

口数は少ないものの、心優しい部分もあるとフェイトは思った。最後に、ずっと静かに目を瞑っていたカンガルーが、目を開き一歩前に出た。

《我が名はトーガ。鉄甲型のデバイス。

能力は破壊。全てを砕き、破壊する者。

使う時があれば、全力を持って貴公に力を貸そう》

「うん、その時はよろしくね」

これで、全てのデバイスの紹介が終了した。

皆、フェイトに協力するという事で集まった。

フェイトはこのデバイス達を護り、共に闘う事を決心した。

第18話 主は主人じゃない・・・戦友（なかま）だ！！

「そつえば・・・ねえ、ジリス」

《ん・・・何？ フェイトちゃん》

ある事に気付いたフェイトはジリスを呼ぶ。

蛇にちゃん付けされるのもどうかと思うが、突っ込んだら怒られそうなので言わない。

「ええ」と・・・何で、ゼヘルとレイは『隊長』と『副隊長』って付けるの？」

《ああ・・・それはまあ、私達が平等でいたら主の身体の中で内戦が起きる可能性があるから、私達が勝手に決めた事よ。

まあ、それでもめたりもしたんだけど・・・最終的に主が今まで
の戦闘で使用回数が多い者を隊長にしようという事になって、ゼヘル隊長とレイ副隊長になったってだけよ・・・》

「へえ、そうなんだ」

案外まともな理由に、フェイトはちょっと感心した。

なんだかんだ言っても、やっぱりこのデバイス達は陵哉が一番という事だろう。

そして、フェイトはもう一つの質問をした。

「それと、あなた達の他に、後2つデバイスなかったっけ？」

《ああ・・・ドゥーガとレクイエムね。

さあ、何処言ったか分からないわ・・・あいつら、特にレクイエムは孤立してたから・・・》

《ドゥーガは主には信頼関係を気付いていましたが、我々には全く無関心という態度。

レクイエムは、主にも我々にも全く信頼関係を築かない。

まあ、ドゥーガはまだいいとして・・・レクイエムは、出現させるだけでも主の身体の血を1/13の量を消費するので、主は殆どレクイエムを扱わず、信頼関係など築く暇などありませんでしたが》

ジリスの後に、ゼヘルが引き継いで説明する。

ジリスに睨まれていたが全く気にせず説明する辺り、慣れているの

だろう。

そのまま、ゼヘルは説明を続ける。

《ですが、フルパワーのレクイエムは威力だけで言えば・・・そうですね・・・魔導砲・アルカンシエルの十数倍以上といってもいいでしょう・・・》

「「!!」」

その威力にフェイトとシャーリーは驚愕の表情を浮かべた。デバイス一つでそれだけの威力を備えられるのかと問いたくなる。それを慌ててゼヘルが補足をする。

《ああ、すいません。あくまでカートリッジを主とレクイエムが耐えられる極限域までロードして放ったらの話ですので・・・

ロードをしていないレクイエムは我々全員で戦えば、喰い止められます》

「そっか・・・」

フエイトは強哉に対しての憤怒が高まったのを感じていた。
そんな強力なものを創る必要があるのか？ 陵哉に埋め込ませる必要がどこにあるのか？

必死に心を落ち着かせ、その感情を抑え込む。

「あの……」

唐突にシャーリーが拳動不審な様子で、質問していいのか戸惑っていたが意を決して、声をゼヘルに向けて発した。

「皆さん。ユニゾンデバイスなら生きていた、その……夜桜陵哉さん？ ……の身体を乗っ取って ……！！」

スアアアア

《貴女、それ以上言つと………脳を蒸発させる毒を入れるわよ……》

シャーリーの身体に巻きつき、殺気を送りながら牙から、毒らしき液体を垂らす。

驚いた表情で瞳は恐怖に染まり、声すら出ないシャーリー。

ジャキン！ ドゴー！

《ジリス！ 落ち着け》

《うるさい！ ライガー！！ アイツと同じ事をこの女言ったのよ！？ あんたそれで平気なの！？》

瞬時にライガーがジリスを地に叩きつけ、抑え込む。
シャーリーは腰が抜けたように床に座りこんだ。

《確かに・・・そんな事を言われたな・・・だが、それがどうした？ 俺達はそんな事はしないと誓っただろう？

主の為に尽くし、主の為に刃になる。そして、主は俺たちを戦友なかま

だと言ってくれた。

俺はその言葉を聞いて大概の事は忘れた・・・主は主人ではなく戦友。^{なかま}だから俺達はその方を全力で護る。決して乗っ取ったりはしない・・・違うか？》

《・・・・・・・・》

それ以上ジリスは何も言わなくなった。

ライガーは押さえつけていた足をどけ、元の位置で伏せる。
シャーリーは、急いで立ち上がってジリスに頭を下げた。

「すいません！ 興味本位にあんな事を言ってしまった・・・」

《・・・別に構わないわ・・・デバイスの研究者って多分皆そんなものだから・・・私こそ悪かったわね・・・》

棘がある言い方だが、何とか和解できたようだ。
フェイトも突然の出来事に驚愕していたものの、ホッと息を撫でおろした。

「あの・・・お詫びとっては何ですが・・・皆さんのメンテナンスをしてもいいですか？」

デバイス本人にメンテナンスをしていいかどうかを聞く日がこようとは思ってもみなかったが、この際それはどうでもいい。

シャーリーがゼヘル達に出来る事は常人よりはできるが、それでも少ない。

本当はゼヘル達のメンテナンス等は陵哉だけが・・・その陵哉はもういない。

なら、自分はメンテナンス等に専念し、後はフェイト達に任せる事になる。

勿論、丸投げする気は毛頭はないが、今ゼヘル達に出来る事はこの位しかなかった。

《・・・ええ、じゃあ、お願いするわ。いいわよね？　ゼヘル隊長・・・・》

《ああ・・・》

そして、ゼヘル達はそれぞれのデバイスの形に戻った。

シャーリーは不備のある処（元のシステム以外）を、隅々まで調べ、直していった。

フェイトはそれを隅から見守り、終わるまで待っていた。

第19話 朝のチョットした恥（変な意味じゃないです）

翌日の早朝

なのはとヴィヴィオが六課の食堂に向けて会話をしながら歩いている。

J・S事件後、正式にこの少女・ヴィヴィオを養子として引き取り、義母として生活している。

そんな仲睦まじい処に、どこか慌てた様子のフェイトが曲がり角から出てきた。

「?・・・フェイトちゃん?」

「あ、フェイトママ〜!!」

どこか慌てた様子のフェイトに、ヴィヴィオが手を振って呼びかける。

フェイトはなのはとヴィヴィオの前に来る。

その首には陵哉から預かったデバイス達が、ぶら下がっている。

「おはよう。フェイトママ」

「おはよう。フェイトちゃん」

「うん、おはよう。なのは、ヴィヴィオ。
ねえ、佳奈多、どこに行ったか知らない？」

「え？ 佳奈多ちゃん？ ……うん…見てないよ」

「うう…どこに行っちゃったのかなあ…」

額を抑えながら、溜息を吐く。
そんなフェイトに、なのはが諭すように言う。

「フェイトちゃん。とりあえず、朝食食べてからにしようよ。
その後、私も佳奈多ちゃんを探すから」

「…うん。わかった」

佳奈多を心配しながらも、なのはの言う事に従った。
そして、3人は食堂に向かって歩き始めた。

食堂

フエイト達が食堂に入ると、異様な光景が目にとまった。
それは

「佳奈多さん！！ 卵焼きおかわり！！」

「僕もお願いします！！」

「あんた達、食い過ぎよ！ 訓練中に気持ち悪くなっても知らないわよ！」

「エリオくん、スバルさん。もうそれ位にした方が・・・」

スバルとエリオが、ガツガツと朝食を食べ、ティアナが2人に呆れながらも注意し、キャラがオロオロした状態で2人を止めようとしていた。

そして、何よりフェイトとなのはが驚いた光景は

「ちょっと待っていてくださいね。すぐ作りますから」

満面の笑みで銅板（卵焼き機）を手にした佳奈多が料理を作っている光景だった。

フェイトはあれほど探し回ったが、なのはの提案であっさりと見つかった事に呆けていた。

なのはは苦笑しながら、FW陣のやり取りを見据えていた。

「ちよっ!？ 佳奈多さん!？・・・ああ、もう!・・・あ、おはようございます! なのはさん、フェイトさん、ヴィヴィオ。」

「「「!! おはようございます!」」

佳奈多が作り出そうとするのを、ティアナが止めようとするが、無意味と判断したのか諦めた途端、フェイト達に気付き急いで挨拶を

する。

他のFW陣もティアナに続いて、フェイト達に挨拶をする。

「ああ、うん。おはよう、皆」

「にやはは・・・おはよう」

「おはよ」

ただ呆然と見つめていたフェイト達も、FW陣の挨拶で我に返り、挨拶を返す。ヴィヴィオは全く状況を見ても普段通りにしている辺り、よくわかっていないようだった。

挨拶をした後、フェイトはハツと思い出した素振りをして、佳奈多の居る厨房へと向かう。

全く気が付いてないのか、はたまた料理に夢中で周りの出来事をみていないのか、とにかく佳奈多はフェイトが来たにも関わらず料理を作り続けている。

「佳奈多！」

「ひゃうー!!」

「わつとと」

突如後ろから声をかけられ、焼いている卵焼きを落としそうになったが何とか落とさず、その反動を利用してクルツと最後の一巻きした。

ホツと一息吐いて、佳奈多は卵焼きをお皿に盛り付けて後ろに振り向く。

「まあ、ビックリしましたよ。危うく卵焼きを落としそうになったじゃないですかあゝ・・・フェイトさん」

「あう・・・ごめん　　じゃなくて、何で佳奈多が厨房で料理作ってるの？」

「え？・・・うゝん・・・以前、兄から料理を教わった事があったので、それから毎日、朝昼晩は料理を作って日々修行をしている・・・ですかね？」

まあ、時々連絡くれる時にレシピとかを教えてもらったり、料理のアドバイス何かをもらったりと、色々としてくれたんですけど、私人一倍料理の腕が悪いので、毎日作らないと腕が鈍っちゃうんです・・・」

しよぼんとした顔で、フェイトに語る佳奈多。

陵哉が自分に教わった事を忘れない様に、足掻いている様に思えた。そんな、不器用だけれども必死な雰囲気醸し出している佳奈多を微笑ましいと感じてしまう。

「そつか・・・だけど、これから私から離れる時は一声かけてね？
私は陵哉から佳奈多を護るように言われてるから」

「はい・・・・・・って、私フェイトさんの机の上に『食堂で朝食作っています』ってメモ書き置いていたと思うんですけど・・・」

「え？」

フェイトは佳奈多に言われ、少し記憶を探ってみる。

朝起きて、伸びをしたら一緒のベッドで寝ていた筈の佳奈多がいなくなっていた。それで慌てて部屋中を探したがどこにもおらず、急いで制服に着替え部屋を飛び出し探し続けた。

フェイトは部屋中を探していたが、それは人を探していたという事、机というわかり易い所は全く見ていなかったのだ。

その事にフェイトは湯気が出るほど赤面した。

「あはは、フェイトさんって意外なところでミスをしますね」

「うう、やめてよ、恥ずかしいから・・・／＼／＼」

そんな微笑ましい光景が続いた朝なのでした。

そして、皆でフェイトをからかいながら、朝食（佳奈多が作った料理）を美味しそうに食べていた。

佳奈多は始終嬉しそうな顔で、輪の中に入っていた。

第20話 夜の新たなる敵

一週間後の夜。

仕事を終えた機動六課は、各々の部屋で寛いでいた。フェイトと佳奈多もその例外ではなかった。

「フルハウス！」

「うう・・・ツープア」

《ストレートです》

《チッ・・・フラッシュ・・・》

佳奈多が嬉々とした顔で、トランプの手札を机の上に広げる。

対してフェイトは沈んだ顔で、手札を机の上に静かにおく。

ゼヘルは普段と変わらない様子で、手札を机の上に置く（手札にjokerが入っているが気にしない）。

ジリスは舌打ちをしながら、口に咥えていた手札を机に落とした。言動で解るだろうが、今4人はポーカーをしている。

何故こんな事になったかというと、ただの暇つぶしである。
因みに、何を掛けているかというと、こういう感じだ

佳奈多：フェイトとのスキンシップ（主に佳奈多が胸を揉む）

フェイト：陵哉の過去（主にうれし恥ずかしの事）

ジリス：佳奈多が作ったケーキを食べる（18センチのイチゴショートホールケーキ）

ゼヘル：一日中この姿でいること（主に六課の庭で）

という感じである。

まず佳奈多だが、ちよつと不味い。

フェイトは・・・まあ、アレ。

ジリスは、女は甘い物が好きなのだろう。たとえ動物でも！！

ゼヘルは・・・夜にいたら怖いなあ・・・

まあ、そんな感じでポーカーを行っている。

そして、次の一戦が最後。只今、佳奈多がリード。その次にジリス、ゼヘル、フェイトの順である。

先ほどビリだったフェイトから、カードが配られる。

配り終え、フェイトが自分の手札を手にとると、表情には出さず心で驚く。

（！！ これは・・・一枚変えてスペードのAができればロイヤルフ
ラッシュュー！！）

フェイトの手札はスペードの10、J、Q、Kとダイヤの3。

このダイヤの3を変え、スペードのAができればフェイトは一発逆転

ができるのだ。

ジリスと佳奈多は無表情、ゼヘルはあからさまに苦い顔をしている。

（こんなチャンス滅多にない・・・お願い！ 来て！！）

フェイトに順番が回り、1枚ドロして、出てきたカードは

（！！ 出た！！！！ スペードのA！！！！ やったこれで、私の
勝ち！！！！）

「ふふふ・・・」

フェイトが嬉々とした顔でいると、佳奈多が不気味な笑みを浮かべていた。

その様子を疑問に思ったが、自分が今最強の組み合わせをしているのでそれほど疑問にはならなかった。

そして、手札を公開する時がやってきた。まずゼヘル。

《ブタです・・・》

まったくバラバラの手札が机の上に置かれた。
次にジリス。

《ストレートフラッシュ》

ふふん、とでも言いたげな顔で机の上に広げる。
そして、フェイト。

「ロイヤルストレートフラッシュ！」

《なんですってー！！》

解き放なれた言葉にジリスが驚愕の表情をした。
自分が一番強いカードを持っていたと確信していたのだから、それを崩された時の痛みは本当に辛い。
最後に佳奈多　　だが、彼女は全く絶望の顔はしていない。それより勝ち誇った顔だった。

「ふふっ・・・ファイブ・オブ・ア・カインド（ファイブカード）
！！」

「えーーーー！！！！・・・orz」

完璧に勝ったと思われたが、戦況は逆転した。
机の上に置かれたカードは、ハート、ダイヤ、クラブ、スペードの
7とjoker。
本当にまさかの組み合わせだったのだ。

「フェイトさん　じゃあ、罰ゲーム逝きましようか？」

「え？　佳奈多？　字が違うよ？　それに手と指の動きが変だよ・・・
？」

手が怪しい動きでジリジリと近寄って来る佳奈多に恐怖を覚える。
フェイトは身の危険を感じて後退しようとするが

ジャララ！

「きゃ！」

突如現れた鎖に手足を封じられる。

フェイトは直ぐに理解してジリスに視線を向ける。

《ゲームに勝った者の言う事は絶対・・・》

「ううゝ・・・」

そうこうしている内に、佳奈多が目の前に来ていた。

フェイトは青ざめた顔で・・・佳奈多は目を輝かせて、フェイトに飛びか

ビービービー！！

「！！ 警報！？」

六課本部にアラームが鳴り響く。

先ほどまでの、緩んだ表情は消え去り、緊迫した表情に切り替わる。

『みんな、出撃する前にブリーフィングルームに集まってほしい・・
』

放送で、はやてが皆に伝える。

その事にフェイトは疑問を持ちながら、身だしなみを整える。

ジリスとゼヘルは瞬時に待機状態になり、フェイトの首に巻き付く。そして、フェイトは佳奈多を連れて、ブリーフィングルームに向かう。

「ううゝ．．．後もう少しだったのに．．．」

「あはははは．．．」

この時アラームに感謝したのはフェイトだけの秘密。

ブリーフィングルーム

「皆集まったみたいやな。状況を説明するで」

全員が集まったところで、はやてが今鳴り響いているアラームの原因を説明し始める。

佳奈多までもが緊迫した表情で、はやての説明を聞く。

「ここから、4k程離れたクラナガン中央公園で異常な魔力反応を2つ感知したんや。

1つはこの前、夜桜強哉と戦ってた奴の魔力や。もう1つは・・・ロストロギア：夜天の書の闇プログラムの一部の魔力が確認される・・・」

「「「「「!!」「」「」

それを聞いた、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、シャマルは言葉を詰まらせる。

それもその筈、あの夜天の書の闇プログラムはアースラのアルカンシエルで破壊したはずなのだ。

それが、今自分たちが住んでいるこの世界にいるというのだ。

「な、何で!? あれは確かに破壊したはずだよ!？」

「それはわからへん・・・けど、現場にあるというのは間違いない・・・」

なのはの疑問にはやてはそう答える。

確かに、なのはの疑問は最もだった。アレの破壊に携わり、アースラでの監視もしたが、反応は全くなかった。

「・・・なのは、ここで議論しても何もわからないよ・・・はやて、出撃してもいい?」

「ああ、皆にはその事を伝えたかったからね。FW陣はここで待機。闇プログラムを説明した後、フェイトちゃん達が不利になったら出撃してもらうで」

「……はい!」「」「」

はやての命令に、全員異論はなく素直に従った。
FW陣は、はやてに闇プログラムの説明を受けている。
その間に、隊長達は現場に向かった。

クラナガン中央公園

ガンガンガン!! ドゴン!!

「この……いい加減くたばりやがれ!!!!!!」

「・・・・・・・・」

ガキン！！！！

デバイスを起動させ、バリアジャケットに身を包んだフェイト達が現場付近に到着すると、空中で2人の魔導師が戦闘している。

一人はあの男、トンファー型のデバイスを装着して戦っている。

もう一人は、高校生くらいの少年で大剣型のデバイスで男と戦っていた。

男は、大剣を振っている少年の攻撃を余裕で受け流している。

トンファーには傷一つなく、それより大剣の方が傷つくのではないかと思ってしまう。

「デメー・・・何で一撃も攻撃しねえ！！　そういうのが、一番うざってえんだよ！！！！」

「・・・・」

少年は完全に頭に血が上り、怒りにまかせて大剣を振っていた。
太刀筋は全くないと言っていい程に乱れ、ただただ大振りに振り回しているに過ぎなかった。
それを見飽きたかのように、男は動いた。

「……流水爆流」
うきうきばくりゅう

濁った声で呟いた瞬間、男は流れるような動きで少年の懐に入った。
大剣を大振りに振るった性で身動きがとれず、驚愕の表情で、その
光景を見ていた。

ドドドドドガッ

「がはっ！」

少年に腹に1撃与えたかのように見えたが、実際は5撃与えていた。
そのまま、流れるようにあらゆる箇所を攻撃する。

そのスピード、威力で男がどれ程の手足れなのかを物語っていた。
止めと言わんばかりに、肘落とし（トンファの肘の端っこ）を脳
天に叩きこみ、少年を公園の地面に叩き落とす。
少年は気絶するが、まだ男の攻撃は終わっていなかった。

ガシャン

「!!」

カートリッジを装填する音が聞こえ、逸早く気付いたのはフェイト
だった。

フェイトは男に接近して、ハーケンフォームで攻撃する。

「・・・流し」

ガンッ！ スッ

「なっ！！」

フェイトの攻撃を、トンファーで滑らせ・・・いや、身体全体を使ってフェイトの攻撃を滑らせて回避すると同時に、少年の所に着地する。

その行動の速さにその場にいた全員が驚愕する。

「・・・」

だが、そんな事は全く気にせず少年の額にトンファーの切っ先を付ける。

驚愕していた者全員が、デバイスで男を攻撃しようと動く。

「・・・エアー・プロス」

ボゴン！！ バン！！！！ ビチャアア

強烈な衝撃が少年を襲い、その衝撃に身体が耐えきれず、少年の身体は外側と内側の全てが辺りに飛び散り、本当にここが公園なのかと思わせた。

第21話 空しさが残る公園

「・・・・・・・・」

辺りは赤一色に染まり、皮膚と内臓が所々に飛び散っている。
こんな光景にした張本人は、焦ったような雰囲気も見せず、ただ無感情に少年が存在していた所を見ていた。
やっと状況を理解して、最初に我に返ったのはシグナムだった。

「貴様・・・何者だ！」

シグナムがレヴァンティンを構えながら尋ねる。
その声で、残りの3人も我に返りシグナムと同じようにデバイスを構える。
だが、男は全く微動だにしない。というより、フェイト達が眼中にいなかった。

「・・・・・・・・貴様らに教える答えはない・・・」

「テメー・・・！」

その回答にヴィータに怒りの感情が浮かび上がる。
だが、ヴィータは次の出来事で驚愕する事になる・・・いや、フェイト達と言った方がいいのかもしれない。

ブクッ

「「「「！！」「」」」」

変な音が聞こえた瞬間、周りに飛び散っていた血と皮膚と内臓が、ベンチの前にあつた心臓と思われる部分に集まりだしたのだ。各々あるべき場所に集まり、体を構築していく。

「ああ・・・やってくれたなテメー・・・・・・・・だが、少し頭の血が抜けた・・・」

まだ、身体が所々構築できてはいないが、立って喋る位は出来ていた。正直不気味だ。

フェイト達が驚いていたが、少年は男だけを見つめていた。

だが、男は少年の身体の構築を行っているのにもかかわらず、少年に向かって走り出す。

「！ 待ちなさい！！」

フェイトが男と少年の間に割って入り、男の行動を止めた。

「！！」

「あの子と貴方を逮捕します」

初めて男が驚いた表情になるが、直ぐに状況を整理して少年を見る。少年は身体の構築が終了していて、次の行動を起こしていた。

「このボケ!!」

ドン!

「え?」

肩に衝撃が走ったかと思うと、身体が浮遊感を感じた。
そして、背中に何か柔らかく温かい物が自分の身体を支えた。
何が起こったのか、全く理解できなかったが1つの音で理解した。

グサッ

「!!」

目の前で大剣が振り下ろされ、男の左肩を斬る。魔力でそれ以上の進行を抑えているが、重傷には変わりなかった。少年が大剣を振り下ろす処が男の目に入り、フェイトの肩を突き飛ばし、フェイトの背中に腕を回して抱いて男が身代わりになった。フェイトは自分の行動の浅薄だと思い知らされた。

「ハッ！ 女を護るために身体張るなんざあ・・・莫迦のする事だぜ！！」

ズバツ

「がつ！」

そのまま力任せに振り下ろすが、男が条件反射で少年と距離をとる為の後方に跳ぶ。少量の血を吐き、仮面の淵から男の血が垂れると共に地面に片膝を就く。

「フェイトちゃん！」

なのはが声を発した瞬間、男はその方向に目を向ける。
そこには、なのはがこっちに駆けて来る光景だった。

「・・・！」

「え？ きゃ！」

「わっ！」

男は右腕でフェイトをなのはが走ってくる所に投げた。
フェイトは小さな悲鳴を上げて投げられる。

なのはが驚いて、急いでフェイトをキャッチする。

それを確認すると、男はすぐに少年に向かって走っていく。

「・・・そういや、まだ俺は名乗ってなかったな・・・」

余裕そうに、ただ男を見据えて言う。

先ほどまでボコボコにされていたが、左肩を斬ったのだ左腕はもう使えないと言っていていいだろう。

その証拠に、走っている間、左腕は全く動いていない。

「俺は・・・強哉の部下・・・エルノーマ・デフィット・・・」

「「「「！」「」」」」

「そして、俺のデバイス：ゾヴォールだ」

フェイト達はその言葉に驚愕した。

目の前にいる少年・・・エルノーマは、陵哉の身体を改造した父親の部下だというのだ。

あとの補足で、自分のデバイスをチラつかせながら言う。

だが、男は全く同様せず右腕のトンファーで横薙ぎにエルノーマの頬を狙った。

ガシャシャシャシャシャン！

「！！！」

カートリッジを瞬時に5発装填する。

強力な技が来る。エルノーマはそう思った
が、その攻撃はエルノーマの顔の前を横切る。

バキン！！ミシミシ！ ガシャアアアン！！！！！！

「！？」

横薙ぎに放ったトンファーは、エルノーマの顔の前を通り過ぎて、
2人のすぐ横の空間を破壊する。

ポツカリと空いたそこには、こことは別の場所が映し出されていた。

「テメー！ 何w ！！！」

ドカツ！

「ぐあっ！」

男はすぐさまエルノーマを蹴り飛ばして裂けた空間に放り込んだ。それにくくかの様に男も裂けた空間に入って行った。

「！！ 待って！！」

フェイトの声も空しく、男が造った裂けた空間は元通りに閉じてしまった。

ヴォーン！

『みんな無事か！？』

突如目の前にモニターが現れ、そこからはやての顔が映し出される。戦闘が終わったのを見計らって通信してきたのだろう。

内容は、直ちに帰還せよ、との事だった。

4人は未だ頭が混乱していたが、はやての命令を素直に聞き、六課本部に帰還した。

第22話 追撃と掛け声

ブリーフィングルーム

只今、ここに六課メンバー全員が集結し作戦会議を行っていた。

「単刀直入に言うんやけど・・・六課前線メンバーは、あの仮面の男とエルノーマという少年を追撃する」

「「「「「!!」」」」」

FW陣は聞かされていたのか左程驚かなかったが、隊長組がその言葉に驚いていた。

はやてがこんな大胆な行動に出るとはかけらほどにも思っていなかったからだ。

確かに仮面の男は左肩に重傷を負い、エルノーマという少年は再生していたが魔力は相当削られていた。

捕縛するなら絶好のチャンスという事だ。だが、肝心な事がわかっていなかった。

「確かに、捕縛するなら今がチャンスだけど・・・あの2人がどこにいるのかわかってないよ?」

フェイトの言い分に残りの隊長組も頷いていた。

間近で裂けた空間を見ていたフェイト達も、何処の光景だったのかわからなかった。

だが、はやては表情を崩さずフェイトの疑問に答える。

「そんなもんは、既に調べてある。空間を割って移動するっていうのは荒技やけど、時空管理局がそんな荒技を追跡する手段がないと思っとなるんか?」

「!!　　そういえば、空間を使って逃亡した時用のサーチャーがあった様な気がする・・・」

犯罪者が全く空間を使って逃亡する事がないから、全く使う場面がなかったっけ?」

「その通り。そして、そのサーチャーを使って追跡すると簡単に場所が割り出せたわ・・・」

なのはがあるサーチャーの事を呟くと、はやてが指をさして肯定し

た後、間をおいて話す。

隊長組は固唾を飲んで、はやての次の言葉を待つ。

はやては一回目を閉じて、目を開けると同時に口を開く。

「今2人がいる場所は、ここから50k離れた生命反応が全くない砂漠地帯に場所を移しとる」

「!!! もしかして・・・ニーガル?」

「そ。フェイトちゃんの言う通りや・・・あの2人はそこに場所を移しとる。まあ、あそこなら動物すらおらんし気軽に戦えるわなあ」

ニーガルというのは、ミッドチルダで唯一の砂漠地帯。

そこには人間どころか動物すらない。勿論どこに行っても水すら一滴もない。

自然保護隊が何とかしようと思ひ活動をしていたが全く効果はなく、今では中止となっている。

そんな所で戦闘を続行しているとすれば、最悪の場合死ぬことになる。

「あんなとこにいたら、死ぬかも知んねえぞ」

「確かにそうだな・・・」

「え？ 何故ですか？」

ヴィータとシグナムの眩きに、スバルだけが頭に？を浮かべていた。その場にいた全員が、吃驚した顔でスバルを見る。

「え、え？ 私何か変な事言った？」

「はあ・・・あんだ、地理のテストの点数が見てみたいわ・・・」

ティアナが手を額に押さえて、溜息をついていた。その他は苦笑か呆れた表情でスバルを見ていた。

「あはは・・・まあ、教えておくね。ニーガルは唯の砂漠地帯じゃないの。」

あそこは砂塵と砂嵐で視界と聴覚が全く効かなくて、酷い場合には雪崩の砂バージョンが起こる場所なの」

「え！？ そんな危険な場所で戦っているって事ですか！？」

「そう言う事だ。全くやつと事態の深刻さに気がついたか・・・」

なのはの説明を聞いて、やっとスバルはニーガルがどんな場所なのかを察した。

ヴィータが皮肉を言っていたが、今は全員スルーした。

「というわけで、これからウチとリインフォース以外は砂漠地帯：ニーガルに出撃。

救援が必要になったら、連絡してくること！」

「「「はい！！」」」

全員、はやての命令に返事をした。シグナムはすぐに転移魔法の準備をする。

その時、フェイトの首にぶら下がっている陵哉のデバイスが2つ光って、実体化した。

《少し待ってくれ・・・》

「！！ どうしたの？ ライガー、トーガ・・・？」

そう、突如ライガーとトーガが姿を現したのだ。その事にフェイトは優しく聞く。

因みにここにいる全員陵哉のデバイスとは面識があり、短い時間だったがお互い信頼していた。

ライガーはフェイトの質問に、真剣な目をして答える。

《俺達2体は佳奈多嬢の護衛をする。

主からの命令で、『フェイト嬢が佳奈多嬢から10km以上離れる事態になれば誰か2人は佳奈多嬢の傍にいます』と言われている》

「・・・流石は陵哉だね。用心深い」

《そうだな。それに、今回は強哉も関わっているのだ。我とライガーはここに残り、佳奈多嬢を護るとしよう》

ライガーの説明でフェイト達は納得する。

トーガの捕捉により一層、今佳奈多と離れる事が危険な状態になる

のかを理解する。

「うん、わかったよ。2人とも、佳奈多をよろしくね」

そう言うと、シグナムが転移魔法の準備を完了していて、フェイトが話し終わるのを待っていた。

フェイトがシグナムの魔法陣に入った時、待機していた残りの陵哉のデバイスも突如、起動した。

《何だジリス。私達は待機していた方がシグナム殿の負担は軽減するだろう?》

《そうだ。起動するなら時と場合を考えろ》

《もう!! 私にとっては大事な事なの!!

全く、主が何時もやってた事忘れた? ねえ? ガルーダ?》

《キエ!》

ジリスとガルダーの反応を見て、ゼヘル達はハツとした表情を浮かべる。

その後、微笑んでジリスを見据える。

《確かに、今やっておいた方がよさそうだな》

「え？ 何をやるんですか？」

エリオが耐えかねて、ゼヘルに聞く。

ゼヘルは六課メンバーに身体を向ける。

《では、皆さんもこれに参加してもらいましょうか。我らが戦いへ赴く時には、必ずやることです。

皆さん円を描くよう並んで、自分のデバイスを起動させて中心に突き出してください。デバイスがない場合は拳を突き出すこともあります・・・》

皆、ゼヘルが言う様にしたがって円を描くように並び、ゼヘルの指示通りに動く。

そして、ある言葉を皆に伝える。皆、頷き合ってジリスが口を開く。

《行くわよ。せーの！！》

『仲間と明日の為に』

！！』

第23話 仮面の下の正体

今フェイト達（ゼヘル達は待機状態に戻っている）はニーガル上空にいる。

念のためシグナムが、砂嵐が来ても回避できるようにという事で上空に転移した。

だが、何か様子がおかしい。

「ううゝ・・・何か寒い」

そう寒のだ。夜の砂漠は寒いというのはわかるが、この寒さは異常だった。

スバルが身震いするほどの寒さだ。因みにFW陣はキャロの使役竜フリードリヒの背中に乗っている。

全員、安全を確認して、降下していく。

地上が見えてきたところで、全員が驚いた。

「！！ ニーガルに氷結魔法が張られてる・・・」

目の前に広がる光景は、砂漠などではなく氷に覆われた地面だった。これほど出鱈目な魔法を掛けるなど普通の・・・いや、ベテランの魔導師でもそうはいない。

砂塵が飛んでこないという事は、ニーガル全体に氷が覆われているという事だ。

「・・・とにかく、あの2人を探さないと・・・」

「そうだね。みんな、固まって行動しよう」

「・・・はい!」「」

全員その意見に賛成し、仮面の男とエルノーマの搜索を開始した。どこまで歩いて、静かで景色が変わらない。

だが、警戒だけは緩めない。どこに潜んでいるのか分からないのだから。

・・・ッ

「!!」

何か聞こえたかと思い、フェイトがその方向に顔を向ける。
何も見えないが、何故かフェイトは気になってしょうがなかった。
みんなを説得して、フェイト達はその方向に向かって歩く。

ドゴン!!

「「「!!」」」

数分歩いた後、今まで何も聞こえなかったが、突如破壊音が聞こえた。
フェイト達は手に力を込めて破壊音が発生した場所に向かって走った。
数十秒走ると、2つの影が見えてきた。

「オラァ!!!!!!」

「・・・!!」

ガキン!!

仮面の男とエルノーマは、いまだ戦闘を続けていた。

戦況はエルノーマが、一歩圧している様に窺える。

男は左肩の傷からは、ドバドバと血が滴り落ちている。

それでも尚、男は戦い続けていた。男の何がそうさせるのかはわからないが、戦う意思は全く尽きていなかった。

「はっ！ 俺とここまで互角に戦える奴は初めてだぜ!!」

だが、それもここまでだ。カートリッジロード!!!!」

「!!!!」

エルノーマがゾヴォールに、2発弾を装填する。
大剣には炎が纏いはじめ、周りの酸素を吸って燃え上がる。
男は身構えて、エルノーマの動きを窺う。

「フレイア・フォースザンバー！！！」

ザザッ！ ブオオオオオオ！！ バキバキン！！ ドー
ン！！！！！！

「ぐああああああ！！！！」

男の周りをエルノーマの影が四方に炎の斬撃を飛ばした。
四方から飛んでくる斬撃を2つ凍らし瞬時に破壊し、1つは避けた
が、残りの1つが男の背中に直撃する。
叫び声を上げながら、氷の上に倒れて燃え上がっている背中
の服を
消火した。
何とか、仰向けの状態から起き上がる。
が

ガシャ

「終わりだ・・・」

「！！・・・くっ」

起き上がった瞬間、顔の前にゾヴォールを付きつけられ、身動きがとれなくなる。

エルノーマはゾヴォールを振り上げ、男を斬ろうと握る力を強める。朦朧とする意識の中で瞼が重く、死を悟り目を閉じる。そして、大剣は振り下ろされる

だが、何時まで経っても痛みは来ない。
少しずつ、状況を確認する為に目を開ける。

「何の真似だあ？」

「！？」

男は状況を確認する為に開かれた瞳には、思いがけない光景が映っ

ていた。

一番はじめに瞳に映ったのは、美しい金髪、次に白いマント、最後は大剣を防いでいる光景だった。

その女は男の方を向かなかったが、男に向かって話す。

「私は、貴方に協力します。佳奈多を強哉から救い、さっきは私を、身を挺して助けてくれた！

だから、私は貴方を信じて、貴方を助けます！！」

「・・・」

女 フェイトの言葉に呆けていた男だったが、ゆっくりと・・・
だが、力強く立ち上がる。

しかし、背中の中の傷の性で、ふらつき倒れそうになる。

ガッ

「！ お前・・・」

「言ったでしょ。私は貴方を助けるって・・・」

倒れる男をフェイトが支えて、しっかり立たせる。

微笑んで男に言った後、真剣な目でバルディッシュと待機状態のゼヘルを見る。

「ゼヘル。バルディッシュとユニゾンできる？」

《ええ、造作もない事です。バルディッシュ殿の意識もちゃんと残ります》

「そつか・・・じゃあ、行くよ。ユニゾン・イン！」

待機状態のゼヘルが光り、それはバルディッシュのコアに入った。同時に、勝手にハーケンフォームが起動し、魔力刃が現れる処からゼヘルの刀身が出現する。

そこ以外は全く変わらずに、刀身の重さがジワリと腕に感じた。

《どうやら、バルディッシュ殿とユニゾンすると、このモードから

は変形できないようです」

「うん、わかった。じゃあ、早速・・・」

フェイトはバルディッシュを男の頭上に振り上げる。

男はその事に全く動じる事なく、フェイトの行動を見ていた。そして、フェイトは男に刃を振り下ろす。

ガッ！

「・・・痛みが・・・」

「背中と左肩の感覚と身体を別けたから痛みは消えたでしょ？
すぐに終わらせるから少し待っててね。FW陣！ この人をお願い」

男をFW陣に渡して、フェイトとなのは達はエルノーマと対峙する。
4対1という形になったが、エルノーマは瞳だけを動かして状況を

確認する。

状況を確認すると、ゾヴォールを肩に乗せて溜息を吐く。

「・・・ふう、歩が悪いな」

そう言うと、ゾヴォールに炎を纏わせ真下の氷に叩きつけた。

ガン！！！！ シュウウウウ

「「「「「！！」」」」」

辺りに氷がエルノーマの炎で蒸発し、水蒸気で視界を遮られる。

フェイト達はエルノーマを探そうとするが、高温の水蒸気で前に進めない。

そして、エルノーマがいた所から赤い光が輝き、エルノーマの魔力を感じなくなった。

転移魔法で離脱されてしまい追う事は不可能と思い、FW陣の所に全員が集まる。

「さてと・・・ねえ、まずはその仮面とつてくれるかな？」

なのはが男に向かって発した言葉に、男は全く反応しない。
ヴィータが反応しない男に少し苛だちだし、男の前に歩み出る。

「ヴィータちゃん？」

「テメー・・・とつとその仮面とりやがれ!!」

ドガッ!!

罵声を発した瞬間、ヴィータの握り締めた拳が男の仮面に直撃する。
その行動に全員が驚愕する。シグナムはヴィータを羽交締めにして
男から離れる。

ヴィータが殴った所からどんどんひび割れていき、仮面が剥がれ落ちる。

「「「「「!!」「」「」

その顔はもう見る事は出来ないと思っていた。

だが、目の前にその顔があるという事実みんな、理解できなかった。

そして、初めに我に返ったフェイトがその男の名を口にする。

「 陵・・・哉・・・」

「・・・・・・」

そこには気絶した夜桜陵哉がいた。

第24話 戦闘後の論議

「陵・・・哉・・・？」

目の前の1人の男・・・夜桜陵哉に、その場にいた全員が絶句していた。

何故ならこの場にいた全員が陵哉の死を確認していたからだ。ちゃんと墓の中に陵哉の身体を埋葬して見送ったはずだった。

なのに、陵哉の身体は目の前にある上に肌は瑞々しく、ちゃんと呼吸をしていた。

全員が混乱した状態の中、陵哉が瞼を開けた。

「う・・・ん？ ここは？ ツ！！！！」

「！！ 陵哉！？」

《《主！！！！》》

身体を動かした瞬間、背中と左肩に激痛が走り、その場に蹲る。
フェイトとゼヘル達が陵哉のもとへ駆け寄るが、陵哉に薬品が使えない為どうする事も出来なかった。
どうするか必死に考えるフェイトだったが、陵哉の行動がフェイトの行動を停止させた。

「ッ・・・ジリス！ 鎖を貸せ！！」

《わかったわ》

ジャララ

何の意図に使うのかは解らなかったが、ジリスは主の命令に従った。
鎖を受け取った陵哉は、右手に握ると鎖に魔力を込め始めた。
だが、その魔力光はいつもの藍色ではなく優しい水色で、見る者を癒しているような感覚だった。
込め終わるとその鎖は先ほどの水色の魔力光を宿していた。それを陵哉は傷口に巻いていった。
すると、徐々にだが傷口が塞がり始めていた。

「ふう……習得しといて良かった……」

《主……これ、どうで……》

「それは後回しだ、ジリス。まずはここにいる奴ら全員を機動六課にお送りしないとな……」

《……了解》

ジャララー!!

そういうと、ジリスは転移魔法を発動して、全員を機動六課に転移させた。

転移した後、ニーガル全域を覆っていた氷は碎け消滅していった。その光景は砂漠が涙を流した様な景色に見えたのは誰も知らない。

機動六課 会議室

「兄さん!!」

「久しぶりだな。佳奈多」

会議室に入ると、陵哉の妹・佳奈多が出てきた。

フェイトからの連絡で大方の事情を聞いたはやては、全員を会議室に集める事にした。夜桜兄妹も然りだ。

全員席（陵哉のデバイス達は全員機動状態&陵哉はシャマルとは真反対の席）に着くと、はやてが本題を話し出した。

「さて、まず陵哉に訊くけど何故生きてるんや？」

「簡単だ。ジリスの幻覚能力をあの場の全員に掛け、俺が死んだように装った。

目的としては3つ、1つ目は佳奈多の救出。2つ目は強哉を油断させる為・・・アイツは俺が驚異だと思っているらしいからな」

はやての問いに淡々と答えていく陵哉。

だが、陵哉のデバイス達は何故か不可解そうな顔をしていた。まるで今のフェイト達のように、何故このような行動をしたのかを聞く態勢だった。

そして、陵哉が最後の目的を言い放った。

「そして、最後の3つ目はレクイエムの制御の為の時間だ」

《!! 主! 何故その事を言わなかったのですか!? あまりにも危険な・・・》

「だが、そうしなければ・・・またあの研究所の時の様に犠牲者が出る。その為には必要な行為だと判断しただけだ・・・まあ、黙っていた事は悪かったと思っている」

《・・・いえ、主が考えていたのであれば、私はもう何も言いません》

陵哉の最後の目的に反発したゼヘルだったが、陵哉に言い包められて何も言わなくなった。

その後、陵哉からレクイエムの事を聞くと後一步の所まで来ているらしく、以前の様に大量な血を消費する事なく3滴でレクイエムを出現させられるようだ。(ジリスの鎖に治癒能力を与えられるよう

になったのも2、3日前だと付け加えた）

はやて達からは質問攻めに遭い、それを淡々と陵哉は答えていった。結果、陵哉が死んだ幻覚後、地球に戻り母親を墓に埋め、研究所に残った研究員に事情を説明し、ミッドに戻り佳奈多を救出、エルノーマ出現までレクイエムの制御を行っていたという事だった。

最後に陵哉が思い出したようにエルノーマとの戦闘中・・・というかニーガルに場所を移した瞬間、エルノーマが奇妙な事を言っていたという。

『チツ・・・人がいねえ所に来たか・・・・・・・・これじゃあ、任務遂行はできないな・・・』

「人がおらん、任務遂行はできへん・・・エルノーマ　　いや、強哉の目的ってなんなんや・・・」

「はやて、結論を考えるには情報が少ないから無理だよ。けど、大体考えられる事は・・・」

はやてがエルノーマの言葉の真意を考えるべく頭を抱えた所にフェイトが優しく言った後、言う事に抵抗があるのか次の言葉を言わない。

見兼ねたのか、陵哉がフェイトの言葉を代弁するかのよう言い放った。

「人間の搜索・誘拐・殺人のどれか・・・そして、エルノーマには時間制限があった為に、ニーガルに移動した際、任務遂行はできないと判断したというのが妥当な考えだと俺は思う」

「！！ 誘拐・・・殺人・・・」

キャラが異様に反応して、暗い顔をした。

だが、陵哉は訂正も何もせず己の考えを述べただけだともいう様な雰囲気醸し出していた。

回答が終わると、質問をする者がいないと確認すると陵哉は席を立った。

「じゃあ、俺はする事があるから少し出てくる・・・フェイト」

「え？ 何？」

「できれば手伝ってくれないか？ 俺のする事2人以上いないとできないんだ」

「うん、いいけど・・・」

「サンキュ。じゃあ、行こうぜ」

フェイトは陵哉にそう言われると、陵哉のデバイス達を待機状態にさせて陵哉と一緒に出て行った。

陵哉が出ていくと場がまた静まったが、はやてが「今日はもう休日にするわ」と言っただけで会議室を出ていくと全員疲労が溜まっているのか自室に戻って行った。

そして、陵哉とフェイトは六課本部の庭にやってきた。

第25話 契約の証

04：36 六課庭園

陵哉とフェイトは満月が綺麗に見える六課の庭園に来ていた。

フェイトは何をするのか解らなかったが、とりあえず、陵哉のデバイスは待機状態で連れて来ていた。

まあ、フェイトが連れて来なくても自分たちで勝手に行くと思うが・
・

そんな事をフェイトが考えていると、陵哉がフェイトの前に出て、フェイトと向き合った。

陵哉の顔は真剣そのもので、その瞳で全てを見透かされそうな気がした。

すると、突然陵哉が頭を深々と下げた。

「すまない、フェイト」

「え、ちよっ・・・何でいきなり謝るの？ 私は」

「俺は！！・・・お前を傷つけた・・・だから、しっかり謝っておかなければ俺の気がすまない。」

いや・・・何よりフェイト・・・お前に悪いから・・・・・・・・今

の俺にはこうする事しかできないが、本当にすまなかった・・・」

「陵哉・・・」

お互い、相手がどんな表情をしているのか分からない。

だが、フェイトは陵哉の気持ちがあった様な気がした。

フェイトは陵哉にゆっくりと近づいていく。未だ頭を下げたままの陵哉は動じずに何かに耐えているようだった。

そして、後一步で陵哉とぶつかる所まできたフェイトが口を開く。

「私は・・・確かに傷ついたよ・・・心が貫かれたような感覚になつて・・・陵哉を助けられなかった事の罪悪感でいっぱいになつて・・・何もする気が起きなくなつて・・・」

本当に・・・心にポツカリ穴が開いた様になつたけど・・・今はもうそんな事ないよ。だって、陵哉に謝ってもらえたから・・・だから、もういいよ・・・」

「・・・フェイト・・・」

陵哉が頭を上げると、眼尻に涙を溜めながらも笑顔でそう答えているフェイトがいた。

そんなフェイトに陵哉は手を頬にあて、涙を拭きとる。

フェイトが目を開けると、優しく微笑んだ陵哉が溜息を吐いていた。

「たくっ……そう言われると荷が軽くなった気分になって、余計ムカつくな……」

「あ……ごめん……何かそう思われるとは……」

「別にお前が謝る事じゃない……実際俺があんな行動をしたのが発端だしな……」

さて、このままだとズルズル引き摺りそうだから、さっさとやる事やって寝るか」

「あ、うん」

陵哉は辺りを見回すと、丁度いい長さの鉄パイプを発見する。

それを拾うと、地面に何かを描きだした。

フェイトは陵哉の指示に従い、陵哉から預かった全てのデバイスを武器状態で起動させた。

起動し終わり陵哉を見ると、この場所に結界を張ってから地面に描かれた魔法陣の中心に立ち、目を瞑り精神統一をしていた。

「フェイト、俺の前に立って、その間にゼヘル達を地面に突き刺してくれ」

言われたとおり、デバイスを陵哉の前に突き刺し、フェイトは陵哉と向き合うように立った。

2人は魔法陣の中央に立ち、その間に6つのデバイスが阻んでいる様な形だった。

配置についたところで陵哉は、服を脱ぎ始めた。その光景にフェイトは顔を赤くしながら止めようとする。

「ちよつ、陵哉！？ 一体何を / / / /」

「黙っている・・・」

上半身の服を脱ぐと、包帯が丁寧に巻かれた身体が露わになる。

その包帯も外すと、完全に治りきっていない傷が現れる。

フェイトは傷を見ると顔に集まっていた熱が引いていくのを感じた。

陵哉は指を噛み切り、血を流すと6つのデバイスにそれを塗った。

「・・・さて、フェイト。デバイスを1つずつ俺の胸に当ててくれ・・・」

「わかつた……」

一番左に突き刺したゼヘルを引き抜き、両手で握り締める。

何故か妙に緊張してしまい掌が汗ばむが、深呼吸をして、少しずつ陵哉の胸に近づける。

後数？で当たった瞬間、陵哉とゼヘルの接触する処を中心に魔法陣が出現する。

何事かと思ったフェイトだったが、ゼヘルが陵哉の身体の中に入っていくのを見た時、ゼヘル達を自分の体の中へ戻していると解った。だが、ゼヘルの刀身が全て入った瞬間に「それ」は起きた。

「ぐ……あああああああああああああ！……！！！」

「！！
陵哉！？」

突然、陵哉が叫び声を上げて苦しみ出したのだ。

結界のおかげで外に叫び声は漏れなかったが、フェイトには嫌というほど耳から脳に響き渡る。

その叫びはゼヘルが全て入るまで続いた。
ゼヘルが全て入ると、陵哉は足から崩れ落ち、地面に四つん這いの

状態で荒い息を吐いていた。
急いで陵哉の元へ駆け寄ろうとフェイトが動こうとした時、陵哉が叫んだ。

「動くなフェイト！！・・・はあ、はあ・・・今俺は・・・ゼヘル達と再契約をしている・・・
はあ・・・は・・・ゼヘル達を・・・俺の身体から離れさせるには・・・契約を解除するしかなかった・・・
だから・・・はあ・・・再契約をしなければ・・・コイツ等の本来の力は戻らない・・・それに・・・リミッターを解除せずに契約だけ解除したからな・・・俺の魔力もコイツ等の中に封印されている・・・どの道・・・こうしなければならんだ・・・！」

「・・・陵哉・・・」

息も絶え絶えの状態で立ち上がる陵哉が痛々しくて顔を背けそうになるが、フェイトは心配な眼差しで陵哉を見る。
必死に立っている陵哉に顔を背けるのは、彼の覚悟から目を背けるようなものだと思い、申し訳ない気持ちがして背けずに陵哉を見た。暫く息を整えるため深呼吸を繰り返していた陵哉だが、瞳を強く閉じ再び開くと強い眼差しでフェイトを見た。

「・・・すう・・・ふう・・・もう大丈夫だ・・・次を頼む、フェ

イト」

「・・・う、うん・・・」

次に手にとったのはガルーダ。

フェイトは大きいデバイスから身体に入れて最後に小さいデバイスを入れていこうと考えた。

さつきと同じように構えるが、陵哉が見てもわかるほど手が震えだした。

ガルーダを近付けるとまた陵哉が苦しむ、自分は陵哉をこんな身体にした研究者たち・・・強哉と同じなんじゃないのかと思い始めていた。

そう考えると余計手が震えだし、その震えが全身に回って、ガルーダを自分の足元に突き刺して膝を吐いた。

自分の行動が陵哉を苦しめ、そして、あの強哉と同じ存在に近づいていくのがフェイトにとっては恐怖以外の何物でもなかった。

フェイトが恐怖に吞まれそうになった時、突如、温かいものに包まれた。

ギユ・・・

「え・・・？」

「大丈夫だ。お前はあのクソ野郎とは違う・・・俺の頼み事を聞いてくれている。ただの普通の女だ」

「っ・・・陵哉ぁ・・・うう・・・」

それから数分間、フェイトを安心させる為に陵哉は強く抱き締め髪を撫でていた。

フェイトは、自分の事を強哉とは違う・・・そして、何より普通の女と言ってくれた事が嬉しくてたまらなかった。

普通の人とは違う生まれ方をしたフェイト。だが、陵哉はそんな自分を普通の女と言ってくれた。

それが途轍もなく嬉しくて、心から救われた感じがした。

泣き終わると、フェイトはその場から立ち上がりガルーダの柄を握る。

陵哉もそれに倣い、元の位置に戻って精神統一をする。

「来い！ フェイト！！」

「うん！！」

デバイスを陵哉の胸に近づけ、魔法陣を展開し身体の中へと入れ、苦痛に耐える。

その繰り返しで、正直陵哉は精神がおかしくなりそうだった。

苦痛に耐える自分が厭に滑稽で、惨めで、小さい存在のような気がした。

だが、目の前にいる女性はそんな自分に言葉を投げかけてくれている。

それが、おかしくなりそうな頭を必死に正気に戻し、耐える力を分け与えてくれているような感覚だった。

そして、最後。レイを入れ終わると、俺は糸が切れた人形のように重力に従って倒れる。

ギョ！

「お疲れ様・・・陵哉・・・・・・・・・・ありがとう・・・」

陵哉は温かく柔らかいものに包まれた感覚と、綺麗で癒されるような声を最後に、意識を闇に沈めた。

フェイトは自分の胸の中で静かに眠る陵哉を見て、安堵の表情を浮かべる。

最後に言った「ありがとう」はどんな意味なのか本人にも分からない

いが、伝えるべきだと思い自然に言っていた。

第26話 目覚めと騒動は突然に

「ん．．．うう．．．」

フェイトが目を覚ますと、何か身体に当たっている事に気がついた。いや、当たっているというよりは自分が抱き締めているという方が正しいだろう。

ふかふかのベッドと枕の上に眠っている筈なのに、自分が抱き締めているものは妙に硬く、ゴツゴツしていた。

その硬くゴツゴツした物の正体を知るために、頭を覚醒させ目を開ける。

《おはようございます。フェイト様》

「．．．．．」

固まった。

目の前にいるのは、黒のコートを着た骸骨。

それが、ズームアップされたかのように、今日の前にあるのだ。

こんな物を朝から見たら、普通気絶するか叫び声を上げるかの2択になる。

フェイトも例外ではなかった。

「き．．きゃあああああああああああ！！！！！！！！！」

《ちよ……フェイトS
ぐおほ!!》

叫ぶと同時にゼヘルを突き飛ばしベッドから追いやった。

ベッドから落っこちたぜヘルは打ち所が悪かったのか、そのまま気絶してしまった（骸骨なのに気絶するのは不明だが）。

そしてフェイトは、少しでもゼヘルから離れ、状況を整理しようと必死に頭を使う。

（えと、陵哉が帰つて来て、それでいろいろ事情を聞いてから中庭に行つて、陵哉に謝られて、ゼヘル達と再契約して、陵哉が氣を失つて、

それで、陵哉を私の部屋のベッドで寝かせて、私もそのまま
 // // // //

自分の行動を思い返して赤面するフェイト。

だが、フェイトの記憶からすると、陵哉はベッドに眠っていないとおかしい。

なにより、何故ゼヘルがフェイトのベッドで眠って？いたのかわからない。

溜息を吐きながら、フェイトはとりあえずシャワーを浴びようと思いい、ベッドから離れる。

机のデジタル時計を見ると、ゼヘル達との再契約から1日経過していた（再契約の時にはもう日付が変わっていたので）。

そして、ソファーを通り掛かると、見慣れた藍色の髪を見つけた。

「？」

「すうゝ・・・すうゝ・・・」

ソファーの上には静かに寝息を立てて眠っている陵哉が居た。

そのままフェイトは視線を下に落としてみると、これまた同じく佳奈多が陵哉の膝枕で眠っていた。

佳奈多を少し妬いてムスツとしたが、とりあえずフェイトは2人を起こそうと思い、実行に移した。ていうか、何故フェイトの叫び声でこの2人は起きないのだろう。

「2人とも。起きて、もう朝だよ」

「ん？　．．．ふぁゝあ．．．あれ？　目覚まし鳴った？」

「？　目覚まし？」

フエイトが声をかけると陵哉はすんなりと起きた。佳奈多はまだ眠ったままだが。

起きた途端、陵哉が不可解な言葉を発してフエイトが聞き返す。そして、先ほどのゼヘルがベッドにいた理由が判明した。

「そ、目覚まし．．．ゼヘルをお前のすぐ横に配置しておいたからテッキリ叫んだのかと．．．」

「．．．．．（プチッ）」

どg 訂正 ポカポカポカポカ

と、フェイトさんが優しく・・・優しく（大事な事なので2回言っておきます）、陵哉にお仕置きをする。

数分後、膨れっ面をしたフェイトがお風呂場に向かった後、リビングには頭に数個のタンコブができた陵哉と未だ眠っている佳奈多が残っていた。

陵哉は悟った。アイツを本気で怒らせると殺されるかもしれない・

・

朝一で早速学んだ出来事であつたとさ・・・合掌 チーン

六課 廊下

「・・・・・・・・」

「なあ、フェイト。いい加減機嫌直してくれよ・・・」

フェイトと陵哉が食堂に繋がる廊下を歩きながら、先ほどの悪ふざけを陵哉が謝っていた。

だが、どんな事を言ってもフェイトは徹底的に無視するという、謝る側にはとっても辛い攻撃をしていた。

因みに佳奈多は、この空気が嫌になり先に食堂へと走り去って行った。

このままではいけないと、陵哉は必死に悩んだ挙句、ある方法に出た。

「じゃあ、俺が作った『ケーキ』と『何でも1つフェイトの言う事聞く』から勘弁してくれないか？」

「・・・ケーキと何でも1つ・・・？」

ずっと無視していたフェイトが陵哉に顔を向けて疑い深そうな目で見る。

陵哉はコクツと即答で頷いた。

正直この手は最終手段・・・つまり奥の手だ。

大抵の女性は『ケーキと何でも1つ言う事を聞く』のダブルコンボで機嫌を直す。

この奥の手、実は陵哉は初めて使った。なら何故知っているのかという・・・まあ、それは追い追い話すでしょう。

とにかくにも、フェイトは陵哉の要求に食いついてきたのだ。

「本当に？ 本当に何でも1つ言う事を聞く？」

「俺は、お前と佳奈多には嘘はつかん」

「・・・じゃあ」

六課 食堂

「　　おいしい」

「そりゃよかった。しかし、朝飯がケーキねえ・・・」

「いいの。女はどんな時でも甘い物は食べたいものなの！」

「へいへい。肝に銘じておきます」

とまあ、何ともピンク色の雰囲気漂っているこの一角。

勿論、陵哉とフェイトだ。早速、陵哉が自作のケーキ（フルーツタルト）をフェイトに御馳走していたのだ。

食堂に入った途端、フェイトが「ケーキ作って」と言った時はちょっと思ったが、こうも嬉しそうに食べてくれるなら作った甲斐があるものだ。

まあ、陵哉が気を使っているといろいろと試行錯誤して朝食にピッタリの味付けと栄養にしたのだが。

陵哉は椅子に座り、コーヒーを飲んで一息吐いた。そこに、ある人物がやってきた。

「おやまあ、朝っぱらからおあつい事で・・・彼氏が作った自慢のケーキを試食中か？ フェイトちゃん？」

「!？ は、はやて!？ そ、そんな！ 彼氏だなんて!？ / / /
/ /」

「あ・・・そういや、あの時の答えまだ聞いてなかったな・・・」

「え？ あの時って・・・!! 陵哉! / / / / / / / /」

と、はやての介入で一瞬の内にフェイトが真っ赤になり、それに追いつき打ちをかける様な陵哉の呟き（あの時とは、13話の陵哉の告白のことである）。

遠目からこの光景を見ていたこのためk・・・ではなく、八神はやては耐えきれず冷やかしに来たのだ。

後方ではテーブルを囲むヴォルケンリッターの3人と1匹が頭を抱えていた。

その後も十数分、2人（主にフェイト）が弄られ続け、満足したは

やてはヴォルケンリッターと一緒に食堂を出ようとする

「あ、フェイトちゃん。今日は休んでもええよ。昨日はずっと寝てたから、少しは羽伸ばしておきや」

それだけ言ってから、食堂から出て行った。

嵐の被害を受けた2人は、一方は平然とコーヒーを飲み、もう一方は食後のアイスコーヒー（キンキンに冷えた奴）を飲みながら心を必死に落ちつけていた。

お互い何も言わずに、数分立った時、突然陵哉が立ち上がった。

「？ 陵哉、どうかした？」

「ちょっとな。すぐ戻ってくる」

それだけ言うと、陵哉は食堂の出入口を抜けた。

フェイトは不思議に思いながら、おまけで出されたクッキーを食べていた。

第27話 嫌（けん）と楽（らく）

静かな廊下を重い雰囲気を纏いながら歩いてゆく陵哉。

歩いてゆくと丁字型の曲がり角があり、その中心で陵哉は足を止める。

「……ここなら誰も聞いてない。出てきたらどうだ？」

………タツ タツ タツ

角の死角から出てきたのは、教導官でありフェイトの親友でもある高町なのはだった。

自分とは違う重い雰囲気、少し動揺するが表には出さない。

今まで陵哉は幾つもの奇異の目で見られ続けてきたため、今のなのはが自分を睨んでいる事がわかる。

「……あの」

「待て。大方察しはつく・・・フェイトの事だろう?」

喋ろうとしたなのはを遮り、思った事を言つと、なのははコクツと頷いた。

肯定したなのはに陵哉は溜息を吐き、頭を掻いた。

その後、真剣な目に代わり口を開き、言葉を発した。

「大体はジリス達から聞いている。

あいつ・・・泣いたんだってな・・・」

「ッ・・・」

陵哉の言葉に思い出したのか、奥歯を噛みしめるなのは。その表情から如何に陵哉を恨んでいるかがわかる。

「・・・いや、泣かせただけじゃない。悲しませて、重荷を押しつけて・・・嫌な思いをさせた。

本当、最低だよな・・・俺って・・・」

「そうですね・・・本当に最低です」

「まあ、どう言われようが構わないが・・・あんたは・・・俺にどうして欲しい？」

「フェイトちゃんに近づかないで下さい！」

なのはの言葉は自分がよく聞く言葉だった。

今まで薬品で気が狂い、暴れたり、意識がとんだりした為、こういう事には言われ慣れていた。

「ふっ・・・そうだろうと思った」

失笑気味に言った言葉になのはの怒りのボルテージは上昇する。

こういう事になった時は、ずっとその要求に応じていた。

近づくなど言われたら本当に近づかなかったし、消えてくれと言われればそいつの周辺には絶対に行かなかった。

「だがな・・・今回だけはその要求には従えない・・・」

「・・・何故ですか・・・」

「あいつには・・・死んでほしくないんでな・・・」

「え・・・？」

突然、なのはが最も嫌う単語が出てきて一瞬理解できなかった。

陵哉の言葉を解読すると、『フェイトには死んでほしくない』という意味になる。

陵哉はなのはを放って話を続ける。

「じゃあ、期間を付けるっていうのはどうだ？」

この事件が終われば俺はフェイトから離れる。これでどうだ？」

「・・・わかりました」

「ありがとう。じゃあな」

そう言つて、陵哉は来た道に戻つて行つた。
陵哉が言つた『フェイトには死んでほしくない』という言葉は強哉の団に殺されたくないという事だと、なのはは勝手に決め付けて仕事に戻つて行つた。

六課 食堂

「ただいま・・・」

「おかえり。どこに行つてたの？」

「野暮用だ。気にするな」

食堂に戻つてきた陵哉は、フェイトの質問を軽くあしらつて残つていたコーヒーを流し込む。

フェイトも追求はせず残り1つのクッキーを食べる。

陵哉が飲み終えたコーヒーカップと食器類を返し口に戻したところで、フェイトが話しかけてきた。

「陵哉。さっき、何でも1つ言う事聞くって言ったよね?」

「ああ・・・ただし、俺のできる範囲な? いきなり死んで下さいは無しだぞ?」

「そんな事は言わないよ!?これから、私と買い物に付き合ってくれる? / / / /」

「.....は?」

クラナガン 市街地

平日だというのに結構な数の人間がこの場所を歩いている。

まあ陵哉とフェイトも例外ではない。2人とも会話を弾ませながら目的地に向かって歩いていく。

周りからは恋人同士のように見え、怨めしい視線や暖かな視線を送っている人が多数いる（陵哉は気付いているがフェイトは気付いていない）

暫く歩いていると、陵哉がある事を思い出した。

「そついえば、フェイト・・・俺って、裁判を受ける事になるような？」

「え？・・・うん、そうだよ」

「その日付って正確にわかるか？」

「あ・・・ごめん、伝え忘れてた。」

「実は、一週間後に裁判・・・あるんだ」

微妙な期間に少し悩まされたが、自分の弁護人と無罪の為の材料、そして何より弁護人に自分の事を詳しく伝えるには結構時間が必要のため、その位の期間があって足りるか足りないか微妙な所だった。そんな事を考えていた為、フェイトが耳元で大きな声で陵哉の名前を呼んで現実に引き戻した。

「陵哉！！」

「うお！ 耳元でデカイ声出すなよ、鼓膜が破れるかと思ったぜ。結構痛いんだぞ？ アレ」

「あ、ごめん。って、陵哉がちゃんと聞いてないからでしょ？ まあ、話を戻すね。」

「陵哉の弁護人は私がするから安心して、それに無罪の為の材料もしっかり集めてあるから」

「えっへん　とでもいう様に、胸を張って答えるフェイトに陵哉は目をパチクリさせる。」

「この女、自分が弁護する人間に裁判の事を全く言わず、自分1人で事を進めていたのだ。」

「何となく、自分の知らない所で自分の裁判の結果が左右されるといふのは無茶苦茶不安になるので、明日フェイトが集めたという証拠資料を全て拝見させてもらおうと思った陵哉だった。」

「正直、ポワポワとした雰囲気を感じているため、非常に不安なのだ。」

「そっか・・・ま、それならいいや。んじゃ、今から買い物を楽しみますか」

「うん　じゃあ、まずはあの一番大きいデパートに行こ」

「一々聞かなくてもいいぞ。お前の言う事殆ど鵜呑みにするつもりだし」

「ふふっ　ありがとう、陵哉」

礼を言ったフェイトは陵哉の手を掴んで、デパートに向かって行った。

手を繋がれた陵哉は少し照れくさそうにしたが、嬉しそうなフェイトを見ると自然とそれが微笑みに変わっていった。

2人とも幸せそうな顔でクラナガンの大型デパートに入って行った。

クラナガン　デパート

「こんな感じか？」

「うん！　結構以合ってると思うよ」

「・・・そっか・・・」

デパートに入ると、フェイトがいきなり「陵哉の服、買いに行こ」と言ってきたので男性用の洋服屋に来ていた。

正直陵哉としては普段着が2着しかなかったものでありがたいのだが、これでいいのかという思いが頭の中にある。

2着目を買う物がごに入れ、早々にレジへと向かった。

「あ、陵哉！ もういいの？」

「別にいいよ。これ位で十分だ。それに、恥かしい事にあんま持ち合わせてないからな」

「そっか……って、陵哉ってこっちのお金持ってたっけ？」

「お前らと出会う前はこっちで少しバイトしてたからな。
強哉の研究所の偵察も兼ねて……」

「へ……」

会話が終わったところで店員が金額を言い、陵哉がその金額通り払い、レシートを受け取って店内を出て行った。

フェイトは足早に歩いていく陵哉に歩調を合わせて、次の目的地に向かった。

デパート 女性用服屋

「どつ？」

「うん・・・そのジャケットだったらシャツとスカートより、こ
っちの黒のワンピースを中に着た方がよくないか？」

「あ・・・うん、それがいいかも」

今度はフェイトが女性用の服屋に着て洋服を来ていた。

男性用の店内より2、3倍ぐらい広いスペースにぎっしりと服が並
べられていた。

フェイトが選んだ服を試着して、陵哉が少しアドバイスを加える。

そういう光景が約1時間続いていた。女の買い物は長いと思ってい
たが本当に長い。

だが、買い物かごはカラのままだった。

「ま、そういうもんか・・・」

「え？ 何か言った？」

「いや、女ってやっぱ見るだけで楽しいもんなんだなって思ってな・・・」

「うん。私は自分が着てるって想像して楽しんだりするから、そんなに買いたいとは思わないかなあ。あ、けど、本当にこの服いいなあって思った物は買うよ」

「ふん・・・」

フェイトの言う事に、やはり男と女では考え方も思い方も違うんだなと思う陵哉。

また新たな服を探しに行くフェイトを見ながら、性別というものを考えていた。

すると、フェイトが1着の『女物』の服を手にとって陵哉の方を向く。

「ねえ、陵哉。この服着てみない？」

「その考えごと脳を吹き飛ばしてやろうか？　（ニパッ）」

「ごめんなさい（恐）」

そんなこんなで店内を出られたのはそれから1時間後だった。

その後も、色々とデパート内をフェイトに引っ張り回され、その日は終わった。

六課に帰った、陵哉はボロ雑巾のような精神状態で床についていた。

第28話 陵哉の仲間

陵哉とフェイトのデートから2日後。

佳奈多がガルーダと遊んでいて、窓から外を見ると突然「皆の訓練見に行こ」と陵哉に言ってきたので、朝からなのはとFW陣の訓練を見ている。

因みにフェイトははやとシグナム、ヴィータと一緒に本局に向かった。何やら、クロノから呼び出しをくらったらしい。

まあ、それは置いて。今FW陣は2対2に分割され、ティアナ&エリオVSスバル&キャロの模擬戦になっていた。

もう模擬戦は始まっているが、佳奈多は肩にミニサイズのガルーダを乗せて嬉々とした顔、陵哉は冷めた目で模擬戦を見ていた。

陵哉は何となく生温いと思って冷めた目で見ていたが、段々とそれが不快に思い始めた時にはもう訓練場で模擬戦をしている4人の中心に立っていた。

「「「「「！」「」」」」」

「！？ ちよつと！？ 夜桜くん！！ 危ないでしょ！！」

「少し黙ってる高町。今の俺は結構イラついている」

陵哉の乱入にFW陣は行動を停止し、なのはは乱入した陵哉を注意

していた。

注意したなのはにガンを飛ばして黙らせ、陵哉はFW陣に身体を向けた。

「お前ら、何ださっきの模擬戦・・・全く緊張感のねえ・・・生温い模擬戦で強哉の一团を何とかできると思ってたのか!？」

「なっ!？」 私達は真剣で模擬戦をしていました!! 貴方にそんな事言われる筋合いは」

「真剣? ああ、確かにそうだな・・・だが、お前から自分の行動一つ一つが自分の命、そして仲間の命を危険に晒す事を考えてたか!？」

「!! それは・・・」

反論していたティアナだったが、先ほどの模擬戦は陵哉の言うとおり、自分の『命』仲間の『命』という言葉が頭の中になかった。それは、心の中で「これは模擬戦だから死ぬことはない」という思いがあつたという事だ。

FW陣はその事を教えられ、そして、先ほどの模擬戦を行っていた自分を恥じた。

「テムエらのその根性・・・俺が叩き直してやる・・・トীগ・set up!!」

人差し指を切って、そこから出てきた一滴の血が鉄甲に変化し陵哉の両手に装着され、陵哉の服はバリアジャケットに変化する。

バリアジャケットは上半身が藍色のYシャツと腕が肘までの長さの白い羽織。下半身は黒のカーゴパンツ、そして、カートリッジ用の弾充填が備えてあるベルトで羽織ごと腰を縛っている。

そして、陵哉はスバルに指を指し、殺気交じりの声を発する。

「まずはスバル・・・お前からやる・・・」

「え・・・!?!」

「ちょっと待って!!」

そのやり取りを見ていたなのは、FW陣と陵哉の中央に立ち、レイジングハートを構える。

スバルとエリオ、キャロは助かったというような表情、ティアナは陵哉に怒りの眼差しを送る。

陵哉は何かを呟いた後、殺気を飛ばしながらなのはを見る。

「何だ？」

「やっぱりあなたは・・・最低です!!」

「そうかい・・・後ろにスフィアを作っても無駄だな」

「なっ！」

自分が今からやろうとしていた事を先に言われ動揺するのは。
だが、偶々だと自分に言い聞かせ、次の行動を起こす。

陵哉が姿を見失うほどのスピードで上に跳び、真上からショートバスターを放つ。

「え・・・」

確実に陵哉を狙った筈だったが、ショートバスターは目標より数センチずれて、地面に当たった。

破片が飛び散るが、陵哉に直撃する破片だけを先を読んでいるかのように素手でとる。

場が鎮まると、陵哉は頭上にいるなのはにその『金色』の目を向ける。

なのはが次に起こす行動を決めた時だった。

「今度はアクセルシューター10発か？」

場所は右後ろに3 左前後に4 後頭部に1 真下に2か？」

「！！ な、なんで・・・」

又もや頭で考えていた事を、それも場所も的確に言われ、これは偶々じゃないと気付いたなのは。

頭の中でどの行動も先読みされている感覚が恐ろしく、まるで操り人形にでもされたような思いになる。

そんななのはに陵哉は溜息をついて話を始める。

「お前は俺の言ったこと、行動したことを偶々だと思っているらしいが違う。」

お前の行動全てを今の俺は全て把握できる。次のお前のセリフも言ってやるつか？『それって・・・どういつことなの・・・？』だる？」

「!!」

自分の言おうとしていた言葉までもが先読みされていた。
呆然としているのはを気にせず、陵哉は話を続ける。

「俺は今、ライガーとユニゾンしている。

ライガーの能力は予知。これで俺がお前の行動を読んでいた理由がわかつたろ？」

「・・・つまり、私がレイジングハートを構えた時に貴方はライガーとユニゾンして私の行動をずっと先読みしていた、ということですか？」

「ご明察。補足を入れるとあのショートバスターが地面に直撃した時の破片も先読みしていた。

今の俺が予知できる対象は・・・せいぜい4、5程度だ」

「・・・」

今の自分がこの男に勝てないのは明らかだった。

行動が先読みされているのなら何をしても無駄足掻きにしかならない。

この能力を普通の魔導師が使っているのならまだ勝機はあるかもしれないが、陵哉は強哉に身体を改造されているのだ、脳の情報処理能力も相当なものだとあの研究員から聞いている。

だから、今現時点で陵哉に勝つ方法はなにはなかった。

「・・・俺はただ、FW陣を鍛えるだけだ　　といつてもお前は俺を嫌って・・・いや、拒絶してるからな。

自分の教え子を拒絶してる屑で生きる価値もない奴には鍛えてほしくはないか・・・」

「・・・ちょっと待って下さい・・・最後のは、自分で自分を哀れんでいるから・・・そんな事を言うんですか？」

「いゝや・・・俺は正直に自分が思った事を言っているだけだ。
お前らも初めはそうだったろ？　俺への見方は気味の悪い、なぜこんな奴が生きているっていう感情だっただろ？」

「！！　そんな事　　！！」

「あるな！！！！」

「!!」

陵哉が自身に対する言葉があまりにも酷い為、なのはがそれについて聞くと、自分たちもそう思っていたと言ってくる。

ティアナが否定しようとしたが、陵哉は力強く殺気を発しながら肯定する。

何故そこまで自信があるのか全く理解できなかった。自分たちはそんな事微塵も思っていないのに。

「実は、ゼヘルに頼んでお前らに一つだけ隠していた事がある」

「? 隠す?」

「ガルーダの能力。確かに傷を移す事も出来る・・・だが、ガルーダの本当の能力は『全てを見透かす』だ」

「・・・全てを・・・見透かす・・・?」

六課全員に隠していたと告げる陵哉。

エリオが聞き返し、ガルーダの能力を隠し、その本当の能力を告げる。

何故『全てを見透かす』という能力を隠し、そして、今になってそれを告げる理由は何かと考えるが、陵哉は歯止めが利かなくなっただけに話し続ける。

「俺が初めて六課の医務室で目が覚めた時、ゼヘルを出したが、あの時ゼヘルを出したと同時にガルダをユニゾンさせた。

悪いと思ったが、用心の為に、お前らの心の奥を見せてもらった。

そしたら俺を軽蔑する様な感情しか流れて来なかった。あの時本当に心配してくれていたのはフェイトだけだったぜ」

「！！　そ、そんな・・・こと・・・」

その場にいた者達があの際の感情を思い返した。

あの時、自分たちは驚いて陵哉に声すらも掛けず、あの中で声を掛けて心配もしていたのはフェイトだけだった。

もしかしたら、あれは驚いていたのではなく、心で陵哉を気味悪がって、近づきたくなかったからではないだろうか？

そんな考えが頭の中で埋め尽くされている時だった。

その現場を遠くから静かに見守っている佳奈多。

「あゝらら・・・兄さん、結構頭に血が上ってるなあ・・・
ねえ、ガルーダ。あの5人にユニゾンインして兄さんの心の奥を
見せる事できる？」

「キエエ！」

「ふふつ、じゃあ、お願いするね」

心でも通じあっているかのように話？をした後、ガルーダは陵哉に
気付かれない様に超高速で5人に一部だけユニゾンした。
融合事故防止のため、ガルーダが考えて行動したのだろう。

「よくできました。まあ、兄さんの心の奥を見せるだけだからあの
程度で見えるかな」

純粋な笑顔で何を考えているのかはわからないが、兄の事を思っ
ての行動だという事は誰の眼から見ても明らかだろう。
彼女は兄の幸せをどこまで願っているのだろうか。

場所は戻り、訓練場。

陵哉は背中をこちらに向け、雰囲気すらも感じ取れず、どんな感情なのか分からない。

自分がどんな言葉を言えばいいのか、どう行動すればいいのかもわからない。

そんな時、何かが自分達の中に入ってくるのを肌で感じた。

（え！？ 何・・・これ・・・何か、私の中に入って・・・）

声に出す事はできず、顔をFW陣に向けると皆も同じなのか、なのは同様戸惑っていた。
なのはは陵哉が自分たちに魔法をかけたのか確かめる為に、陵哉を見ると

「・・・やはり、強哉の一団とは俺一人で戦うか・・・」

（え・・・？）

脳内に陵哉の声が反響するように響く。
FW陣も聞こえたのか、陵哉を見る。
その後も脳内に陵哉の声は響き続ける。

「あいつらに・・・仲間意識を持ったのがそもその間違いか・・・
こんな俺が、人と仲間になるんなざあ許されねえよ・・・俺はやは
り天涯孤独の方が似合ってるからな・・・」

日付の移り変わりと共にここを出るか・・・カートリッジも残り
少ないし夜に補充しとくか・・・」

なのは達が聞いた言葉は、自殺行為に等しいものだった。

強哉の一団に一人で挑む、それがどれほど危険で勝機が低いものか、
幾つもの事件を乗り越えてきたなのは達にはよくわかっていた。

勿論、強哉の一団はエルノーマだけでなく、多くの強豪達が居る事
だろう。

だが、陵哉は何の躊躇もなく一人で戦う事を選んだ。勝つ自信があ
るのか、それとも責任感なのかそれはわからない。

「・・・こいつらを巻き込んで死なせるのは・・・やっぱ・・・い
けねえな・・・死ぬのなら、俺一人で十分だ」

その言葉を最後になのは達から先ほど入って来ていたものはスツと身体から出て行った。
陵哉が頭を掻きながらこちらに振り向き、申し訳なさそうな顔で謝る。

「・・・悪い。頭に血が上っていた。吐血した奴を見たら普通はそういう反応するからな・・・」

そう、気にしないでくれ・・・ああいう反応には慣れてたんだが、3年くらい前からフェイトと会うまで、まともに人と接してなかったからな・・・

「ちょっと感情が抑えきれなかった。許してくれ」

「・・・いえ、謝るのは私達の方です」

「・・・・・・高町・・・？」

先ほどの聞こえた内容を全く表に出さず、謝ろうとする陵哉に謝られる側のなのはが頭を下げてきた。FW陣もなのはに続いて頭を下げる。

その行動に動揺する陵哉だったが、すぐに深呼吸して心を落ち着かせる。

「・・・どういう風の吹きまわしだ？　こんなカス野郎に謝るな」

「

「自分の事をそんなに過小評価しないで下さい！！」

「・・・」

「フェイトちゃんが貴方を放っておけない理由がやっとわかりました。

貴方は、もしかして・・・死に場所を探しているんですか？」

「・・・そうかもしれんな。俺の意志では復讐の為に強哉を追っていたのかもしれないが、本能的には死ぬために追っていたのかもしれない・・・」

だが、それでも今の俺には強哉を殺す事しか頭にない。自分の命はどうでもいい・・・ただアイツを殺せれば俺がどうなるかと構わん・・・」

その決意の籠った眼に、なのははある事に気がついた。

それに気がついた瞬間、やはりこの人は優しく強い人なのだと思っから思った。

「……貴方は優しいんですね……」

「俺が？」

「ええ。だって、『自分の事はどうなろうと構わない』って言いましてけど、『周りの人はどうなろうと構わない』って言いませんでし
たから」

なのはの單純な答えに眼を丸くする陵哉。

陵哉からしてみればたつたそれだけだと思うかもしれないが、なのは直接頭に響いた陵哉の声を聞いて、信じるに値する人物だと判断していた。

その場に静止が漂うが、陵哉が顔を空に向け手で目を覆い隠すと、突然笑い出した。

[illegible]

┐
?
└

「いや、悪い悪い。そうかい。じゃ、お互い仲直りという事で・
・改めて、よろしくな」

「うん。よろしく、陵哉くん」

どちらからともなく手を伸ばし、しっかりと握った。
この場にいた全員がお互いを仲間だと認めたと同時に、強哉との戦いに初めて、一步を踏み出したのだった。

第29話 予言と「ビー」

お互いが認め会った後、陵哉はFW陣4人に様々な戦術を教えた。陵哉はいろんな武器を扱っているため、FW陣が使っている武器の長所と短所、そして先ほどの模擬戦での癖などを考え、FW陣に合った戦術を教えた。なのはもその戦術に納得の顔で聞いていた。案外、陵哉は教導に向いているのかもしれない。

ヴォン

キャラに最後の戦術を教えたところで、全員の目の前にモニターが現れる。その画面からはフェイトが映し出された。周りの風景から察するに車で移動中のようなのだ。

「あ、フェイトちゃん。クロノ君からの用事終わった？」

『うん、ついさっきね。それより、大丈夫だった？ 訓練中かと思
つて後にしようかと思つただけど・・・』

「大丈夫だよ。FW陣が陵哉先生から戦術勉強してて、さっき終わ
ったから」

「おい、誰が陵哉先生だ。」

『あ、陵哉。訓練に参加してたの？』

「まあ、色々あつてな・・・」

陵哉も加わり、先ほどの教導の事で陵哉をからかっていた。

FW陣は、陵哉に今教えた戦術を自分なりに改良しながら練習と言
われ、その通り各々が練習している。

なのはとフェイトは陵哉をからかうのをやめて、通信をした理由を
話し始めた。

『さっきね、騎士カリムから連絡があつて、六課の隊長メンバーと
陵哉を連れて聖王教会に来てほしいって・・・』

「？ 私達はわかるけど・・・何で陵哉君が？」

『それは私にもわからないけど、多分この事件に関わる事だと思う』

「ま、ここで詮索しても何もわからん。とりあえずお前はそのまま聖王教会に向かってくれ。俺はなのはと一緒に行く」

『え？ えっと、陵哉。聖王教会の場所知ってるの？』

「お前、俺がミッドで少しの間生活してたの知ってるだろ。

その間でミッドの地形とかは調べてある。まあ、少し変わってるかもしれないがあの場所は変わらんだろ。」

『そつか・・・じゃあ、私達はこのまま行くね。2人とも気を付けてね』

「うん」

「ああ、また後でな」

その会話を最後にディスプレイは消え、静止が訪れた。

陵哉は人差し指から、新たに4滴の血を出し、その血は形を変える。

「レイ、ジリス、ガルダ、トーガ。FW陣のコーチ頼むぞ」

《《《《はっ！（りょうかい）（キエ！）《《《《》》》》

「全員、2時間たったら切り上げろよ。じゃあ、なのは。行くぞ」

「うん。皆、無理しないでね」

「「「「はい！！」「」「」

レイ、ジリス、ガルダ、トーガにFW陣のコーチを任せる陵哉。
まあ、この方が自分の武器と同じなため、しっかりと教えられるかもしれない。

2人は訓練場を出て、ヴァイスにサイドカーを借りて、六課を後にした（勿論、運転手は陵哉）。

聖王教会

サイドカーを駐輪場に停めると、フェイトの車を発見した。周りを見渡してみるがフェイト達の姿はなく、どうしたのかと思っていたら、教会から1人の女性がやってきた。なのはは笑顔でその女性に手を振る。

「久しぶり、シャツハ」

「はい、お久しぶりです。なのはさん。えっと、こちらの方が・・・」

「夜桜陵哉だ。よろしく」

「あ、はい。こちらこそよろしく願いします。フェイトさん達は、カリムの所で待っていますので案内いたします」

「うん。お願いするね」

シャツハを先頭に、教会内に入りカリムの執務室に案内してもらった。陵哉は教会などに行った事はなく、物珍しい顔で教会内を見ている。

それから数分して、カリムの執務室の前に着た。

「騎士カリム。なのはさんと陵哉さんがいらっしやいました」

「どうぞ」

「失礼しまゝす」

「失礼します。カリム、久しぶり」

「ええ、お久しぶり。なのはさん」

「では、私は紅茶をお淹れいたしますね」

部屋の中に入ると、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータが先に席に着いており、世間話をしていた。

若干フェイトの顔が赤くなっていたが、そこはお気にせず。

陵哉がシャッハと同じように挨拶をかわし、全員が席に着いたところでカリムが真剣な顔になる。

「今回皆さんをお呼びしたのは、これから起きる事についてです」

「？ これからって事は強哉達との戦いの事か？」

「正確にはわかりませんが、可能性としてはそちらの方が高いと思われる。」

陵哉さんは私のレアスキルを知りませんよね？」

「レアスキルって、希少種な潜在能力みたいなものだよね？」

「まあ、そういう捉え方で良いと思います。」

私は予言者の著書プロフェーティン・シュリフテンという半年先数年先の未来を詩文形式で記した
予言能力を持っています」

「その予言能力によからぬ事が記されていた、と？」

「はい。それがこちらです」

席を立ち、古い長方形型の紙束を取り出し、紐を解いて宙に浮かせる。

その紙は一つ一つ光を放ち、カリムを中心に囲んでいく。

その中の一枚をテーブルの上に置く。

「見ても、古代ベルカの文字なので理解できないと思いますが・・・私も解読をしているのですが、未だ少ししかわかっていません」

「少し・・・それでも構いません。教えて下さい」

「はいわかり」

バン！！

「どういうことだ！！　これは！！」

「！！！！」

フェイトがカリムに答えを要求し、答えようとした時、陵哉が動揺した顔でテーブルを叩き置かれた紙をマジマジと見る。
いや、見ると言うよりかは『読んで』いると言った方が正しいかもしれない。

シグナムが不可解な顔で陵哉に質問する。

「夜桜。貴様、古代ベルカの文字が読めるのか？」

「・・・古代ベルカは別として、この文字は・・・俺が伝承された流派で扱っている文字だ」

「！？ それはホンマか！？」

「じゃあ、お前、これが読めるってことだよな！？ 読んでくれ！」

シグナムの問いに自身の流派で扱っている文字を一字一字思い出し肯定する。

はやてとヴィータが陵哉を速く読むように急かす。

全員がこの内容に嫌な予感を感じて、それを拭おうと陵哉の言葉を待つ。

「『赤き空が広がり 次元が歪む時 魔女の存在により 全てが無に消える

人のコアは異なる生物のコアとすり替えられ 8つの魂を持つ青年と運命の氏を持つ女性は滅ぼされる

魔女の目覚め 即ち世の終わり 全ての終わり 神の終焉 魔女の終焉なり』

解読すれば、赤き空が現れ次元空間が歪む時、魔女の存在で全てが無に消え、人はリンカーコアを埋め変えられ、俺とフェイトが滅ぼされる。

そして、魔女の目覚めは世界と全ての終わり、神と魔女の終焉……
ってことになる……」

「……なに……それ……」

難しい顔をしながら答える陵哉になのはが確認の言葉を求める。

この場にいた全員がその内容に耳を疑った。この絶望に満ち満ちた内容にどう反応すればよいかわからなかったからだ。

何より、陵哉とフェイトが滅ぼされるという事が衝撃的で皆絶句している。

「騎士カリム。これの他にまだないのか？」

「……えっと……確か裏面にも記されている筈です」

「……全員、読むぞ。」

『しかし可能性はあり この詩を読む事が第一歩 残り何百という歩を歩め』

まだ終わりではない 自身の力を信じ 高め 仲間の力と合わせ 共鳴す

その先に未来はあり 終焉とは諦めた者から広まる だが一人でも諦めぬ者がいる限り 全ては終わらぬ』

これで全部だ。ここまでの事を聞いて諦める奴は・・・？」

裏面を読み終わり、全員に諦めているのかを聞く。

皆、迷わずに首を左右に振るう。その瞳にはしっかりと戦う覚悟が宿っていた。

その答えに陵哉は口角を上げ、席を立ちドアの方へ歩く。

「陵哉？ どこ行くの？」

「後はお前らで会議をしてくれ。俺は会議とかは苦手なんだ・・・」

「

陵哉はそれだけ言うと、カリムの部屋から出て行った。

引き止めようとしたが、フェイトはあんなにたらどうにもならないとわかって止めた。

その他のメンバーは溜息を吐きながら、会議をする。

「まずは、夜桜強哉を捕まえる事からや。
魔女の事件よりも早く捕まえんと両方に注意しながら戦わないかななる」

「確かにそうだな。だが、何処から探すんだ？ まさか手当たり次第って事は・・・」

「ヴィータ、それはないよ。昨日ね陵哉が私にこれを渡して来たんだ」

はやての優先順位の話から、ヴィータが強哉の捜査について話し出す。

それにフェイトが割り込み、一枚のフロッピーディスクを出す。そのフロッピーディスクをセットし、モニターを出す。

映し出されたのは文字と数字の羅列。

「？ これ・・・なんのデータだ？」

「強哉が管理していた全ての研究所のリスト」

「何！？ 全てという事は、ミッド以外の惑星のリストも・・・」

「勿論入ってるよ。これから、陵哉が破壊した研究所を省くと・・・」

フロップピーデータに入っていたのは、強哉が管理していた研究所のリストだった。
モニターには文字と数字の羅列が続いていて、軽く1000は超えていた。
フェイトがキーボードを使って打ち込むと、文字と数字の羅列が10行に減った。

「・・・こん中に・・・強哉の拠点が？」

「そうみたいだね・・・っていうか、陵哉君。一体いくつ壊してたんだろう・・・」

「高町。それは触れない方がいい。とにかく、この10件の研究所に調査隊を派遣して」

ウンウン
ビービービー

シグナムの言い分を遮るかのように警報が鳴り続ける。

一瞬呆けたが、全員すぐ我に返り現状を確認する為に六課本部に連絡する。

はやてが連絡をし、モニターに映し出されたのはグリフィスだった。

『！ 八神部隊長！』

「現状はどうなつとる！？」

『は、はい！ 聖王教会付近の海岸から総数約130の敵が接近しています！』

「130！？ んなアホな数があるか！？」

「幻影の可能性は？」

『全ての幻影検索をしましたか・・・全て実態としか・・・それに・・・とりあえず、そちらのモニターに現場の状況を転送します』

ピピッ

通信画面が小さくなり、空きスペースに現場の映像が映る。空を覆い尽くす程の敵の数が、海の方から飛んでくるのがわかる。その中の一つをズームさせると、全員が驚愕の表情になる。それもその筈、何せそこに映っていたのは

「ガ……ガジェット……？」

そう、映し出されていたのは一年前J・S事件でスカリエツィが、レリックの搜索・確保する為に造った機械兵器・ガジェットだった。違う種類のガジェットが居ないかはやてが確認するが、幸い飛行タイプのガジェットしかいなかった。

「これも……強哉の仕業……だよな？」

「うん・・・とにかく、出撃して全部倒さないと」

『その必要はねえよ。フエイト』

ミッドチルダ海岸付近

近くのビルの屋上に静かに立ち、辛うじて敵が目視できる。

陵哉の手には2丁のライフル銃が握られている。どうやらレイをそちらに転送したらしい。

出撃しようと提案したフエイトに通信し、モニターを表示させる。

『陵哉！？ ま、まさか・・・』

「ああ、俺1人であの鉄屑を全滅させるさ・・・」

『そんな、陵哉君1人であの数・・・』

「別に・・・あの程度の数だったら余裕だ。ま、黙って見てなって」

陵哉がグリップを握る力を強め、2丁のライフル銃を合体させる。
スコープから敵を覗き、敵の中心に照準を合わせる。

「カートリッジロード」

ガシャシャシャシャシャン！！

両銃から5発・・・計10発を装填させ、魔力を増大させる。
藍色の魔力を纏い、静かに魔力を制御する陵哉。そして、トリガー
に指をひっかける。

「ドファイニット」

ドガアア！！！！！！

巨大な光弾が銃口から敵部隊へと向かう。

フェイト達もモニターからその光景を見ている。

そして、残り50mの地点で光弾は 急上昇した。

『!?!』

この光景を見ていた者全員が外れたと思った。

だが、陵哉は全く顔を歪めず、右手を敵部隊へと向ける。

「オールルートバリア!」

バキン!!

全員が自分の目を疑った。

このような事が一魔導師に出来るという事が頭の片隅にも思っていない

かったからである。

というより、こんな発想をすることすら思いつかなかったからである。

海の上の空には、ガジェットがいる。それは変わらない。しかし、その『ガジェット一つ一つがバリアに囲まれている』のだ。

いや、囲まれているというのは少し語弊があるかもしれない。バリアには少しだけ通路があり、それが真上で止まっている光弾へと繋がっていた。

「弾ける!!」

ドアア!! 《ゴアアアア!!》

陵哉が叫んだ瞬間、光弾は弾け龍へと変化し、狭い通路を通ってガジェット一つ一つを破壊していく。

光弾からは止め処なく龍が現れてはガジェットに向かって激突して行く。

光弾とバリアだけでも驚いたが、陵哉は一つ一つの龍をしっかりと操って、ガジェットに激突させている。それほどの情報処理能力を持っているという事である。

数分後にはガジェットの姿は一つもなく、塵一つ残っていない空が広がっていた。

第30話 裁判と保護監察官

室内は大勢の人間がいるが、まったく話し声は聞こえず、物音ひとつ聞こえない。

まるで、時間が止まったような静けさだった。

夜桜陵哉は局員に挟まれ手錠を掛けられている中で、後ろで座っているフェイト・T・ハラオウンと共に真剣な目つきでこの室内で最も位の高い人物に目を向けている。

柵で遮断されたなのは達・・・六課メンバーも陵哉・フェイトとその人物を交互に見つめている。

そして、視線を送られていた人物 裁判長は手に持った木槌を叩く。

カンカン！

「これより、夜桜陵哉の裁判を行います。全員、起立！ 礼！ 着席してください」

裁判長の指示に全員が従い、また静けさが訪れる。

あのガジェット出現から5日後　　つまり今、陵哉の裁判が行われている。

5日前の事件の後、色々と事後処理は大変だった。

一番大変だったのは、陵哉が1人勝手に行動しガジェットを無許可で撃墜したことだ。最終的にはやてが民間協力者として陵哉に協力してもらった、ということでも事解決したが。

まあ、その後フェイトと一緒にこの裁判に向けての無罪方面の証拠集めに専念し、万全の状態でこの裁判に臨んでいる。

裁判長が陵哉に目を向けて前へ出るように命じる。陵哉は局員に挟まれながらも、裁判長の前へ出る。

「貴方は、被告人・夜桜陵哉氏ですね？」

「はい」

「では、検察官。被告人の罪状を朗読してください」

「はい。被告人は器物破損、デバイスでの違法攻撃です」

「被告人。今の検察官の罪状に間違いはありませんか？」

「ありません」

淡々と進められ、陵哉の顔も自然と真剣になり、鋭い眼差しで裁判長の言葉に受け答える。

検察官も緊張はしているものの、陵哉と同じくらい真剣な顔で裁判の行方を見据えている。

裁判長は、次にフェイトに目を向けた。

「では、弁護人。これらの事件に関して話すことはありますか？」

「はい、あります。まず、器物破損に関してですが、あの事件は被告人が闇の研究を行っていた夜桜強哉氏を阻止するための行動です。次にデバイスでの違法攻撃ですが、被告人の已む負えない状況での行動だと進言いたします」

手に持った書類を確認しながら言うフェイト。

裁判長は表情を変えず、しかし脳内で陵哉の審判をただ考えていた。十数秒の沈黙の中、裁判長は次の審議に移った。

「わかりました。では、証拠の提示へ移りたいと思います。検察官」

「はい」

検察官は立ち上がり、机の上に置いてあったチャック付きのナイロン袋を掲げる。

ナイロン袋の中身は、カートリッジの薬莖だった。ただ、数が6つもある。

検察官は説明を始める。

「これは機動六課の方と被告人が戦闘された犯行現場で発見した、カートリッジシステムの薬莖です。

そして、この薬莖が6つあるという事はそれだけの威力で攻撃したということになります。

本当に研究所だけを破壊するならもう少し数を減らしてもよかったんじゃないでしょうか？ どうですか？ 被告人」

「・・・確かに減らしてもよかったのかもしれませんが、自分は研究所の強度と地下にも研究施設があるのではと考え、6つカートリッジを使用しました」

「そうですね。検察側からは以上です」

「では、次に弁護人。証拠の提示をお願いします」

「はい」

検察側の証拠の提示が終わり、裁判長がフェイトに証拠の提示を求める。

フェイトはその場に立ち上がり、十数枚の束になっている書類を掲げた。

表紙には『デバイスと人間の融合』と書かれていた。

「これは、第97管理外世界：地球・日本の海鳴市で夜桜強哉氏が管理していた研究施設から回収した書類です。全て読むと膨大な量になるので抜粋して読めます。

『研究内容“デバイスと人間の融合” この研究は魔導師の補助をするデバイスを人間と融合させ、デバイスとのシンクロ、そして魔力の強化を目的とした研究である

』

その後、フェイトが読み上げる研究内容に傍聴席に座っている人たちから検察官、裁判長までもが驚きの顔で聞いていた。

少なからず強哉のことを知っている者達からは信じられない非人道的な研究だった。

「以上がこの書類の中に書かれてあることです。

被告人はこの研究を夜桜強哉氏が、未だ続けていると確証した上

で夜桜強哉氏の研究施設を破壊していました。

被告人の行動は被害者を出さない為の正しい行動だと進言いたします。弁護側からは以上です」

フェイトの証拠提示が終わると、傍聴席からボソボソと話し声が聞こえてきた。

皆、フェイトの証拠品は半信半疑のようだった。しかし、室内に響く音でその話し声は消え失せた。

カンカン！！

「静粛に！」

裁判長の言葉に全員が口を瞑る。長年幾多の裁判を見ているためこの様に黙らせることも容易い様だ。そして、間髪入れず室内に言い放つ。

「では、次に弁論に移りたいと思います。検察官、お願いします」

「はい。被告人の罪状：器物破損及びデバイスでの違法攻撃は執行猶予3年懲役2年を主張します」

「わかりました。では弁護士、お願いします」

「はい。被告人は罪を一切犯していません。全て正しい判断での行動です。よって弁護側からは無罪を主張します！」

両者・・・検察官とフェイトからは一步も譲らないオーラを醸し出している。

陵哉は真剣な眼差しで自分の判決を待っている。

六課メンバーは心配そうな目でフェイトと陵哉を見つめている。そして、裁判長が木槌で机を叩く。

カンカン！！

「判決を言い渡す！！ 被告人は

『無罪』！！」

「いや、疲れた……」

「ふふ、ご苦労様。まあ、初めてじゃそんなものだよ」

「お前は結構慣れてたよな……」

「まあ、弁護するのは陵哉が初めてじゃないしね」

裁判が無事無罪で終了し、陵哉は数年間の保護観察を受けることになった。

裁判所が本局内にあるため、そのまま保護観察官に会おうということになり、只今その方の所に向かっている。

先程なのは達から祝福の言葉を貰い、事情を話すと先に六課に戻ると言い、帰って行った。

まあ、そんなこんなで他愛もない話をしながらその保護観察官のいる部屋へとたどり着いた。

コンコン

「フエイト・T・ハラオウンです」

「入れ」

「失礼します」

ノックの後名前を名乗ると許可が下り、2人は部屋に入った。奥に机と椅子があり、そこで黒髪の男性が仕事をしている。良い姿勢のまま動かしていたペンを止め、2人を見据える。

「ん？」

「え？」

その男性が陵哉を見た途端不審な視線になり、陵哉は固まった。フエイトは説明しようとしたが、2人の様子が可笑しいことに気が付き口を閉じ陵哉と男性を交互に見る。そこでやっと口を開いたのは陵哉だった。

「ヴ・・・ヴェラ師匠・・・？」

「ああ、やっぱり陵哉か」

「あ、え？ 2人とも知り合いなんですか？」

「あ？ ああ・・・知り合いというか・・・」

「この人は俺の師匠だ」

「へ？」

第31話 過去と忌水流 1

「はーん。つまりお前が強哉の研究所ぶっ壊した事で罪に問われたが、フェイト達のおかげで裁判が無罪になり、保護観察を俺がすると・・・」

「はい。リンディ提督とクロノ提督は仕事が山ほどありまして・・・」

「これ以上負担は掛けたくないっか・・・ま、別に忙しいってほどじゃないから構わんさ」

陵哉とこの男・・・ヴェラ・メーテルの再会に驚いた本人達だがすぐに冷静さを取り戻した。

それから、フェイトがここまでに至った経緯を詳しくヴェラに話して、只今納得し、承諾された。

ヴェラは納得した後、含みのある顔で陵哉をみる。その顔に陵哉は一瞬ビクツと体を震わせる。

「で？ 陵哉・・・・・・・・一応聞いておこうか？」

「は、はい・・・」

「なんで俺に一言も言わなかった？
言ってくれりゃ俺も協力したし、こんな面倒なことにはならずに済んだ」

「それは・・・」

そこで陵哉は口を閉じ表情を濁す。

フェイトは2人のやり取りを黙って聞くしかなくなっていた。
表情を濁した陵哉に、ヴェラはわざとらしいため息をついて、陵哉を睨むように見る。

「確かに、お前のせいで俺の戦闘力は格段に落ちた。

だが、この継承方は代々受け継がれてきたものだ・・・お前が責任を感じることはない」

「だが、俺はアンタの右腕と右足を斬った・・・それは絶対に変わらねえよ」

「お前が自分を護つての結果だ・・・親しい者同士で殺し合っつて

いうのは精神面で一番負担が掛かる。

俺達継承者はそれでも闘えるように、その方法を初めに教えられる・
・過去の師には、弟子をわざと2人にさせ、最後にはその2人で
殺し合ったという事例がある。

それほど、俺達の流派には戦いの場面での冷静さが重要なんだよ・
」

「・・・」

主語のない会話にフェイトはついて行けないが、なんとなく陵哉と
ヴェラが闘ってヴェラが負けたという事は分かった。

陵哉が口を閉じてしばらくすると、ヴェラが「アッ!」と何かを思
い出したような顔で言った。

「・・・陵哉。チョイと頼まれてくれ」

「なんです・・・?」

「ここから少し離れたところに倉庫があるんだが、そこから書類と
って来てくれないか?」

「はっ?・・・まあ、別にいいですが・・・」

唐突に今までの話とは全く関係のないことを言ってきたヴェラ。
急な話題転換に動揺するが、慣れているのか軽く承諾した。

「えーと、ちよつと待てよ．．．（カキカキ）．．．ほれ、倉庫の
場所と取ってきてほしい書類を書いたからサッサと取ってきてくれ」

「はあ．．．わかりましたよ．．．」

「あ、それなら私も」

「フェイトは残れ。話もあるし．．．」

「は、はい．．．」

机の上にある紙にペンで用件を書いて陵哉に渡す。

メモを受け取り、部屋を出ようとすると、フェイトも一緒に付いて
いこうとしたがヴェラに引き止められ、ソファーに座る。

その間に陵哉は部屋を出て行き、目的の書類を取りに行った。

「ふゝ．．．フェイト、コーヒーで構わないか？」

「え？　．．．あ、はい．．．」

棚の中に保管されているコーヒーサイフォンを取り出し、下のフラスコに水、上のフラスコに粉碎したコーヒー豆を入れてアルコールランプで沸騰させる。
湯が沸騰したところでアルコールランプをフラスコから離し、漏斗を差し込むと再びアルコールランプをフラスコの下に置く。

「さて、これであと数分かな．．．」

「．．．陵哉のコーヒー好きは執務長官から移ったのですか？」

「ん？　んゝ．．．まあ、半分はな．．．」

「半分？」

ヴェラの手際の良さにフェイトはなんとなく抱いた疑問を聞いた。質問されたヴェラは、コーヒーの様子を見ながら何か懐かしむような顔で、話し始めた。

「俺とアイツが初めて会ったのは15年前。地球の日本・・・その中の埼玉県って所でな、俺は数年間の長期任務でそこに住んでいたんで、俺が地球での生活に慣れ始めた頃、公園の茂みで餓死しかけてた陵哉を見つけたのが始まりだ」

「餓死・・・しかけてた・・・？」

「アイツの生まれは知っているだろう？ あれから逃げた後、どうやって生活していたのかは知らないが、俺が見つけた時は、死にかけたんだよ・・・」

ヴェラの声とコーヒーが沸く音で室内満たされていた。フェイトはただただ話を聞くだけしか頭になかった。

「何故かは忘れたが俺はその時、缶コーヒー一本しか持つてなくてな、取りあえずはそれを飲ませて俺が住んでた宿に連れ帰った。意識を取り戻したアイツの前に飯を置いたら、皿ごと食うんじゃないかってほどの勢いで食い始めてさ・・・・・・終始泣いてたよ・

・
・
『美味え、美味え』って言いながら、最後の一粒、一滴まで・・・
食い終わったら電池が切れた機械みたいに眠りこけて・・・
本当、5歳なのはどう転がったらこんな状態なるんだと思ったぜ・・・
」

話し終わると、アルコールランプの火を消して沸いたコーヒーをカップの中に注いでいく。
コーヒーの良い香りがフェイトのいる場所まで届き、少し落ち着く感覚が走った。
ヴェラはカップに注いだコーヒーをソーサーに乗せフェイトの前に置く。

「ありがとうございます」

「どういたしまして・・・まあ、ちょっと話はそれだが、陵哉がコーヒー好きになった原因は、その時のほうが高いかもしれない」

「そうだったんですか・・・」

餓死寸前で食した食べ物・飲み物は格別なのだろうかと考えてしま

「おゝい、聞こえてるか？」

「はっ！ す、すみません……あの、私」

「ああ、悪い。やっぱり答えなくていいわ。お前の反応で大体わかった」

「は、はあ……」

陵哉について自分がどう思っているのか考え込み、ヴェラの声で我に返った。

そして、フェイトが答えようとするとヴェラが遮ってなるほどつという顔で頷いていた。

カップを掴むとそのまま口の中にコーヒーを流し込むと、フェイトを見る目が真剣になる。

「アイツはさ……好かれる奴が本当、いなくてさ……お前のような奴は初めてだ……」

「……」

陵哉の人間関係を語るヴェラの目は悲しそうな、それでいて怒りのような感情が籠っていた。

そのことについてはフェイトも佳奈多から聞いていた。薬品拒絶症の所為で周りから軽蔑されるようになったと・・・だから、ヴェラがその怒りの感情をぶつける存在が強哉だとフェイトはわかった。

「さてと・・・んじゃ、その後の事を話すか・・・」

「その後・・・ですか・・・？」

「ああ、俺と陵哉が出会ってからだ」

15年前 地球：埼玉県とある一室

「ん・・・うう・・・」

陵哉が目覚めるとそこは殆ど何もないと思わせるほど虚しい部屋だった。
なぜ自分がこんな所にいるのか？　まず陵哉が思ったことはそれだった。
しばらく考えていると、部屋のドアが開いた。

「お、気が付いたか。案外2、3日眠ってると思ったが一晩で起きるとは・・・」

「お前・・・誰だ・・・」

起きたばかりの陵哉だが、部屋に入ってきた男を殺気丸出しで警戒する。

普通の5歳児は知らない奴でもキョトンとしながら聞くが、陵哉の場合は知らない奴はとことん警戒しながら話すという事になっている。そんな陵哉にヴェラはフツと鼻で笑いながら、殺気を送られているにも拘らずズカズカと陵哉が乗っているベッドに近づく。

「まあまあ、そう警戒ス

」

ジャキ・・・」

「!!」

「これ以上近づけば首を断ち切る・・・!」

陵哉との距離が後1mになった時に、ヴェラの首の後ろに大鎌の刃が向けられていた。

大鎌をよく観察するとデバイスであることが分かったが、起動した瞬間がさっぱり見えなかった。

部屋は陵哉の殺気とお互いの沈黙で支配され、気が緩めばいつ首を飛ばされても不思議ではない。

「・・・へえ、凄いなお前。いつ起動させたのか全く見えなかったぜ」

「!?! 何のことだ・・・」

能天気な、だが隙を全く出さずに言った言葉は陵哉には意味が伝わ

らないようだった。

褒めたつもりのヴェラだったが、陵哉の様子を見て変だと感じた。その勘は当たっていた。

「お前・・・『こいつら』について何か知ってるのか・・・？」

「『こいつら』・・・その言葉の意味はわからないが今俺に向けている大鎌はデバイスだろう？」

「デバイス？ 何だそれは？」

「・・・おいおい、マジかよ・・・」

過去に目の当たりにして驚いていたことが小さなことに感じられ、今この子供が発言をしたことと目の前に起っていることが信じられなかった。

普通の5歳児がデバイスを起動させる事など無理だと思っていた。せいぜい早くても7歳からデバイスを起動させる者が多い・・・勿論、デバイスをある程度理解して・・・

だが、この目の前にいる少年は5歳児でデバイスの事など全く知らずに起動させ、今・・・ヴェラの首をとっている。

この状況下でヴェラはしばらく冷静に考えるとニヤリと心の中で笑う。それは、ずっと待ち焦がれていた人に出会ったように

「なあ、お前・・・力がほしいか？」

「？・・・どんな敵でも・・・潰せる力・・・か？」

「お前が願い、努力し、求め続ければいつかは手に入るだろう・・・だが、敵を倒す為だけに力を手に入れば、お前はずっと憎まれ続ける・・・」

今のお前には、大切なものはあるか？」

ヴェラは、陵哉を試している。これで答えられなければ力を与えるつもりなど更々ない。

いくら力を手にしたところで護る者がいなければ、その力は空回し悪い方向へと向かっていく。

だが、自身の護る人、物の為なら少なくともその力を良い方向へと向かっていく可能性がある。

だからヴェラは陵哉に力を与えるか与えないか判断するためにこの質問をする。

陵哉は大鎌をヴェラから離し、しっかりとした眼差しでヴェラを捉え即答する。

「妹と俺の仲間だ」

「即答でいい答えだ。現時点でお前はその者達の為に力をつける。いずれは、その大切なものが増えるかもしれないし、減るかもしれないが、それは先の事だ。今は何よりもまず、力をつけそれを護れるようになれ！」

「・・・ああ」

「よし。じゃ、今から俺達は師匠と弟子だ。俺はヴェラ。よろしくな」

「俺は夜桜陵哉だ。よろしく」

2人で握手をしあう。だが、普通の握手とは違う。護る者の為に力をつける少年とその少年を強い人間にすると決めた男。互いに思いは違えど、しっかりと覚悟はできていた。

陵哉はこれから始まる修業の為に、今まで空腹の為に失った体力を取り戻すことに励んだ。ヴェラはその日、修業メニューを考えることに費やされた。

こうして、陵哉とヴェラは師弟になった。どんなことが待っているかも知らずに・・・

第32話 過去と忌水流 2

1年後 山奥

「ほらほら、もっと気合い入れて走れ！」

「・・・」

身体中に重りを巻きつけられ、険しい山道を走っていく陵哉。だが、表情は無表情。

この修行が始まってすぐにヴェラから「痛くても苦しくても表情には出すな・・・それで、相手はつけ上がる」と教えられた。

修行時には必ず何があっても無表情、冷静でいること・・・これがヴェラと陵哉の暗黙の了解だった。

たとえ怪我をしようが口から血を吐こうが表情には出さない、心を乱されない・・・でなければ死ぬ、それはヴェラが初日からずっと教えていることだった。

初日から徹底的に基礎体力と魔法の知識を教えることから始まった。さすが子供というべきか、知識に関しては教えたことをすぐに吸収していった。基礎体力の方は今行っている山登りを重りなしで、全速力で走っていても息を乱さないほどに成長していた。

そうこうしているうちに陵哉は頂上まで走りきった。膝に手を置いて肩で息をしている。

「よし、終了だ。」

・・・陵哉。よく頑張ったな、今ので基礎体力作りは終了だ。」

「はぁ・・・え？ それって・・・」

「これから、戦闘技術の修行に入っていくってことだ」

肩で息をしている陵哉にタオルを渡すヴェラが基礎体力訓練から戦闘技術面への修行に変えるという嬉しい知らせを教えられた。顔の汗を拭いた陵哉は顔を引き締め、次のヴェラの言葉を待っている。

そんな陵哉にヴェラは左肩を持ち少し力を入れて陵哉の肩を外した。

ゴキッ

「ッ・・・・・・・・」

「これからお前は脱臼や骨折を多くするだろう。だから、その時自分で治せるように今日はとことんお前を脱臼・骨折させる。脱臼が治せるようになれば次は骨折の治す修行に移る」

その後、脱臼・骨折の治し方をマスターするまで陵哉はヴェラから骨を外され・折られ続けた。
結果両方とも一時間近くで陵屋はマスターし、その日の修行は終了した。

夜 アパート／リビング

「腕に違和感はないか？」

「はい、師匠の治癒魔法でいつも通りです」

「それは良かった。ほれ、今日は修行のランクアップ祝いだ。どんどん食え」

「はい！」

修行を終えた2人は修業の時とは違うほのぼのした雰囲気で食事をしている。

今日の修行で陵哉の腕の骨に負担をかけた為、ヴェラは治癒魔法で治したのだが少し心配していた。

心配されている陵哉はテーブルの上に広がる御馳走を美味しそうに口の中に頬張っていた。

ヴェラと陵哉は、修行時は緊迫した雰囲気だが、それ以外では本当の家族のように仲良く過ごしていた。ご近所さんからは親バカヴェラと（子どもにしては）しっかり者陵哉として少し人気者になっている。

「師匠。一つ聞いてもいいですか？」

「ん？ 何だ。俺のわかる範囲なら答えてやるよ」

夕食の最中に陵哉はヴェラに質問する。これもいつもの光景で夕食時はヴェラと陵哉、お互いの親睦を深める為に質問をしている。

この夕食時の質問タイムのお陰で陵哉の薬品拒絶症の事を知った為、外出時ヴェラは陵哉に薬局や病院には近づかせないようにしている。

その他、陵哉のデバイスが8つある事やヴェラがコーヒー通な事や・
・etc

まあ、そんなこんなで質問タイムは出会った頃のヴェラと陵哉が打ち解ける要因の一つだった。

「何で、俺を弟子にしようと思ったんですか？」

「・・・その事が・・・まあ、いいだろう。だが、その話は夕食が終わったあとでもいいか？ 話が長いから飯が冷めちゃう」

「はい」

その後は他の話を交えながら楽しい夕食の一時を過ごした。

夕食を終えたヴェラと陵哉は食器を流れ作業で洗い、水気をふき取って食器棚に戻す。

食器を戻した2人はリビングのソファに腰掛け、ヴェラは先程の陵哉の質問を話し始めた。

「さて、さっきの質問だが・・・俺がお前を弟子にしようと思ったのは・・・単にお前を気に入ったからだ」

「・・・気に入る？」

「俺がお前を助けた翌朝。お前、ゼヘルで俺の首をとった事があつたろ。普通の奴なら、まず俺にデバイスを向けることすらできない・

・その前に俺がそいつにデバイスを向けているからな。

だが、お前は俺に悟られずゼヘルを俺の首にあてがった。これはお前が俺を抑え込んだという結果だ・・・ガキながらよく俺にあんな事が出来たと感心したぜ。

その結果のお陰でお前は俺に気に入られ弟子にした。簡単だろ？」

「師匠らしいですね」

「褒め言葉として受け取ろう」

陵哉を弟子にした理由は本当に簡単な事だった。しかし、（ヴェラは言っていないが）これは陵哉が未だ子どもだった事が関係していた。

普通の十代そこらの少年よりかは鍛え方次第ではいくらかでも伸びるからだ。

そして、陵哉は今まで一番気になっていた事をヴェラに聞いた。

「あの、師匠。俺はいつたい何を継ぐ弟子なんですか？」

「・・・俺がこれからの修行でお前に教えるものは、名を『忌水流』という」

「忌・・・水流？」

「そうだ。お前に一度だけ地球以外の歴史を教えた事があっただろ？」

「は、はい。確かすでに滅びたベルカの歴史だと・・・」

「そのベルカに魔法より前に現れた流派・・・それが忌水流だ。この忌水流はベルカ式魔法が現れるまでは王直属の護衛兵にしか扱われていなかったが、ベルカ式魔法が現れた後、忌水流は衰退していった。しかし、その王直属の護衛兵は忌水流を滅ぼさない為に他の惑星に移り細々と伝承していき、今俺がお前に忌水流を継承しようとしている」

ヴェラが陵哉を弟子にした時、何を継ぐ弟子になるのか全く聞かされていらなかった陵哉。ヴェラが少し覚悟をしたような顔で陵哉に継承する流派の名を言う。
古代ベルカ式魔法より以前の戦闘方法『忌水流』がどんな流派なのか陵哉は興味津津でヴェラの言葉を待っている。そのヴェラは真剣な顔で話を続ける。

「この忌水流は良く言えば『最強の流派』悪く言えば『冷徹な流派』として伝えられ続けている。」

忌水流の強みは初めの武器が不明という事だ・・・だから、継承されていく奴らは自分の一番扱いやすい武器を決めてから継承していく。お前は8つの武器を持っているから状況に応じて武器を使い分け、そして相手がその武器に慣れ始めればすぐさま違う武器で相手を翻弄するという戦法がとれる・・・と、すまない。脱線してしまったな。話を続けるぞ。

戦闘中は殆ど感情を殺した状態で戦う、そして相手の動きをパターンとして一つ一つ分析し隙を狙って攻撃する。これが忌水流の戦闘スタイルだ。

ここまで、忌水流の美点だけを話したが、次からは欠点を話す。戦闘中に一時的に力を向上させる為、布で筋肉を締め上げ常に力を入れた状態で戦闘をする事があるが、これは一歩間違えば肉体が崩壊しかねない程の戦闘術の為、これは最終手段として使うものが多い。

そして、これが最大の欠点だが・・・俺はさっき『戦闘中は殆ど感情を殺した状態で戦う』といったな？ これは簡潔に言えば肉親や親しい者と戦う時の状況に陥った時の為の対処方法だ。そして、殆どの継承者はこの状態で相手を殺してしまい、最悪の場合精神崩壊で二度と武器を持たないという状況に陥る事が稀にある。

これが忌水流だ・・・どうだ？ お前はこれを聞いて俺から忌水流を継承する為に修行をするか？ それとも忌水流以外で強くなるか？ どちらでも俺はお前を責めはしない」

忌水流の説明をするヴェラはどこかもの悲しい様な顔で話していた。それは、この話を聞いて陵哉が忌水流を毛嫌いし、それを扱うヴェラも嫌われるかもしれないと思っていたからだ。

陵哉と過ごした時間は1年ほどだが、ヴェラは本当の家族のように陵哉と接していた。その家族のような陵哉から嫌われるという恐怖は少なからずあった。

話し終えたヴェラは真剣なまなざしで陵哉を見つめ、陵哉の言葉を待った。少しの沈黙の後、陵哉は口を開いた。

「……そんなもんあの時 師匠と師弟の間柄になってから決まっています。俺は貴方の戦い方で強くなりたい。だから継承してください……俺に忌水流を！」

「……ふつ。いいだろう。お前に忌水流を継承しよう。」

お互い新たに絆を深め、どちらからでもなく握手を交わした。その眼にはどちらも迷いというものはなかった。

しかし、この絆が陵哉を苦しめるとは陵哉自身微塵も感じていなかった。

第33話 過去と忌水流 3（前書き）

申し訳ありません！！ 更新に3週間近く掛ってしまい本当に申し訳ありません！！！！！！

もう言い訳など使用がございません。ですが、こうして更新できたことをうれしく思いながらも申し訳ない気持ちが支配してしまします。

しかし、これからも更新していくのでどうか温かく見守ってくださうれしいです。

それでは、『魔法少女リリカルなのは blood elegant』
始まります。

第33話 過去と忌水流 3

5年後 山奥（修行場）

ガキン！ ガガガッ！！

「・・・・・・・・」

静かな森林に異質の音が響く。その中心にはお互いのデバイスを起動した陵哉とヴェラが模擬戦を行っていた。

陵哉はトーガを起動し、ヴェラは弓の様なデバイスで背中に矢が入っている筒を背負い、その矢で陵哉の攻撃を捌き続けている。

この模擬戦は昨年から取り入れられ、『忌水流の技をより実戦で扱えるように』という事で模擬戦を取り入れている。

ただ、ヴェラは模擬戦中には絶対に忌水流の技を使わない。忌水流の伝承方法は口伝で1回だけ言い、後は弟子がその口伝を元に独自に技として完成させる（勿論、模擬戦中ヴェラが陵哉に助言することは一切ない）。それが忌水流の伝承方法だ。

この伝承方法を陵哉は理に適っていると思っていた。独自の武器を扱うという事は、技も独自に改良しなければならない。なので、師と異なる武器で忌水流をそのまま受け継ぐと必ずどこかで隙が生ま

れ、敵に殺される。それを解決するには、技の大間かな概要を聞き、それから技を解読し自分独自の技にしてい。それができなければ忌水流を継承する資格がないという事だ。

これまで陵哉はゼヘル、レイ、ジリス、ガルダ、ライガー用の忌水流を完成させ、残りはトーガ、ドゥーガ、レクイエムの3つとなっている。今はトーガ用の忌水流を習得中で、ヴェラと模擬戦を行っている。

陵哉は隙を作る為、ヴェラに攻撃をし続け　ヴェラの顔面を狙って放った攻撃をヴェラはいとも容易くかわした。その瞬間、今まで防戦一方だったヴェラが至近距離　いや、零距离で弓に防御し続けていた矢を備え、発射態勢に入る。

「!!」

陵哉は腕を引っ込め後方へ跳び距離をとろうと　そこまで考えて、陵哉はその考えをゴミ箱に捨てた。腕を引っ込めた陵哉にヴェラの放った矢が襲う。狙ったのは頭部、当たれば非殺傷設定でも決定打になる。

「　　流し」

カーン！

しかし陵哉はその矢をトーガで軌道を逸らし、身体を低くしてヴェラの右側面へと回り込む。

そのまま、陵哉はヴェラの身体に自身の身体を捻り込むようにもう一步踏み込み、攻撃する為腕に力を込める。

陵哉の動きを無表情で見るヴェラに回避不可能の一撃を叩き込む！

シュッ

「ッ・・・」

しかしヴェラは霧の様に姿を消し、陵哉の攻撃は虚空を斬ることとなった。

陵哉は驚いたが、呆然とする事はなく直ぐその場から後方へ跳ぶ。

ドドドドッ！

後方へ跳んだ瞬間、さっきまで陵哉が立っていた場所に矢が4本地面に突き刺さっていた。

上空に視線を向けるとヴェラが次の矢を構えており、狙っている部位は陵哉の心臓部分。

確認した直後、ヴェラが矢を放った。当たれば確実に致命傷となる攻撃。

しかし、陵哉は着地した寸前で動けなかった。
放たれた矢は陵哉に向かって確実に近づき 地に突き刺さった。

「！？」

驚愕するヴェラだが、瞬時に幻影だという答えにたどり着く。だが、次の行動に反応できなかった。

陵哉はヴェラに考える時間を与えない様に、ヴェラの『両側面に鏡の如く現れた』。

「！！」

「みなちにきよつ
水面二鏡」

回避する時間すら与えない速度でヴェラの両脇に2人の陵哉の一撃が叩き込まれた。

ドガッ！ ヒュー・・・ ドゴッ！！

叫び声も痛む表情も見せず、ただ齒を思いっきり喰いしばって、地面に叩き落とされる。

2人の陵哉は双方共に実体で、ヴェラの身体の痛みがそれを訴えていた。

陵哉が地面に降りると、ヴェラが上半身だけを起こし、陵哉を見つめる。

「合格だ。これで6つ目だ」

「！！ はい。師匠、ありがとうございました」

先程までの緊迫した雰囲気ではなく、ほのぼのとした雰囲気に変わっていく。

陵哉がお礼と同時に下げた頭を上げると、ヴェラは立ち上がり近くに埋まっているマルタに腰掛け、横に置いてあったバッグから水筒を2本取り出し、その内の1本を陵哉に向かって投げる。

2人は水筒の蓋を開けて、中に入っているお茶を飲む。一口飲むと陵哉はバッグの中に水筒を戻し、修行に戻ろうとする。

「陵哉。ちょっといいか？」

「？ はい」

修行に戻ろうとした陵哉に、ヴェラからストップが掛かり陵哉はヴェラの横に埋まっているもう一つのマルタに腰掛ける。

最近のヴェラは、ただ無言で陵哉の修業を見るだけで口出しするとはほとんどない。こうして、修行に戻ろうとする陵哉を引き止める事はこれまで一度もなかった事だ。だから、陵哉は何か大事な話でもあるのかと思い、真剣な顔でヴェラをみる。

「最近、隣町で辻斬りっていうのが話題になっているだろう？」

「はい。僕らの町でもそんな話をよく聞きます」

「俺がミッドからここに来た理由はお前には話していなかったよな？」

「？ は、はい。あの何の話を」

初めヴェラは最近隣町で起きている事件、辻斬りを話した。この事件は一カ月前から発生していて、事件内容は隣町の住民が夜中に突然『斬られて』しまうという事だった。皆が殺傷事件ではなく辻斬りと呼ぶのはこういう事だ。しかしそれだけではなかった。メデアは公開していないが辻斬りで斬られた者が行方を眩ませるという事も噂されていた。救急車で運ばれていた被害者が突如起き上がり、自らの足で立ちその場から去っていく。そんなことが噂されていた。その事だと陵哉が頭で考えていると、ヴェラは突然話題を切り返してきた。辻斬りの事を話したかったのではないかと思っていた陵哉だったがヴェラの意図を図りかね、その意図を問おうとしたところにヴェラが口を開く。

「俺がここに来たのはあるロストロギアを確保する為、そのロストロギアが隣町の辻斬り事件を起こしていると思っている。」

そして、その予想が的中すれば俺はそれを確保しなければならぬのだが　　陵哉。お前、そのロストロギアと戦って見ないか？」

「・・・え？」

その口から出た言葉を、陵哉は一瞬、理解ができなかった。

いや、ヴェラがこんな事を言うのが信じられなかったと言った方が正しいのかもしれない。ヴェラは自分の仕事を人に手伝ってもらう事を頼むことはあっても、人に丸投げすることはしない人だと思っていた。

だが、今自分の耳に入ってきた言葉はヴェラ自身の仕事を陵哉に丸投げを意味する言葉だ。それを、陵哉は未だに信じられないといった様子だった。

「・・・戦闘経験のないお前に必要だと思ってな・・・やるのなら俺がロストログアと戦う。やらないのなら俺は何もしない。どうする？」

その言葉には偽りやふざけるという意図は含まれていなかった。

だから、余計に陵哉は混乱する。何もしないという事は、例えば陵哉が命の危機に陥っても助けることなく見殺しにするということだ。

ヴェラは自分の言葉は責任を持って護る男だと知っている陵哉にとっては、ヴェラは絶対に言動通り陵哉を救う事はない。故に陵哉はこの提案をやるか否かを迷っていた。

「・・・・・・・・・・少し、考えさせてください」

それだけ言うと、陵哉はマルタから立ち上がり森の奥へと消えていった。

ヴェラはその背中が森の奥へと消えるまで見つめ、自らもマルタから立ち上がり、街へ向かう為、山を下りて行った。

秩父市^{ちちぶし} 繁華街

山から下りると、ヴェラは逸早く自分たちが住んでいるここ秩父市のパトロールを開始した。

普通の生活を送っている時は極力魔力を抑えているが、このパトロールの時は必ずある程度の魔力を開放する。理由はヴェラの目的のロストロギアは、どうも斬った者を服従させるといふ厄介な能力を持っているらしい。その為この秩父市に斬られ服従させられた者が出歩いている可能性があり、その者は少なからずこちらに何かしらアクションを起こすと予測しているからだ。

だが、このパトロールを事件始まって以来続けているが一向にロストロギアがこちらに気付いた気配はない。

（・・・はあ、やっぱりまだこっちは来ていないのか？ もしくは海鳴市に向かって行動している・・・か）

丁度一年前に海鳴市から二度に亘って強力な魔力を感じさせる事件が起きた。魔力だけを言えば陵哉の全開にも匹敵するほどの魔力。ロストロギアがそれを狙っている可能性も否定しきれなかった。その為、ヴェラは少々焦っていた。海鳴市に向かうのならこちらは出遅れることは確実で、最悪の事態が起きる可能性があった。一か月も前から行動を起こしているのだ、もう海鳴市に着いている可能性もあり、いつ事件を起こしても不思議ではない。それにもし海鳴市に向かつていなくともこちらが隣町に行ってもすれ違いで秩父市に来る可能性もある。

そんな思考がグルグルといつまでも頭に空回りし、また迷宮へと駆り立て、少し海鳴市で事件を起こした連中に苛立ちを感じた。

（・・・やはり、あれしかないかな・・・陵哉はまだ忌水流を完成させていない武器が残っているが、今はそんな時間的余裕はもうないに等しい・・・なら、賭けに出るか・・・）

ヴェラは胸ポケットから紙を取り出す。その紙は二つ折りにされており、ヴェラはその紙を開く。

紙には一番上に『至急任務を終了させ、管理局に帰還せよ』という文字が書いてあり、管理局の印が押されていた。

第34話 過去と忌水流 4

翌朝 アパート

「おはようございます。師匠」

「ああ、おはよう」

部屋から出てきたヴェラにキッチンで朝食を作っている陵哉が挨拶をする。ヴェラは少し眠たそうな声で返す。陵哉はそれを少し珍しそうな目で眺め、すぐに朝食の調理を再開する。今日の朝食のメニューは焼き魚と味噌汁、出し巻き卵、漬物と和食の朝食となっている。

そんな中ヴェラはいつものペースで自分のマグカップにお気入りのコーヒーを淹れ、テレビを点けてニュース番組を見る。丁度、隣の映像が映っておりテロップには『辻斬り事件に又もや被害続出！ 被害数10を超える』という題で次々と過去の被害者・被害現場、そして今回の被害者をニュースキャスターが語っていた。その横には初老が立っていて、ニュースキャスターがいろいろと質問をしていた大方どこぞの専門家の教授だろうと思い2人は氣にとめることもなかった。

辻斬りのニュースが終わり次のニュースに移ろうとした時、陵哉がテーブルに朝食を置いた。

「師匠。朝食にしましょう」

「・・・そう、だな・・・ああ、そうしよう」

陵哉に話しかけられたヴェラが一瞬沈んだ顔になったように見えたが、またいつもの顔に戻る。そんなヴェラに陵哉は怪訝な目で見たがヴェラはもう食べ始めていた為、陵哉も朝食を食べ始めた。
2人とも何も喋らないまま食事続け、部屋の中は異様な雰囲気包まれていた。そして、全てを食べ終えたところで陵哉がその重い口を開く。

「師匠・・・俺・・・あの辻斬りのロストロギアと闘いたいです」

「・・・いいのか？ 俺は手出しをしない。つまりそれはお前が殺されそうになっても助けないという事だ・・・それでもお前はロストロギアと闘うか？」

「はい。どの道、いつかは師匠の手を借りずに1人で闘わなくてはいけない時期が来るはずです。ですから、この闘いは俺がその域に達するかどうかの試験だと思っていますから。」

それでは、俺は修行に行ってきます」

陵哉は昨日からずっと考え続けた結果をヴェラに報告した。それは死の確立の方が確実に高いが、陵哉の覚悟した目と声、そして決意した面持ちでいたが、ヴェラは不安要素をあえて提示した。しかし、陵哉は全くと言っていいほど動じずに受け答えをした。自らの未来を想像するかのように、そしてもっと強くなると誓うように・・・食器を流しの中に入れ、そのまま部屋を出ていく陵哉を静かに見送るヴェラが少し、もの悲しさがあるように見えたが、自分が気にすることではないと心の片隅に押し込み、修行場へと足を進めていった。

陵哉が出て行きヴェラはその場で少し考えた後、自室に戻り白紙の紙を取り出してそこにペンで文字を書き始めた。その顔は何かを決心した顔だった。

山奥（修行場）

ヒュッヒュ ヒュ！ ブオン！！

風を切るような音と共に太陽の光で輝く汗が宙を舞う。その原因の人物は両腕にトンファーを装備して、周りからは何をしているのか？と怪しまれる行動をしているが、当の本人は真剣に戦闘のイメージトレーニングをしている。

イメージトレーニングを行っている少年　　陵哉はこれを数時間、休憩なしで続けている。そして、イメージトレーニングの相手は陵哉の師、ヴェラである。

ヴェラが矢継ぎ早に矢を突き刺そうとする。陵哉はヴェラの目、矢の方向、自分の急所の位置を頭の中で分析的的確に避けていく。そして、ヴェラの矢が左腹部を捉え、そこを突き刺そうとする。

「　　流し」

ヴェラの矢をトンファーで弾き、足を滑らせてヴェラの左側面に回り込み、一撃を叩き込む！

ブオン！

大きな風を切る音を起こし、静止状態がしばらく続く。だが、その状態は陵哉がその場に座り込む音とともに消え失せる。荒い息遣い

に呼応するかのようにウェポンモードのドゥーガがリビディングモードへと変化し、興奮しているのか陵哉に慌てているかのように聞いている。

そんな姿を見て、やっぱりこいつは面白いなあと秘かに思っている陵哉。

「すげえよ主！　まだ数時間しか経ってねえのに俺の忌水流としての扱い方を前からわかってたみてえに動いていつて・・・！」

「ああ、流石に7つ目にも入ると身体が自然とドゥーガにあった闘い方を教えてくれるよ」

陵哉とドゥーガは、その後先程のイメージトレーニングでの悪い点を抜き出す会議を始めて、どうやったら改善できるのか？　どうすればもっと良い動きができるのか？　等を休憩がてら話し合っている。陵哉は注意点・改善点を持参したメモ帳に書き綴っていく。この方法はデバイスが変わっていくごとに毎行つ、いわば恒例会議の様なものになっている。

最後の注意点・改善点を書き終わったところで、ドゥーガがある事について聞いてきた。

「主。俺や他の奴らは主を好意的な感情を持っているから、ここまですべて順調に進んできたわけだけど・・・あいつ・・・『レクイエム』」

をどうやって制御するつもりなんだ？」

「・・・ふう、やっぱりそこなんだよなあ・・・まあ、制御つていうのはあんまり好きじゃないんだけどなあ・・・」

ドゥーガが言った今、最大の難関、レクイエムの事について議題が移り変わった。レクイエムは研究所を脱出して以来、レクイエムは念話を飛ばしても応答しない。それどころか起動すれば陵哉の身体を乗っ取るうとして、メンタル面を重点的に攻撃してくる。だが、そんなレクイエムを陵哉は手放そうとはしなかった。それはあの研究所から逃げ出した同士としてなのか、研究員を殺して自身を助けてくれた恩人としてなのか、或いはその両方なのか、とにかく陵哉はレクイエムを見捨てたりするつもりは毛頭なかった。しかし、現状の陵哉とレクイエムの間はお互いが全く干渉していない状態。ドゥーガはそれほどもないが、ゼヘル達に至ってはレクイエムを敵視している始末。何とかこの状態を打破したいと考えてはいるのだが、未だ考えも行動も起こせていない。

現状を整理すると、まずまずレクイエムとの和解は難しいように思えてきてしまい。どうしようと悩んで、また落ち込みというループがグルグルと廻りそうなので強制的に思考を断つことにする。

「正直言うと、今は全くレクイエムと和解する方法が思いつかないけど、1つだけ荒っぽい方法でなら考えがある」

「?・・・その方法って言うのは?」

「方法は
」

夕刻 アパート

「ただいま戻りました」

日も沈みかけた頃、ようやく帰ってきた陵哉は少々疲れているように感じられる。先程まで休憩一回きりで、その後ぶっ通しで修行を行っていた。自分でも少しやりすぎたかなと思いつつも、靴を脱いで中へと入っていく。

リビングに入ると中は真っ暗で電気が点いてなく、ヴェラの姿もなかった。少し変だと思い他の部屋も見てみたが、明りが漏れている事はなく、人の気配もなかった。念のため全ての部屋を調べてみたがヴェラの姿はなかった。

変だなと思いながらも、リビングの電気を点けてみると1枚の紙がテーブルの上に置いてあった。陵哉はそれを取って書いている内容を読む。

『日付が変わる0時に修行場に来い。少し早いが修行の最終段階に入る』

それと、今日は辻斬りのロストロギア搜索の為帰れない。夕食は1人で食べてくれ
ヴェラ』

「修行の最終段階？・・・どういうことだろ？ まだドウーガとレクイエムは合格をもらってないのに・・・」

不審に思いながらも何か考えあるんだろうと思い、頭の片隅に追いやると少し早い夕食を摂る事にした。日付が変わる0時に集合という事なので睡眠不足にならない様に早目に眠る為に、いつもの生活時間を縮小する。簡単に夕食を作り素早く食べて、風呂はシャワーだけを使って身体を洗い、手早く着替えてベッドに横になって眠る。今日の修行での疲れですぐに深い眠りに落ちて行った。

修行の最終段階がどんなものかも知らずに・・・

辺りが闇と静止に包まれる中、陵哉はバリアジャケットを展開し、修行の最終段階という事で、いつもより気合の入った状態で集合場所に到着する。辺りの気配を確認してみるがヴェラの気配はなく、まだ来ていないのだと判断する。ヴェラが来るまでの間、精神統一の為に眼を閉じる。勿論その間、周りの気配を逃さないよう全神経を集中させている。

そして、日付が変わる正に数秒前、正面から足音が聞こえてきた。普通の人間ならば、この静止状態でも聞き逃してしまうのではないかというほどの音だが、数年間で敏感になった様々な器官は、その音を聞き逃すことなく、脳へ情報を届けていく。

目を開けると、十数メートル先にヴェラの人影が見える。自分でも驚くぐらいにその姿をしつかりと認識できる。これもヴェラの修行のお陰だと心の底から思い知らされる。

ヴェラは陵哉の姿を確認すると、その口を開いた。

「陵哉。俺とお前、二人三脚でこの数年間を共に過ごし、力を与え、忌水流を伝承し続けてきた。そして今日、お前への忌水流の伝承が終わる・・・忌水流最後の継承の中で最も過酷なこの試練・・・お前はこれを超えれば一人前の忌水流継承者だ。そして、お前が忌水流を生かすも殺すも、変化させるも衰退させるも終わりにするも、お前が決める。

では、これから行う試練を言う。よく聞いておけ」

「はい！」

ヴェラがこれまで陵哉と過ごしてきた時間を振り返るように、そして陵哉の未来を想像しながら、一言一言にそれ以上の思いがあるかのように陵哉の心の中にあるような感情が流れ込んでくる。それは悲しみだったり、嬉しさだったり、寂しさだったり、期待だったり、他にもいろんな感情が流れ込んできて言葉では言い表せないような感情になってしまう。

そんな中でもお互い表情は無表情。互いに心の中でどんな事を思っているのかは伝わっていて、それ以上の表現は何も要らなかったからである。本当に普通の家族以上の絆を手に入れたように思えてきて、この人に出会えて本当によかったと心の奥底から思える。

数分の静止の中、ヴェラがその重い口を開く。だが、そこから出た言葉は陵哉にとっては最悪の言葉だった。

「
陵哉

俺と殺し合いをしろ」

第35話 過去と忌水流 5

「・・・え？」

呆然と突っ立ったまま、ヴェラの言った事を受け入れられずにいる陵哉。そんな陵哉を見ても全く動じず、無表情のまま佇むヴェラ。対立しあう2人、だが、陵哉の先程までの覚悟は消え失せ、ヴェラの姿に恐怖を覚え、後退り始める。ヴェラはそれでも無表情で一步步静かに陵哉を追う。

「そんな・・・こと・・・師匠と殺し合いをするなんて・・・
・・・できません！」

「お前に初めて忌水流を説明した時に言ったよな？ 『忌水流は感情を殺して闘う』それは『肉親や親しい者と戦う状況に陥った時の為の対処方法』だと。」

そして、これがそれに近づく第一歩・・・信頼してきた師を殺す事、又は闘えない身体にする事・・・これが忌水流継承者になる者の定め。踏み越えなければならぬ命と壁だ！」

やっと絞り出した言葉はヴェラの覚悟

そして忌水流の掟に反

する言葉だった。

しかし、ヴェラは聞く耳を持たず、陵哉を説得する事に専念し始める。ヴェラにとっても陵哉と殺し合いをする事は避けたいと強く願っていた。だが、時には私情を排除して現実と立ち向かわなければならぬ事をヴェラは知っているが、陵哉は6つの武器の忌水流を習得したと言っても、心身は未だに幼い。その為、自分が強く願えばこの嫌な出来事から目を背けることも可能だと思ってしまうている。

そんな陵哉の姿にヴェラは視線を落とし、表情を歪ませる。

「陵哉。俺を失望させないでくれ・・・この数年間。俺がお前に教え、伝えてきた事を無意味にしない為に・・・俺と闘え・・・」

「！！」

「！！」

その言い方は陵哉にとって卑怯な言葉に聞こえた。この数年間。ヴェラはいろいろな事を陵哉に教え、伝えてきた。それは忌水流だけの事ではなく、一般常識・魔法の使い方・デバイスの事・人との接し方・思いの伝え方、その他にも数え切れないほどの事を教え、伝えてくれた。そんなヴェラにこんな事を言われれば、陵哉にとって今までの人生の中で一番卑怯な言い方だった。

だが、それでも芯の部分は完全に覚悟が決まってしまう、これ以上逃げるのは無理だと自分自身気付かされていた。

「・・・わかりました・・・師匠からの伝承を無意味にさせない為にも・・・自分の大切なものを護る為にも・・・俺は、貴方と闘う！！　レイ・Set up」

《はっ！！》

バリアジャケットを纏い、両手に二丁の拳銃が握られる。開かれた目には確実な覚悟が宿っているのが窺えた。ヴェラは陵哉の目を確認すると一瞬だけ嬉しそうに笑って、すぐに陵哉と同じ覚悟した目でデバイスを起動させる。

「サウイス・Set up」

《All right》

左手にアーチリー型の弓、左の腰に矢と納める矢筒。以前背中に背負っていた矢と矢筒に比べると少し短めに圧縮されている。バリアジャケットは黒の袴を中心としたもので、左手から左胸部にかけてまで目立ってはいないが薄い鎧が装着されている。デバイスを起動させたヴェラは月明かりと日々の修行で何とか見える状態だった

が、暗闇に隠れたら確実に見失うほど目立った部分がない。中遠距離から攻撃する者にとってこれ以上のバリアジャケットはないと思わせるほど無駄がなく全て利点に回されているようなバリアジャケットだった。

お互い相手を観察している状況が続き、どういう行動をするのか、何処が急所なのかを頭の中でシミュレーションをしている。

そして、その膠着状態から脱したのは 陵哉とヴェラ。同時だった。

「紙流」
しりゅう

「水面二鏡」
みなもにきょう

ヒュッ カッ！

ドドン！！ バキン！！！！

一瞬で陵哉との距離 10m弱 をほぼ零距离にまで縮め、間髪入れず既に構えていた矢を放つ。しかし、陵哉は霧の如く消え去り、矢は木の株に突き刺さる。陵哉はヴェラの両側面でレイを構える。左脇腹と右胸を狙って撃った、その魔力弾はヴェラのシールドに阻まれ消滅する。

瞬間、陵哉の頬に一筋の光が掠った。陵哉は内心、少々驚いたが表情には出さず、瞬時にその場から離れ、何が起きたのかを整理する。先程飛んできた攻撃はヴェラからではなく、陵哉が水面二鏡を『使う前に立っていた方向』から飛んできた。それから察するにヴェラが放って木の株に突き刺さった矢がこちらに飛んできたと推測するのにそう時間は掛からなかった。自分の頬に掠った物を理解した瞬間、また光の矢が飛んできた。陵哉は光の矢の軌道を読むと、瞬時に最小限の動きで避け、銃口から魔力弾を放ち、光の矢を碎きバラバラにする。

「・・・惜しいな」

「?・・・!!」

ヒュヒュヒュヒュ!!

光の矢が碎け欠片になると、その碎けた欠片はまるで意志を持っているかのように、変幻自在に動き陵哉へと向かってくる。だが、陵哉は別段慌てた様子もなく冷静に頭の中で最良の行動を考え、実行に移す為、レイを構える。

「カートリッジロード」

《Road Cartridge》

ガシャシャン！！

葉莢が2発飛び、レイに与える魔力を上昇させ、光の矢達をギリギリのラインまで引き寄せる。

そして、残り10cmの地点で陵哉は『身体を後ろに倒した』

標的を通り過ぎた光の矢達は一時急停止し、標的を探す。陵哉は背中が地に付くと、銃口は真上に向けられ、迷わず両方の引き金を引く。

「ドライト」

ドオオン 《ゴアアアア！！》

放たれた2つの魔力弾は、それぞれ8つの龍に分かれ、計16の龍となつて光の矢達に向かつていく。一時停止状態のままでいた光の矢達は16の龍が喰い尽し、爆破する。それは、光の矢達の塵がなくなるまで続いた。

光の矢が完全になくなると、陵哉はすぐに起き上がり辺りを注意深く観察する。ヴェラの姿はなくなっており、魔力も感じずどこにいるかわからない。先程の光の矢を排除する間に、姿を消したようである。陵哉は姿を消した事自体はわかつていたがどこに隠れたかまでは把握できず、辺りをより一層警戒し、魔力の一片も見逃さないように五感すべてを使って探す。

時間にして僅か一分弱、陵哉は異変に気付き横へと飛ぶと陵哉の立っていた丁度心臓部を中心に、横一線小さな台風が通過し、そのまゝ後ろの木々を風圧で薙ぎ倒していく。陵哉は台風が通過した瞬間、軌道を読み発射元に魔力弾を撃つ。撃った瞬間、葉が擦れる音と月明かりに照らされてできた影を確認すると、陵哉は影の発生源に目を向ける。

目を向けた先には、満月を背後に矢を構えるヴェラの姿がはっきりと見える。

「レイ ランチャーモード 及びカートリッジロード」

《 Launcher Mode Road Cartridge
e》

ヴェラに倣うように、陵哉もレイを変形させて構える。BM-30を一本抜き出して小型にして1mほどで、トリガーの少し上にベルトリンクで連結されたカートリッジを装備している。

レイを肩に担ぎ、銃口をヴェラへと照準を合わせ、3発カートリッジを装填する。ヴェラはそれを見て構えている矢に魔力を流し込み、圧縮させる。

そして、お互い同時に攻撃を放った。

「エンプティネス・ショット!!」

「コンプレッション・アロー!!」

バゴン! ヒュッ

ドゴーーーーン!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

町内全土に響き渡るほどの爆発音だったが、結界のお陰で爆発音は結界内部だけに響き渡り、その爆発音と共に煙が充満し、視界が利かなくなる。

ヴェラは気配を探る為、目を瞑って自身の間合いをギリギリまで狭め、その範囲を探る。

すると、前方に一つ気配を発見した。ヴェラは一瞬で矢を抜き、弓を引き、放った。

カーン！

直撃はした。しかし、人の身体に突き刺さる音ではなく、硬い金属に当たる音だった。放った矢が生み出した風で、矢が通過した所だけ煙が晴れ、直撃した物が見えた。

「！！」

ヴェラの瞳に映っていた物は、ランチャーモードのレイだった。急いで、状況整理をしようとしていたヴェラのもとに、ヴェラが探していた気配が現れる。

それを感じ取ったヴェラは、防御態勢に入ろうと行動に出る。

「紙流」

「!」

ザシュザシュ！ ドシュ

しかし、行動しようとしたヴェラは身体を反転させることしかできなかった。陵哉はゼヘルで、ヴェラの右腕と右足の腱を斬り、腹部にゼヘルを突き刺した。ヴェラの上がついていた右腕は重力に従って垂れ下がり、傷口からは止めどなく血が溢れている。

陵哉は無表情のまま、そしてヴェラの腹部にゼヘルを突き刺したまま、全く動かない。

お互い、沈黙のまま何十秒が続いた後、ヴェラが口角を上げた。

「くく……くく……くく……くく……はあ……..
陵哉……よく頑張ったな……お前の、勝ちだよ……」

「師……匠……..
……ありがとう……..
……ごさいました……..
」

ヴェラは言葉を発すると共に陵哉の頭に左手をポンツと乗せて撫でる。陵哉は、ヴェラの言葉、頭に乗せられたヴェラの左手の温もり、そして、今までの生活と全ての事に感謝し、涙を流しながらヴェラにお礼を述べた。

たった今、陵哉は忌水流継承者となった。陵哉の未来は、今大きく変わった。忌水流を扱って、大切な者を護る力か・・・もしくは、破壊をもたらす力か・・・それはわからない。しかし、陵哉はこれから、幾人もの人と出会うだろう。その人たちは陵哉を受け入れてくれるかどうかは別として、陵哉は人と接する事に余裕ができるとヴェラは思った。今まで陵哉は極力、人とは拘らないように生きていた。それは、自分を異物と見るような、蔑むような、そんな目を向けられてきた。陵哉にとって人と接する事はメンタル面をとてもし、普通の人よりも何倍も疲労していた。けれど、力をもった今なら、人と接する事も　いや、あらゆることにも余裕を持つてやれる。ヴェラは陵哉との生活を思い出しながら、改めて陵哉の幸せな未来を願った。

「陵哉・・・一つ、俺からの頼みを聞いてもらえるか？」

「・・・はい・・・」

「俺のよ　　」

ビキッ！！！！！

「！！！！」

陵哉の頭を撫でながらヴェラが優しい笑みを浮かべて、陵哉に頼み事を言おうとした瞬間、この区域を覆っていた結界全てにひび割れが生じた。

この結界はヴェラが設置したもので、設定した時間になると自然に消えていく仕組みになっている・・・しかし、今はまだその時間には至っていない。まして、こうしてひび割れが生じることは絶対にあり得ない。

だから、考えられる事は一つ。この区域に侵入者が現れたという事だ。

バキン！！！！！！！！

そして、結界がひび割れた数秒の後に、全ての結界が砕け散る。陵哉はすぐにゼヘルをヴェラの身体から抜き、ゼヘルの能力でヴェラの痛覚を奪って、近くの茂みにヴェラと一緒に隠れた。陵哉はレイ

を自分の身体に戻した後、魔力と気配をヴェラの分まで隠し、ヴェラは自分の傷の手当てを行う。結界を破壊させた敵の方を探るように陵哉は地面に耳を当て敵の足音を聞く。敵は段々と足音が段々と此方に近づいているようだったが、その足音の数が異常だった。少なくとも十数人は此方に向かって歩いてきていた。

勿論、陵哉とヴェラはここに来る事を誰にも教えていないし、付けられている事もない。第一、この地域の者にあの結界を破壊する魔力を持った者などいない。ある一つを除いて……

「ククク……隠れているのはわかっている。この場所を荒れ地にしたくなければさっさと出てこい」

根が腐ったような濁った声で、陵哉とヴェラに警告する異様な人影。よく見ると人型の骸骨、そして骨が見えるギリギリのラインで黒の肉体が埋められていて、右手に深紅の刀を持っている。しかし、その右腕だけ赤い鎧を纏っていて、何か禍々しい魔力を感じられる。陵哉が相手を観察していると、治療しているヴェラが口を開いた。

「陵哉……アイツが俺の今回の任務目標ロストロギア『魂喰』だ」

「魂喰？」

「そうだ・・・魂喰は斬った者の魂を刀に閉じ込め、それを魔力に転換する。斬られた者は・・・いや、斬られた肉体は魂喰に支配され、死ぬまで自由勝手に使われる。例えば魂喰を倒したとしても、その支配からは逃れられない。後ろにいる奴らは魂喰の操り人形・・・もう、二度と助からない・・・」

ヴェラの説明が終わったところで、陵哉は後ろにいる人たちを見た。皆、生気など籠っていない目をして・・・いや、なにも籠っていない目をして魂喰を見つめている。ヴェラの言うとおりもう助からないような気がする。

陵哉は目を瞑って深呼吸を1、2回する。再び目を開けると覚悟の籠った目で、ヴェラを見る。

「では、行ってきます」

「ああ、必ず・・・勝って生きろ」

「はい！」

陵哉は立ち上がると、ゼヘルを握り直し、ロストログア：魂喰の前に立ち塞がる。

魂喰はそれに気付くと、ニヤリと口角を上げて不気味に笑う。それ

と共に威嚇をするように、禍々しい黒紅の魔力を陵哉へと放つ。陵哉もそれに倣うように藍色の魔力を魂喰へと放つ。数秒の後、2人はどちらからでもなく、魔力を抑える。

「夜桜陵哉」

「ほう・・・小童のくせにそこそこ魔力があるようだな・・・我が魂喰の一片とさせてやろう」

そして、この両者の戦いの幕が、今開けた。

第36話 過去と忌水流 6

ガキン！！ ガガガッ！！

ゼヘルと魂喰が接触し、激しい音と火花が飛び散る。陵哉は無表情で、魂喰は不気味な笑みを浮かべたまま戦闘を行っている。魂喰に斬られた者たちは、突っ立っているだけで何か異様に感じる。陵哉は不気味に感じながらも、彼らの事もしっかり警戒している。

そんな異様な場の中で、陵哉は魂喰を弾き右腕を狙って攻撃するが、魂喰の左拳がゼヘルの鎬部分を殴り、軌道を逸らして回避する。かわされた瞬間に、陵哉は右足に魔力を集中させ、下段からの一線を放つ。さすがにそれはかわせないと判断したのか、魂喰はダメージを最小限に抑える為に魔力を纏い後方へ跳ぶ。瞬間、一線が魂喰の肋骨に直撃し、空中に蹴り上げられる。だが、ダメージが最小限だった為、空中で身体を一回転して地面に着地する。

陵哉は着地した瞬間の魂喰に追加攻撃はしなかった。理由としては、相手の力量・能力などをまだ完全に把握していない為、迂闊な行動を避けているからだ。

「ククク。小童と侮っていたが、存外できるではないか」

「・・・」

陵哉は魂喰の軽口に答えず、無言でゼヘルを構える。それに倣うように魂喰も自身の刀を構える。

ヴェラも心配そうに、陵哉と魂喰の戦いを見続けている。陵哉と魂喰は、お互い先程の攻防は様子見で全力を出してなく、最低限の魔力しか使っていない。しかし、陵哉はそれだけではない。先程のヴェラとの一戦での疲労もある為、最低限の動きで魂喰と闘い、同時進行で体力と魔力の回復を徐々に行っている。そして静寂の中、初めに仕掛けたのは魂喰からだった。

「・・・！」

「！？」

ドゴン！ ガキン！！

突如、地面から赤い刀身が現れ、陵哉に斬りかかってきたが、寸の

所でゼヘルを使って防御する。しかし勢いは止まらず陵哉は空中に押し飛ばされ、ゼヘルは当たった衝撃で振動して陵哉の握力を低下させ遙か後方の地面に突き刺さった。それを見逃さず・・・いや、狙っていたのか魂喰は、陵哉が飛ばされた直後、一瞬にして陵哉の目の前に現れ、刀を振り上げる。

「!？」

「終わりだ」

《主!!》

地面に突き刺さったゼヘルがリビングモードで死神の姿になって陵哉を助ける為、魂喰に向かって突進するが、ゼヘルの突進スピードでは確実に手遅れだった。そして、魂喰は刀を握る力を一層強め、一気に振り下ろす。

ズガッ!!

「ぬっ!?!」

「ぐ……がッ!」

魂喰の刀は陵哉の左肩を斬ったが、陵哉は魔力を左肩に集束させ、刀の進行を軽減させた。そのお陰で、刀が心臓を傷つけることはなく、魂喰は驚いた顔と声を表に出す。陵哉は口から少量吐血したが、それだけで陵哉は顔を無表情に戻し、魂喰を右足で蹴り飛ばす。陵哉からの反撃は予想していなかった為、魂喰は防御する時間もなく、まともに攻撃を受けて林の中へと飛ばされていく。蹴った魂喰を一瞬の足場にして体勢を立て直した陵哉は、地面に上手く着地する。突進していたゼヘルがブレーキを掛けて、陵哉のそばへと近づく。

《主!! 申し訳ありません》

「ゼヘル、そんな事は後にしろ! ウェポンモード!」

《weapon mode》

ガシャン！！

謝罪するゼヘルを一喝して、陵哉の両手に大鎌が戻る。斬られた左肩から血が流れているが、微塵も気にしない陵哉にゼヘルは変な違和感を覚えていた。どんな状況でも陵哉は大きな傷ができれば止血を行っていた。ヴェラとの模擬戦でもそのような傷ができれば、例え止血のできない状況でも必ずその時間を作り、止血を行っていた。それなのに、今回は全くその様子を見せない。その事にゼヘルは違和感を消せずにした。が、その違和感を完全に消さないといけない事になった。

「はあああ・・・ククククク　　ああ・・・何百年ぶりだ、この感覚は・・・ククククク」

「・・・」

魂喰が突然不気味に笑い出し独り言を囁いている姿を、陵哉は不気味に感じて・・・いや、魂喰の魔力そのものを不気味に感じて、ゼヘルを握る手がより一層強まる。陵哉にとってこの戦闘は忌水流を継承してから初めての戦闘、それなのに今までの魂喰との戦いで相手に恐怖する事はあるが、それで身体が委縮することはなかった。

ヴェラとの模擬戦が、どれだけ実戦に近かったのかという事を陵哉は今、身をもって感じていた。

その間にも、魂喰は不気味に笑っていたが、一步一步陵哉に向かって歩いている。陵哉も魂喰が近づく度に警戒を強めている。

そして、陵哉と魂喰の距離が20mを切った時、魂喰が驚異的なスピードで走ってくる。

「・・・ッ！」

「はぁ!!」

ガキン!!

ゼヘルの刃と魂喰の刃がぶつかり合い火花が散る。そのままお互い一撃も譲らないと言う様な、刃がぶつかり合う音と火花が飛び散る光景と月明かりに照らされ反射する刃の一線とが混ざり合って一種の剣劇かと思う光景が続いていく。ゼヘルは魂喰と違ってリーチが長すぎる為捌ききれない部分があるはずなのだが、陵哉はゼヘルの柄や鎧などいろんなところで魂喰の刃を捌き、反撃を繰り返している。

何分か小競り合いが続いた後、魂喰が大振りの一撃を陵哉に振り下

ろす。

ガキン！！ スッ

「！？」

「 流し」

魂喰の攻撃を川の流れの様に受け流し、魂喰の身体に自分の身体を滑り込ませる。その勢いを殺さず、ゼヘルを振りかざし、魂喰の首に狙いを定め横薙ぎの一線を振り切る。

そんな危機迫る状況に陥っているにも関わらず、魂喰はニタニタと不気味な笑みを浮かべている。そして、陵哉は魂喰が笑っているわけに気付かされた。

ヒュ ピタッ

「・・・そういう事が・・・お前が笑っていたわけは・・・」

「ククク・・・如何にも、お前はもう我に指一本触れることはできんわ・・・」

陵哉の目の前に移っていたのは、魂喰に斬られた者達の中の一人が、ゼヘルの進行を遮るように身を盾にして魂喰を護っていた。その眼には、光もなくどんな感情をしているのか、わからない。

陵哉はすぐにその場から後方に跳び、今闘っている場所の全体を確認する。魂喰がいる場所、魂喰に斬られた者達と魂喰との距離、月明かりに照らされていない死角の場所などを冷静に確認し頭の中に入れていく。

そして、確認し終わった直後に魂喰が動く。

「よそ見をしていていいのかぁ!!」

「・・・」

ガキン!!
ガガガ!!!!

鍔迫り合いになり、お互い全体重を自らの武器に押し付け合う。この間、魂喰に斬られた者達は陵哉を邪魔する事はなく、陵哉はそれを確認するとゼヘルにより一層力を込めた。

しかし、陵哉の身長と魂喰の身長は頭二つ分もの差があり、この物理的な問題は魂喰に味方した。

ガッ！ ドガ！！

「・・・」

「ククク・・・もう少し成長していれば、まだ粘れたかもしれないかな・・・」

魂喰のひと押しに、陵哉は簡単に倒され仰向けの状態で魂喰の刀を受け止めている。重力に従っている分先ほどと同じ力でも、より強く押し付けられる。それでも陵哉は、諦めないという感情を身体で示すかのように、魂喰の力に抗っている。

《キエエ！》

（？・・・ガルーダ？）

魂喰に抗っていると、突如ガルーダが陵哉に念話で話しかけてきた。内容は陵哉にユニゾンをする許可がほしい、とのことだった。ガルーダの意図を計りかねたが、今はそれに疑問を感じるところではないと判断し、ユニゾンすることを許可する。

キイイイン　　バン！！

「ッ！！」

[illegible]

ブオン！！ ドガッ！！ ドザア
バチン！！！！

「はあ、はあ、はあ……」

ガルードとユニゾンして魂喰を見た瞬間、何十もの人間の魂が見え、苦しむ者、正気を失い言葉すら失った者、助けを求める者、絶叫する者、死を求める者……幾十、幾百もの感情が頭の中に流れ込む。感覚は、陵哉の冷静さを削りとった。焦った様子で魂喰を蹴り飛ばした後、急いでガルードとのユニゾンを斬り離れた。

荒い息を吐く中、陵哉は必死に冷静さを取り戻そうとする為、先程頭に流れ込んできたものを整理する。

ヴェラは、魂喰は斬った者の魂を魔力に変換すると言っていた。しかし、あれは魔力というよりかは怨念に近いものだった。確かに魔力を感じた・・・いや、魔力そのものだったが、そこから声と気配を感じた。斬られた者達の意志を持ったまま魔力に変換され、永遠に・・・魂喰が破壊されない限りずっと苦しみ続けると言う事。それが陵哉には少しだけだが、気持ちが悪かったように思えた。あの研究所にいた頃、陵哉は自分の意志とは関係なく苦痛を与えられ、何度も何度も意識を失った。その度に苦痛で目が覚め、また意識を失い・・・その繰り返しで、その苦痛がもう永遠に続くものだと思っていた。しかし、その苦痛が自分は8度目でようやく終わった。13人もの命と引き換えに・・・この魂喰に斬られた人たちは自分と同類だと感じられた。ただ普通に生活がしたいだけなのに意味のわからないことで、苦痛を与えられ、いつまで続くかわからない苦痛に今も苦しんでいる。だからだろうか、陵哉はこの人たちを心の底から『救いたい』と思ったのだ。

「ゼヘル」

《Road Cartridge》

ガシャシャシャン！！

何か考えを思いついたのか、カートリッジを3発ゼヘルに装填する。そして、すぐに腰を深く落とし左足をひいて構える。既に立ち上がっていた魂喰は攻撃に備えるため、腰を浅く落として構える。陵哉は左足に魔力を送り込む。魂喰はそれで、跳ぶ力と魔力を合わせて突進する気だと思い、陵哉が間合いに入った瞬間を狙うおうと自分の攻撃範囲をしっかりと確認する。

「紙流」

バツ！

そして、陵哉は地面を蹴るように、跳ぶ力と魔力で魂喰に向かっていく。かなりの突進力で、普通の魔導師なら確実に焦って容易く斬られるだろう。

しかし、魂喰は予想通りという顔で不気味に笑い、刀を陵哉が間合いに入った瞬間に振り下ろした。

ヒュ

カッ

「ッ!？」

しかしそれは虚空を斬り、刀は深く地面に突き刺さった。魂喰は刀を見つめていた目を前に持つていくと、ゼヘルを振り上げた陵哉の姿が映った。

魂喰はそれで今さっきの出来事を理解した。確かに陵哉は加速の為に左足に魔力を溜めて魂喰の間合いに入った。しかし、陵哉が加速に使った魔力は簡単に言うところ左足に少量の魔力を残して、使った。そして、魂喰の間合いに入ってから一瞬より短い時間で、左足に残してあった魔力を使って後方に跳んで魂喰の間合いから逃れ、今ゼヘルを振り上げている。

そんな思いつく事は簡単な事でも、実際行つとかなりの難易度と危険を伴う事を陵哉は、いとも容易くやってのけたのだ。当然、魂喰にとつて気持ちの良いものではないが、今はそんな事を考えている場合ではなかった。

「くっ!」

急いで刀を抜こうとしている為、無駄な力が入って思うように抜けなくなっている。しかしそれは数秒の事、力任せに抜こうとすれば時間はかかっても抜けるのだ。だが、今は、その数秒が魂喰の命取りになった。

「ツイン・ディバイド」

「！！」

ブオン！！ カッ！！

風が斬る音が聞こえると同時に、魂喰の目は異様な光景を捉えた。なんと、陵哉は魂喰の身体ではなく刀の方を斬ったのだ。確かに刀の方が本体なのだから、此方の方を攻撃するのは当たり前なのだが、魂喰が異様だと思っているのはそんなことではない。ゼヘルの刀身が魂喰の刀身を『すり抜けて』地面に刺さっているのだ。

陵哉の意図を計りかねた魂喰だが、とにかく今自分には何の異変も起こっていないという事を喜ぼうとした。その時だった。魂喰全体から禍々しい黒紅の魔力が一部、魂喰自身が斬った人間達にヨロヨロと向かっていく。残りの魔力は同じくヨロヨロと月明かりに照らされた夜空に向かって揺蕩たゆたっていく。

それが今まで斬って、自分の魔力の糧としていた魂だと瞬時に気がついた魂喰だが、成すすべなく全ての魔力・・・いや、魂は、魂喰の手の届かない場所へと消えていった。

「おのれえ・・・貴様あああああああ！！！！！！！！！！」

ドウッ！！

「・・・」

突如、怒り狂った魂喰から先ほどよりも濃く禍々しい黒紅の魔力を陵哉に向かって飛ばす。しかし、先程よりも魔力が弱まっているようにその量は圧倒的に小さい為、陵哉は全くと言っていいほど動じていなかった。

そして、魂喰がその魔力を放ったのを確認すると、陵哉は目を閉じて深呼吸をする。再び開かれた目には相手を殺すという感情しか残っていないような目だった。

「ゼヘル。モードリリース」

《!？ 主！ なん 》

突然、ゼヘルをリリースし自らの身体へと戻した。魂喰はそれを確認した瞬間、突進でもするかのように驚異のスピードで、陵哉へと向かっていく。

しかし、陵哉はまたも動じず軽く握った右腕を魂喰に向かって突き出す。すると、傷口と辺りに飛び散った大量の『血』が陵哉の右手に集まっていく。

「レクイエム set up!」

《・・・》

ガシャン ガシャシャシャシャ！！！！

陵哉の右手に漆黒の剣が現れ、瞬時にカートリッジを装填する。そ

の数 20発。

陵哉のデバイスのカートリッジシステムは、普通のデバイスのカートリッジシステムの約5倍。つまり、今のカートリッジの装填数を普通のデバイスに変換させると、カートリッジ100発分。普通の魔導師とデバイスなら身体がその魔力に耐えきれずに壊れ、デバイスなら簡単に碎け散るだろう。

だが、陵哉とレクイエムにはどこも変わった雰囲気はない。いや、一つだけ変わったところがある。膨大な、それも海の様な底知れぬ魔力量をレクイエムに注いでいる。一瞬、その量に怯んだ魂喰だが、スピードを緩めることなく陵哉へと向かって突撃する。

そして、魂喰と陵哉はお互いがお互いの攻撃可能範囲に入った。最初に動いたのは 刀だった。

「ぜつとうしゅう絶刀収！！！」

ブオン！！

自分の間合いに陵哉が入った瞬間に、刀に溜め込んでいた魔力を少量だけブースト変わりに応用し、残りを攻撃用に転用する。

そして、あと少しで陵哉の顔面を斬る直前に 剣が動いた。

ガキン！！ ヒュンヒュンヒュン グサ！！

「！！！」

「きょくくしゅう恐黒終斬」

ズバツ！！

「おぐツ！！！」

迫ってくる刀を弾き飛ばして、遙か後方の地面に突き刺さる。魂喰はそれに驚愕するが、その時間すらも陵哉は一瞬で終わらせた。カートリッジで上昇させた魔力を全てレクイエムへと送り込み、暗黒の一線を放つ。魂喰は鳩尾の部分から真二つに斬られ、痛みに耐える。しかし、すぐに魂喰は痛みとは別の異様な感覚を肌で感じる。

シュウウウ　グオオオオオオ！！

「な．．．なんだ、これはああああああああ！！！！！！！！」

「今までお前が斬った人たちが味わった苦しみ．．．お前も味わわせてやる」

魂喰の斬られた部分からブラックホールの様な黒い円が出来て、それが少しずつ魂喰を飲みこんでいく。得体のしれない感覚に恐怖する魂喰に、陵哉は冷たく言い放つ。

ブラックホールはどんどん魂喰の身体を飲みこんでいき、胸辺りに来たところで魂喰は憎悪の全てを陵哉にぶつけるかのように睨みつける。

「このままで．．．終わらせは．．．せん！！！！」

ガッ!!

「!？」

魂喰は右腕で陵哉の腕を掴んで、最後の力を振り絞るかのように右手に魔力を注ぎ込んでいく。何をするのかはわからないが少なくとも自分に利益が及ぶ事ではないと確定させ、魂喰の右手をはがす為に魂喰の右手首を掴んだ。

その瞬間

キイイイン

「!!! まさか、転移魔法!？」

「ククク、もう間に合わん!!!」

「陵哉!!」

魂喰が掴んでいる陵哉の腕から黒紅の魔力が広がっていく。陵哉は一瞬で、魂喰がどんな魔法を使ってくるのか判明したが、もう何をしても手遅れの状態だった。魂喰はこの状況を愉快そうに、最後の最後にしてやったという満足そうな顔で笑っている。今まで茂みに隠れて見護っていたヴェラが木の株に背中を預けながら、陵哉を救いたいと言う表情をしながら自分の動かない右腕と右足を呪っている。

そして、黒紅の魔力は陵哉の身体を包みこんで、残っている陵哉の身体はもう首から上だけだった。しかし、それでも陵哉は抗おうとヴェラに顔を向ける。

「師匠!! いつかまた絶対会いましょう!! 師匠が言えなかった言葉、俺絶対聞きに来ます!!」

「・・・ああ、わかった。絶対に生きて俺の所に帰って来い!!」

「はい!!」

キイイイイン バシユン!!

シュウウウン バコ！！

陵哉とヴェラは涙ぐみながら、お互い心に刻むように声を張り上げて言っていた。黒紅は陵哉の身体を全て飲み込むと、夜空に向かつて一線の光を放って細々と徐々に消えていった。陵哉が消えたと同時に魂喰も闇の中に吞まれて、その場にはヴェラと数人の辻斬り事件の被害者、そして中心部分から真二つに折れた魂喰だけが残っていた。

新暦0077年 管理局本部 執務長官室

室内が静止に包まれ、注がれていたコーヒーからは湯気が出る事はなくすっかり冷めてしまっている。

フェイトはヴェラと陵哉の過去話を、横やりを入れることなく黙って聞いていた。陵哉と出会った時、陵哉の覚悟、陵哉の大切なもの、陵哉の初めての实战・・・いろんな話を聞いて、陵哉の事が少しわかったような気がした。

ヴェラはすっかり冷めたコーヒーを一気に飲んで、話を続けた。

「まあ、その後。倒れた一般人を治療して、折れた魂喰を回収してすぐにミッドに戻った。正直、これでも提督だったんだが怪我と任

務期間が長すぎた為、執務長官に落ちた。

だから、お前も気をつけろよ。どんな事で落とされるかわからんからな」

「あ、はい」

フェイトもコーヒーを飲んで、ヴェラの話に相槌を打った。陵哉が戻ってくる気配はなく、まだ資料を探しているのか、もしくはどこかで油を売っているのか・・・まあ、そんな事よりも、フェイトはヴェラの話に小さな引っ掛かりを感じていたからだ。そして、それが何なのか、もうフェイトの頭の中では答えが出ていた。

（ヴェラ執務長官と佳奈多の陵哉の話の時期が合わない）

佳奈多の話は陵哉と海鳴市で密かに会っていたという話で、自分が8才の時に陵哉は海鳴市から離れて行った、という話だった。しかし、ヴェラの話を聞くとそんなことは実際には、あり得ない話だった。陵哉がヴェラと会ったのは陵哉が5才の時、それから6年間ずっと陵哉と共に生活をしていた提督のヴェラが、佳奈多と密会していた陵哉に気付かないはずはない。ましてや気付いていて、見て見ぬふりをする人物ではないとフェイト自身もわかりきっていた。ずっと難しい顔をしているフェイトに、突然、頭の上に何か置かれた様な感覚がした。フェイトは一端思考を切り、置かれている手の

人物を確認するため顔を上に向けた。

「よっ！　んな顔してたら前の人とおんなじように一生結婚できねえぞ」

「なっ！？　戻って来るなりそんな言い方はないでしょ！？」

フェイトの反応に戻ってきた陵哉はくすつと無邪気に笑って、フェイトの頭の上に置いていた手をどけた。先程まで話題の中心となっていた人物が現れると何故か自分が悪い事をしたかのような感覚に陥ってしまう。

陵哉はすぐにヴェラの所まで歩いて取ってきた資料を渡す。

「サンキュー。にしてもずいぶん遅かったな。何かあったのか？」

「資料室。俺が入った途端雪崩のように崩れまして・・・通りかかった局員と一緒に片付けをしていた・・・それだけです」

「成程、そういう事か。」

さて、取りあえず、これはお前が持つとけ。後必要な物はあゝっと・・・」

ヴェラは陵哉から資料を受け取ると、さり気無く封筒の中から一枚の紙を陵哉に渡して、立ち上がると自分の本棚へと足を進めていった。

「ってちよつと待て！！ あんた何する気だよ！？」

「あ？ ああ、そついや言ってなかったっけ・・・これ、お前の入局試験の資料。一応、強哉を追うのであればこっちの方が役に立つかと思ってな。給料出るし、寝床食事もつくし、フェイト執務官と同じ職場だし・・・」

「うゝん。まあ、あんたが取り計らってくれたんだ。俺は別に異論はないさ」

「って、何でヴェラ執務長官は最後に私を条件に入れてきたんですか！？ / / / /」

「ふつ、色々と絡みがあるかと思ってな。ああ、それと陵哉。お前が受ける試験、執務官試験も兼ね備えているからフェイトにでも手伝ってもらってくれ。俺は他の仕事で忙しいからな。」

本棚から本を何冊も取り出しながら、陵哉とフェイトの質問を返しては二の次にからかうような事を言ったり、しながら本を取り出す。ようやく全部取り出し終わると、それをフェイトの座っているソファの前のテーブルにドンツと置いた。それだけで重さはヒシヒシとつたあつて来る。

フェイトは執務官試験の難しさを知っているため、どれくらい勉強してきたのかとその勉強時間を思い出すとぶるつと寒気を感じた。

「まあ、試験についてはまた詳しく話すから、取りあえず今日はそれ全部持つて帰って試験対策しとけよ」

「はい。それでは、また」

「ヴェラ執務長官。今日はありがとうございました」

「ああ、2人とも気をつけて帰れよ」

挨拶がし終わると、参考資料を全て陵哉が持って部屋を退室する。フェイトもそれに続いて最後に部屋を出る前にヴェラに頭を下げて陵哉の後を追っかけて行った。ヴェラはポットの中のまだ少し残っているコーヒーをカップに注ぎ、

一気に飲み干す。

「ふう。ま、言う機会はいつでもあるか・・・」

その顔は少し嬉しそうな、それでもって少し寂しそうな表情をしていた。

第37話 違和感の正体

翌日 六課本部・廊下

「うん……何か、変だよなぁ」

「うん。なのはは、どうだと思っ？」

「ん……………」

翌日。フェイトは今感じている疑問を概容だけをなのはに話して意見を貰おうと思った。フェイトが感じた疑問とは、佳奈多とヴェラに話してもらった陵哉の過去話からでたもので、2人の話で出てきた陵哉が時間的に噛み合わないのだ。その事に昨日までは違和感と思っていたフェイトだがずっと考えているうちに、それは疑問へと移り変わっていた。

なんとか、自分なりに完結しようとしているのだが、どうしても気になってしょうがないのだ。

と、なのはが一番手っ取り早く、確実な方法を提案してきた。

「いつそのこと、陵哉君に聞いてみたら早いんじゃないかな？」

「うん…やっぱりそうなるのかなあ…」

「にゃ？ 何か不味い事でもあるの？」

なのはの提案に、フェイトは何か迷うように酷く曖昧な返答をする。その様子に何か気まずい雰囲気を感じたなのはは、好奇心で聞いてみる。

「フェイトちゃん。陵哉君と喧嘩でもしたの？」

「え？ あ、うん！！　　そういうんじゃないかな？　　……ないんだけど……」

「じゃあ、何？」

なのはが思った事を聞いてみると、フェイトはすごい勢いで否定したのだが段々と声が小さくなって、心なしか気持ちまで沈んでいる

様な気がする。

そんなフェイトの様子を心配して、こうなった原因を明確にする為にフェイトが話しやすいように優しい声で聞く。フェイトは何度か戸惑った後、なのはにしか聞き取れないような声でこうなった原因を話す。

「……陵哉の了解もないのに…勝手に陵哉の過去の事聞いちゃったことと…なのはに勝手に話しちゃって…悪いことしたなあ…って…思っ…て……」

「……………にやははははははは！！！！！！」

深刻な顔で言ったフェイトの言葉を、なのははきっかり5秒呆然として、その後思いつきり笑いだした。目の端に涙を浮かべ、フェイトを片手で指さし、もう片方のお腹を押さえながらそれはもう笑った。他の事を忘れて笑うだけの存在になったかのように笑った。その事に困惑しながらも、フェイトは何か底辺のところまで正気を取り戻して、なのはに何故笑うのか困惑しながらだが聞く。

「ふえ！？ え？ え？ 私、何か変な事言った？」

「にやははは！ だ、だって、そんな事で、にやははは！！ 一晚

も陵哉君に聞けずにつつと悩んで……くくく…私に相談するなんて……くふふ、可笑しすぎて……プッフ！ にやはははは！……」

それから幾人が通る六課局員に奇異の目で見られながら（フェイトはその事で頬を朱色に染めながら）も笑い続け、なのはとフェイトは数分後やっと笑い地獄から解放された（なのはは酸欠、フェイトは羞恥心という名の地獄から）。

なのはは深呼吸をして、息を整えるとフェイトに向き直り、笑顔をむける。

「はあ、笑った。ごめんね、フェイトちゃん」

「もう、なのはったら……笑いすぎだよ……」

「だからごめん。なんか、フェイトちゃんが可愛く見えちゃって」

「ふえ！？ ちょっと…なのは！ いきなり何言ってるの！？ / /
/」

落ち着いたなのはがフェイトに素直に謝ると、拗ねたフェイトがツーンとした態度でなのはを静かに責める。しかし、なのはの素直な

言葉に頬を赤らめて声を少々荒げて咎める。そんなフェイトに又しても可愛いと思って、面白い物を見つけた様な視線を発する。しかしなのはは、きっぱりとその視線の元を断ち切って、それを吐き出すように溜息をつく。頬を赤らめ咎めていたフェイトはなのはの雰囲気を感じたのか、心を落ち着かせる為に深呼吸を繰り返す。フェイトが落ち着いた頃合いを見て、なのはが話し始める。

「まあ、フェイトちゃんが何に悩んでいるかはわかったけど……そんなに深く考える事じゃないと思うよ。陵哉君そんな事で怒る様な人じゃないしね」

「それは……わかってはいるんだけど……やっぱり、陵哉に会おうとすると………なんだか………」

「ん……気持ちとは分かんないけど……こればかりは私が介入すべき事じゃないし……フェイトちゃんと陵哉君だけで解決すべき事だと思うよ。でないと、これを凌駕する問題が降りかかってきた時、きっと何にも解決できなくなっちゃうと思うよ?」

「……………うん。ありがとう、なのは」

真剣な声でなのはが言う中、フェイトはというと顔を俯かせて沈んだ声で弁解する。そんなフェイトなのはは優しく自分で解決する

ように説得する。フェイトにとっては大きい問題かもしれないが周りから見れば小さい事に思えるこの問題を、他人が介入して解決したところでフェイトにとって何もならず、そしていずれこの問題を凌駕する大きな問題が降りかかってくる時に、何も解決出来ずに取り返しのつかない状態になることだってある。そう思っ、なのはフェイトに思った事を伝えた。

なのはの言い分を聞いたフェイトは深く逡巡した後、沈んだ顔のままだったがお礼を言った声と瞳には幾分かのやる気は見て取れた。

「どういたしまして。じゃあ、私ははやてちゃんの仕事を手伝ってくるから」

「うん。じゃあ、また後で」

「うん。頑張ってね、フェイトちゃん」

激励の言葉をフェイトに送ると共に手を振ると、軽やかなスキップでその場を去っていく。足が地に付くと同時に彼女のサイドポニーが激しく揺れ動き、その背中はどこか嬉しさをはらんでいるように見えた。

同所・陵哉の部屋前

不安な表情を拭いきれないまま、フェイトは陵哉の部屋の前まで何とかこられた。因みにこの部屋は陵哉がしっかりと試験対策が出来るようにとフェイトがはやてに頼み込んで用意してもらった部屋だ。エリオと同室させようかと思っていたのだが、やはり執務官試験の混合という事で少しでも集中を削ぐ事がないようにとフェイトからの申し出と陵哉が出来ればキッチン付きの部屋がほいしと言ったので1人部屋を用意してもらったのだった。

フェイトは深呼吸を3度繰り返して、3度目の息を吐き出した後、意を決したかのように扉の横に付いているインターホンを押して、陵哉を呼ぶ。

『誰だ？』

「私…… フェイトだけど…… 今大丈夫？」

『入ってくれ』

それだけの会話で終わり、フェイトは念の為もう一度深呼吸をして扉を開けて中に入った。

内装は殆どフェイト達隊長陣とほぼ同じ造りで違うところと言えば、

段差を点けてスペースを造っていない事と部屋の入口から左奥にキッチンがある事位だ。片づいていて部屋の隅に潰した段ボールがナイロンの紐で縛られてまとめられていた。他の場所を片づいていて特にキッチンは、台所の上に最低限の器具が備えられていて、軽く作るぐらいならどうってことないほどだった。

そして、この部屋の主の陵哉は入口から右奥の手洗い場へ続く道の手前に置いてあるシングルベッドより入り口側に設置している机と椅子があり、その椅子に座って机に置いてある分厚い本を肩肘つきながら読んでいる。瞳は常に動いていて、まるで止まる事を忘れたかのように本に書かれている文字を追っていた。そして、数秒後には次のページを捲ったのだが、切りが良かったのか栞を挟んで本を閉じ、入ってきたフェイトに顔を向ける。

「ふう〜……執務官も結構大変だな…こんなにも覚える事がある」

「ふふ、そりゃそうだよ。どう？ 勉強の成果は」

「まあ、順調かな……一応入局試験の方は一通り終わって、さつき執務官試験の勉強に入ったばかりでな…今は法律関係を覚えている最中だ」

机の上を整理しながら陵哉が当り前の事を言うと、フェイトが口元を押さえて微笑む。勉強の成果を聞くと、可もなく不可もなくと言った感じの答えが返ってきた。しかし、フェイトはこの答えに少々

驚いていた。入局試験の方でも、かなり勉強しなければ受からない人が多いことは確かで、一朝一夕の勉強では落ちると言う事は確定であつた。しかし、陵哉は昨日から勉強し始めたばかりで、殆どと言つていいほど勉強する時間があつたとは思えなかつた。ある一つの時間を削らなれば……

「陵哉。昨日何時間……眠った？」

40分

ガシッ！
バフ

「おいおい、いくらなんでもまだ昼間だぜ？　まあ、別にお前が性欲抑えられないならやってやってもいいが」

「なっ！？／／／／／／／／／／／／／／／／ち、違う！！
陵哉があんまりにも眠ってなかったから強制的に眠らせるの！！」

フェイトがさり気無く陵哉の昨日の睡眠時間を聞くと、陵哉は普通の人から見て全くと言っていいほど眠っていなかった。魔導師でも……いや、魔導師だからこそしつかりと睡眠を取らなければ魔法を扱う時に支障が出る可能性があるからだ。

睡眠時間を聞いた瞬間、フェイトは陵哉の両肩を掴んでベッドに押し倒した。その行動に少々驚きながらも陵哉はフェイトに困った口調で言ったが、実際は思いつきからかっている。フェイトは『性欲』と聞いた瞬間に顔をボンツと真っ赤に染めながら、その恥ずかしさを吐き出すように陵哉を怒鳴る。

「本当に構わんぞ。もう十数年もこの睡眠時間で身体を壊した事がない」

「え？ 十数年も？」

「ああ、多分ゼヘル達に関連しているんだと思う。あいつら俺とリンクーコアで繋がっているから……俺が40分寝れば、俺とあいつらで9だから、9倍して……6時間眠った事になるんだよ」

反応を見た後、陵哉は急に真剣な瞳をしてフェイトの両手を自分の肩から外しながら話した。フェイトは陵哉の真剣な瞳を見ると、顔の血が引いて心を落ち着かせる事が出来た。ベッドの端に腰を掛け、陵哉の話を驚きながら聞いている。話し終わった陵哉は片手で顔を

覆い視界を塞ぐ。

この状況でフェイトは、やっとあの事について聞ける覚悟が出来た。そして、ポツリと呟くように陵哉に聞く。

「ねえ……陵哉……1つ聞いてもいい？」

「ん？ 別に構わない」

「その……佳奈多とヴェラ執務長官に陵哉の過去の事を聞かせてもらったの……それで、よく考えてみると2人の話の辻褄が合わないから……昨日からずっと考えて……なのはにも相談に乗ってもらおうと思って……私が疑問に思っているところだけ話したんだけど……やつぱり、陵哉に聞いた方が早いって言われて……それで」

「俺に疑問の答えを貰って、なのはに無断で話した事を謝りたい……そんなところか？」

「……うん」

確認を取ると、陵哉は盛大な溜息を吐いた。全て吐き終えると、陵哉もフェイトと同じようにベッドに座る。不安そうな瞳で陵哉を見つめるフェイトは、今すぐにでも逃げ出したいと訴えかけるような

表情をしている。そんなフェイトを落ち着かせるように、陵哉はフェイトの髪を撫でながら微笑みかけ、優しい声音で言葉を紡ぐ。

「そんな不安そうな顔すんなよ。俺はそんな事で怒らないし、軽蔑したりもしないから……というか、正直嬉しいよ。俺なんかの事でそんなに悩んでくれている事が…な？」

「ほんと…？」

「言つたろ？ 俺は、お前と佳奈多には嘘はつかないって」

「陵哉ぁ！」

「うおっと」

「ひつく……うえ」

幼子をあやす様な声と髪を撫でる動作、そして自分の悩んでいた事自体を嬉しいと言ってくれた陵哉の言葉に安堵と嬉しさが込み上げてきて陵哉の胸に飛び込んで、不安という感情を全て涙に換えて流す様に泣き続けた。一瞬困惑した陵哉だったが、すぐに心を落ち着かせて片手でフェイトの髪を撫でながらもう一方の手を背中に回す。

それに呼応するかのようにフェイトも、両手で陵哉の背中に回して涙が枯れるまで、今自分が最も安心できる場所で泣き続けた。

同所 数分後

「落ち着いたか？」

「う…うん……ありがとう／＼／／」

そそくさと陵哉から離れ、恥ずかしそうにしながらもフェイトは微笑んで陵哉にお礼を言った。フェイトの頭をポンポンと優しく撫でるように叩いた後、陵哉はキッチンに向かって戸棚から小さな片手鍋と未開封の一本の瓶を取り出し瓶の封を開け、鍋の中に水を淹れてコンロの上に置いて火にかける。引き出しの中からティーバッグを取り出して瓶の中から茶葉を出しティーバッグの中に入れてポットの中に置く。沸騰したての熱湯をポットの中に淹れて、そのポットごと熱湯が残っている鍋の中に入れて、きっかり3分蒸らして鍋からポットを取り出し布巾で拭いた後、用意していたカップの中に注ぐ。

それをフェイトの所に戻って、フェイトにカップを渡して、折りたたみ式のテーブルを出してベッドの横に置く。

「陵哉？」

「紅茶には精神安定剤の様な効果があるから……それを飲んでからお前が悩んでいる事を話してくれ」

「……ありがとう」

陵哉がコーヒーではなく紅茶を出してきた事に疑問を感じたフェイトだったが、陵哉が疑問を言う前に答えを言われフェイトはまたお礼の言葉を紡いだ。

紅茶を冷ましながらい口飲んだ後、深呼吸をすると紅茶の良い香りに癒されて、自然と心が落ち着いていた。それと共に緊張の糸が緩んでポツリポツリと、佳奈多とヴェラから聞いた陵哉の過去話を話し始めた。陵哉はフェイトが話しやすいように優しい表情を浮かべて相槌も打たずに、静かにフェイトの話を聞いている。

話が終わると、フェイトは包むように持っていたカップを机の上に置いて陵哉を見た。陵哉はフェイトの視線を感じいて、深く考えるように目を瞑って顔を天井に向ける。

「確かに可笑しいな……正直俺は佳奈多とは研究所を出た後、一度も会った事はない。時々念話で話していたぐらいで、実際には一度

も会った事はない」

「そうなの？ ん、けどやっぱりそうなるんだよね？ ヴェラ執務長官から別れた後、殆ど知り合いには会ってないって言ってたもんね」

「ああ、知り合いには会った事はなかった………そういえば、強哉の研究所でまだ調査していない場所とかあるか？」

「え？ んと、第41管理内世界：ギグラ と 第76管理外世界：ジェガラ の2つだけだけど……」

「…そっか……まあ、この話はまた今度でいいか。」

取りあえず、師匠が話してくれた話が俺の過去だ。佳奈多の話は俺にもわからない……」

記憶を辿りながら、佳奈多とはここで再開するまで一度も会った事はないと断言する陵哉。フェイトは昨日の本局からの帰りに話した事を思い出して呟くように言う。肯定した陵哉は、以前渡した強哉の研究所のデータの事を思い出して、顔をフェイトに向けて調査していない次元世界を聞くと、残り2つだけ調査が行われていないという事だった。又も深く考えるような顔を見ると、パツと表情を崩して頭をかいた後、確定するかのようにヴェラの話が本当だと告げた。

「うんわかった、ありがとう。それより、ごめん。試験勉強中なのにこんな事で時間を取ってくれて」

「気にしないでいいさ。そろそろ切り上げようかと思っていたところだったからな。お前はいいのか？ 仕事は残ってるんじゃない？」

「ううん。大方の仕事は殆ど終わってるから、陵哉のお手伝いでもしようかなあ」と

微笑みながらお礼を言った後、申し訳なさそうに謝ったが、陵哉は本当に気にしてない様子でフェイトを安心させるように言う。言った後にフェイトの仕事が残ってないかと心配したが、どうやら大方の仕事は終わらせて、陵哉の試験勉強の手伝いをする申し出てくれたのだ。現執務官から直接指導をしてもらえるというのは何とも心強いと陵哉は思った。

「へえ、そつか……んじゃ、法律関係が終わったらでいいんだが、1つ頼みがある」

「ん？ 私にできる事なら何でもいいよ」

「それじゃ、遠慮なく言うけど。スターズとライティングの隊長・副隊長と模擬戦をさせてくれるよう頼んでくれないか？」

「へ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2920s/>

魔法少女リリカルなのは blood eight

2011年11月23日14時54分発行